

学生による授業認識 と大学教育

大東文化大学授業認識報告書（全学データ）

2022 年度

大東文化大学

目次

1. はじめに.....	3
2. 授業関連アンケートにかかる前年度からの変更.....	4
2.1 2021 年度に実施したアンケート.....	4
2.2 2022 年度に実施したアンケート.....	5
3. 結果.....	7
3.1 2022 年度前期・学生による授業認識アンケート.....	7
3.2 2022 年度後期・学生による授業認識アンケート.....	32
4. 各学部・学科によるアンケート結果についての考察.....	58
文学部 日本文学科.....	58
文学部 中国文学科.....	59
文学部 英米文学科.....	60
文学部 教育学科.....	61
文学部 書道学科.....	62
文学部 歴史文化学科.....	63
経済学部 社会経済学科・現代経済学科.....	64
外国語学部 中国語学科.....	66
外国語学部 英語学科.....	68
外国語学部 日本語学科.....	69
法学部 法律学科.....	70
法学部 政治学科.....	71
国際関係学部 国際関係学科・国際文化学科.....	73
経営学部 経営学科.....	74
スポーツ・健康科学部 スポーツ科学科.....	75
スポーツ・健康科学部 健康科学科.....	77
スポーツ・健康科学部 看護学科.....	79
社会学部 社会学科.....	81
5. おわりに.....	84
資料.....	85
1. 大東文化大学全学 FD 委員会規程.....	85
2. 2022 年度 学生による授業認識アンケート実施要項.....	87

1. はじめに

全学 FD 委員会
委員長 静 哲人

2022 年度は、2020 年初頭から蔓延しだした新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によるいわゆるコロナ禍の 3 年目にあたる年であった。感染状況の変化に対応して授業の実施方法が対面式、オンデマンド式、オンライン式、あるいはハイブリッド式と学年途中・学期途中で変わらざるを得なかった 2021 年度に比べれば、基本的に全学的に対面授業が継続でき、いわば「通常営業」が再開された 2022 年度は、学生たちも比較的落ち着いて学修に取り組めたのではないかと推察する。たった今「学生たち」とひと括りにしたのだが、2020 年度入学生にとっては、2022 年度になって事実上初めての「リアル」キャンパスライフを味わい、担当教員やクラスメートと初めて「リアル」で対面したようなケースもあったはずだ。

ただし「対面」と言っても、コロナ以前のそれとは大きく異なる点がある。他でもない、互いの顔を覆うマスクの存在である。感染予防の効果についての異論は少ないが、対人コミュニケーションにおけるマスクの負の影響についてはすでに多くの考察がなされている。特に幼稚園児や保育園児にとって相手の顔・表情が見えづらいことが発達上に悪い影響を与えているのではないかという説は頻繁に聞かれる。それとはレベルが異なるにせよ、大学生が授業を受けるに際しても全員がマスクをしていることが、学習効果・教育効果に全く何の影響も与えていない、とは考えにくいだろう。

教員の立場からしても、マスクのある顔の学生たちしか見えないために「顔」と名前の一致がコロナ以前より格段に難しい。学生同士でもおそらく同じような感覚を抱くのではないか。そのことが対人的インタラクションに微妙に影響しないはずはないだろう。個人的には、全員マスクをして実施する対面授業と、画面越しにせよマスクなしの顔をお互いに見ながら実施するオンライン授業では、どちらがお互いに人間的な親しみを感じられるだろうか、と自問することもある。これを書いている 2023 年 3 月現在、国としてのマスクの扱いを変えようという動きがあるが、万人が自発的にマスク無しの生活に戻ろうと思う日はまだ遠いだろう。状況の好転が待たれる。

昨年度までの 2 年間、初めてのオンライン授業、オンデマンド授業、ハイブリッド授業の中で学生も教員も未知との格闘を続けてきた。その中で、果たして「授業」の本質とは何なのか、知識が伝達されれば成功なのか、文字だけでは伝わらないものは何なのか、画面を通してでは学べないものは何なのか、対面でしか得られないものは何なのか、リアルタイムの質問とフィードバックにあって LMS (Learning Management System: 本学の場合は manaba) を通じたフィードバックにないものは何なのか、逆に LMS を通じれば可能だが対面授業では難しいものは何なのか、学生同士の学び合いからは何が生まれうるのか、など数々の疑問を感じ、各人各様に答えを模索してきたはずだ。

対面授業が全面的に再開された 2022 年度には存在し、一部はオンライン式であった 2021 年度には存在しなかったものは果たしてあったのか、なかったのか。その答えを見つけるためのひとつのデータを提供するのが「学生による授業認識アンケート」であることは間違いないだろう。本報告書は 2022 年度の授業関連アンケートの詳細と結果をまとめたものである。アンケートの実施にあたってご理解とご協力を賜ったすべての学生および教職員の方々に心より感謝したい。

以上

2. 授業関連アンケートにかかる前年度からの変更

2.1 2021 年度に実施したアンケート

2021 年度版『学生による授業認識と大学教育』で詳しく述べたが、2021 年度には前年度までの実績を踏まえつつ大幅なアップデートを行った。2021 年度に変更した点を、要点のみ再掲すると以下の通りである。

(1) アンケートの名称内の「評価」という文言を「認識」に変更した。

2021 年度のアンケートからは名称内に「授業評価」という表現を使わず、代わりに「授業認識」という表現を使うこととした。「評価」という文言は、その内容が正しいもの／妥当なものであるという含意を多少なりとも持つと思われるが、「認識」であればそのような含意のないニュートラルなものとなり、より実態に即したものとなると考えたからである。

(2) アンケートの文言を見直した。

授業分野に関わらず、どのような教員・学生であっても評価が共有できると思われる命題のみ（例えば、「提出物に対するフィードバックは丁寧になされたほうが、そうでないよりも良い」「授業内容はシラバスに沿っていたほうが、沿っていないよりも良い」）に基づいたアンケート文言になるように、ほぼゼロから作り直した。

(3) 教員に対するアンケートを初めて実施した。

従来は授業に関するアンケートは学生に対してのみ実施してきた。しかし(2)で述べたような「授業についての認識」を調査対象とするならば、同じ授業を学生の側から見た時と教員の側から見た時では、見え方がどのくらいまたどのように異なるのか（あるいは異なるのか）、は興味深いことであった。そこで学生に対する設問と同様の設問を教員に問うことで、同一の授業について、「受け手である学生の認識」と「送り手である教員の認識」を比較対照してみることにした。

(4) 評価に関するアンケートを初めて実施した。

従来のアンケートでは、「その授業の成績評価を知った後で、学生がその授業についてどう考えたのか、その成績評価についてどう考えたのか」は一切調べていなかった。もしそのような情報が得られたならば、その後の授業運営の参考にできるはずであると考え、学生が成績評価を知ったあとで、その評価をどのように（厳しすぎる、適正である、甘すぎる等）認識しているのかを調べることにした。

(5) 頻度を増やし、フィードバックを早めた。

従来は年度に1度実施していたのみであり、かつその結果の集計フィードバックも十分に迅速であったとは言い難い。このためアンケートを実施してその結果をそのすぐ後の授業運営に活かすという本来の目的が十分には達せられていない面があった。そこで2021年度はアンケートを前期末、後期末に実施し、かつ前期末アンケートの結果は後期授業開始前までに、後期末アンケートの結果は次年度前期授業の開始前までに学内的なフィードバックを完了し、授業改善のためという目的により役立てやすいようにした。

(6) 結果を学生にも明示的にフィードバックした。

従来は、授業アンケートの結果は学生に直接フィードバックされていなかった。アンケート実施後半年から1年ほどもたった時期に大学 HP に報告書が掲載されるのが学生に対する唯一のフィードバックであった。しかし時間をかけてアンケートに回答した学生たちには、その結果がどうであったのか、授業についてどのような示唆が得られたのか、などを迅速に知らせる必要があると考え、アンケート結果を学部長会議で報告すると同時に必ず DB ポータル（学内ネットワーク）を通じて全学生に直接配信することとした。

以上の基本的考え方に基づいて、2021 年度の授業関連アンケートのラインナップは以下の通りだった。

アンケート名称	実施タイミング	何を調べるか
(1) 学生による授業認識アンケート【前期】	前期授業終了前	学生は授業をどう認識したか？
(2) 教員による授業認識アンケート【前期】	前期成績入力時	教員は授業をどう認識したか？
(3) 学生による評価認識アンケート【前期】	前期成績判明後	学生は評価をどう認識したか？
(4) 学生による授業認識アンケート【後期】	後期授業終了前	学生は授業をどう認識したか？
(5) 教員による授業認識アンケート【後期】	後期成績入力時	教員は授業をどう認識したか？
(6) 学生による評価認識アンケート【後期】	後期成績判明後	学生は評価をどう認識したか？

2.2 2022 年度に実施したアンケート

以上のような大幅な変更を加えた 2021 年度から、2022 年度はさらに次のような変更を加えた。

(1) 「教員による授業認識アンケート」を、2022 年度は実施しないこととした。

2021 年度は、前期に一回と後期に一回、合計 2 回「教員による授業認識アンケート」を実施した。結果の詳細は 2021 年度版『学生による授業認識と大学教育』をお読みいただきたいが、判明した傾向のポイントのみ述べるならば、以下の通りである。

- (1) ある授業に関する教員の認識は、その授業に関する学生の認識と、基本的にはかなりの程度一致しており、相関も高い。
- (2) ただし授業に関する総合的な満足度に関しては概して教員の方が学生よりも『厳しい』。すなわち自らの授業について学生の側が満足であると感じていても、当該の教員は同程度までの満足を感じるには至らない傾向がある。」

判明したこの傾向が前期・後期を通じて一貫したものであったこと及び内容的に「確からしい」ものであったことに加え、評価提出の時期と重なったの本アンケートの回答は教員には負担感があるとの意見が少なからずあったことに鑑み、教員による授業認識に関しては 2021 年度の 2 回の実施によって十分に傾向が判明したと判断し、2022 年度は実施する必要はないと結論づけたものである。

(2) 「学生による評価認識アンケート」を、2022 年度は実施しないこととした。

学生が評価をどう捉えているかに関するアンケートもやはり 2021 年度前期、後期と合計 2 回実施した。結果を簡潔にまとめると以下の通りである。

- (1) 回答率は前期が 12.1%、後期が 2.8%と極めて低かった。
- (2) 回答したのは S または A を付与された学生がかなりの割合を占めた。
- (3) それらの学生たちの評価に対する認識は「概ね妥当である」というものがほとんどであった。
- (4) 評価が S→A→B→C→D と下がるに従って、「低すぎる／厳しすぎる」という回答が順次上昇した。しかし E を付与された学生の回答には「低すぎる／厳しすぎる」という回答は多くなかった。
- (5) 「低すぎる／厳しすぎる」という回答の理由としては「なぜその評価になるのか基準が理解できない、納得できない」というものと、単純に「授業やテストが難解である」というものがおよそ同数であった。

すなわち、回答があった学生たちに限っては、自分たちに付与された評価は概ね納得できるものだと認識していることが確認できたと言って良い。そして付与された評価が下がるにしたがって「評価が低すぎる」という認識が増えるのは、ある意味自然なことであり、それをもって評価の妥当性に直ちに疑問が呈されるものではない。また極端に低い回答率は、学生の側がすでに与えられた評価についての認識を回答することに意義を見出せていないことの反映と思われる。

以上の理由から、学生による評価認識に関しても、2021年度の2回の実施によって十分に傾向が判明したと判断されたため、2022年度は実施する必要はないと結論づけたものである。

(3) 各学部・学科による考察を、年度末の一回のみとした。

2021年度は、前期の授業関連アンケートの結果がまとまった直後と、後期の授業関連アンケートがまとまった直後の合計2回、各学部・学科による考察を依頼し、報告を提出してもらっていた。2022年度は、より俯瞰的・大局的な観点からの考察が可能となるように、学年末の1回のみ、考察依頼を行うこととした。

すなわち2022年度の授業関連アンケートの実施は以下のものであった。

アンケート名称	実施タイミング	何を調べるか
(1) 学生による授業認識アンケート【前期】	前期授業終了前	学生は授業をどう認識したか？
(2) 学生による授業認識アンケート【後期】	後期授業終了前	学生は授業をどう認識したか？

3. 結果

3.1 2022 年度前期・学生による授業認識アンケート

1. 目的

履修学生の授業に対する認識を調査することで授業の内容や方法の改善に役立てるために実施した。

2. 実施の対象

- (1) シラバスに記載されている開講科目（大学院の科目を除く）。但し、受講者が5名未満の科目、オムニバス科目、専門演習科目（ゼミ）については対象外とした。
- (2) 実施対象科目を全学FD委員会にて選定し、各学部学科にて精査したうえ決定とした。

3. アンケート項目

2022 年度前期の授業に関する学生の認識アンケートの項目は以下の通りであった（2021 年度と同一）。

Q1a あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか。[シラバス既知]

- 2 (はい、(おおよそ) 知っています)
- 1 (いいえ、知りません)

Q1b この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。[シラバス通り]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

- 5 (とても難しかった)
- 4 (やや難しかった)
- 3 (適切だった)
- 2 (やや易しかった)
- 1 (とても易しかった)

Q3a あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。[メール連絡]

- 2 (はい、あります)
- 1 (いいえ、したことはありません)

Q3b 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)

- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q4a この授業では提出物を出しましたか。[提出経験]

- 2 (はい、出しました)
- 1 (いいえ、出していません)

Q4b 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q5 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[自分意欲]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q6 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q7 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長実感]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q8 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

- 10 (100%) 9 (90%) ... 2 (20%) 1 (10%)

Q9a 授業について良かった点があれば具体的に書いて下さい（授業担当教員が直接読みます）。

Q9b 授業について改善すべき点があれば具体的に書いて下さい（授業担当教員が直接読みます）。

4. 結果

4.1 対象科目数

対象科目数は 2,067 科目、対象のべ学生数（各対象科目内の履修者数の合計）は 95,720 名であった。これを本報告の集計・分析対象とする。

4.2 のべ回答者数と回答率

回答者数は設問によって異なる。最も包括的な設問である Q8 に回答したのべ学生数は、24,078 名である。よって回答率は $(24,078/95,720 = 0.2515)$ 25.15%である。この数値は Web 方式のアンケートとしてもやや低いと言えるだろう（2021 年度前期は 29.70%）。学科／部局別回答率および学年別回答率を図表 1 に示す。

図表 1 学科／部局別（左）および学年別（右）回答率

学科／部局	回答あり	未回答	合計	回答率
a 日本文学科	622	1576	2198	28.30%
b 中国文学科	263	859	1122	23.44%
c 英米文学科	1057	3633	4690	22.54%
d 教育学科	1711	6585	8296	20.62%
e 書道学科	227	1214	1441	15.75%
f 歴史文化学科	532	2450	2982	17.84%
g 社会経済学科	1538	3967	5505	27.94%
h 現代経済学科	973	4044	5017	19.39%
i 中国語学科	991	2385	3376	29.35%
j 英語学科	2384	5829	8213	29.03%
k 日本語学科	381	936	1317	28.93%
l 法律学科	2729	6135	8864	30.79%
m 政治学科	1253	3983	5236	23.93%
n 国際関係学科	1066	1920	2986	35.70%
o 国際文化学科	604	1804	2408	25.08%
p 経営学科	2632	9533	12165	21.64%
q スポーツ科学科	1228	4889	6117	20.08%
r 健康科学科	790	2771	3561	22.18%
s 看護学科	368	966	1334	27.59%
t 社会学科	2110	3864	5974	35.32%
u 教職課程センター	526	2201	2727	19.29%
v 国際交流センター	93	98	191	48.69%
合計	24078	71642	95720	25.15%

学年	回答あり	未回答	合計	回答率
1	11415	20178	31593	36.13%
2	7359	24127	31486	23.37%
3	4360	19745	24105	18.09%
4	944	7592	8536	11.06%
合計	24078	71642	95720	25.15%

最も回答率が高かった学科は国際関係学科で 35.70%であった。部局では国際交流センターの 48.69%が高かった。学年別に見ると 1 年 > 2 年 > 3 年 > 4 年と回答率が漸減したのが分かる。これは昨年と同様の傾向である。

4.3 結果

Q1a～Q8 までの質問項目ごとに結果を提示してゆく。分析の単位は個別授業に関して回答した個々の学生の回答である。すなわち個別授業ごとに学生の回答をまとめることはしていない。例えば「A 学科の平均値」とは「A 学科で開講していた複数科目に関して回答したすべての学生の回答を平均した値」を指す。授業によっては

回答学生数が極めて少ないため個別授業ごとの平均値を出してからそれをさらに平均するという手順は避けた。
 なお Q9a と Q9b (自由記述) については本報告では扱わない。

4.3.1 【Q1a】 あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか。 [シラバス既知]

全学では 2 「知っている」と回答したのは 78.18% (昨年度は 79.84%) であった。やはり 2 割ほどがシラバスを承知していない。学科／部局別および学年別の内訳を図表 2 に示す。「知っている」と回答した比率が最も高かった学科は看護学科で 89.43% であった (昨年度はやはり看護学科で 89.61%)。部局で高かったのは国際交流センターの 90.32% であった (昨年度は同じく国際交流センターの 91.82%)。学年別には 1 年 < 2 年 < 3 年 < 4 年と漸増しており、4 年が明らかに高い。

図表 2 Q1a 「シラバス既知」 の学科／部局別 (左) および学年別 (右) 回答

学科／部局	1	2	学年	1	2
a 日本文学科	19.14	80.86	1	23.98	76.02
b 中国文学科	19.85	80.15	2	21.44	78.56
c 英米文学科	23.72	76.28	3	18.57	81.43
d 教育学科	25.07	74.93	4	13.54	86.46
e 書道学科	25.11	74.89			
f 歴史文化学科	23.87	76.13			
g 社会経済学科	13.67	86.33			
h 現代経済学科	18.87	81.13			
i 中国語学科	30.24	69.76			
j 英語学科	25.81	74.19			
k 日本語学科	18.37	81.63			
l 法律学科	23.22	76.78			
m 政治学科	23.67	76.33			
n 国際関係学科	10.65	89.35			
o 国際文化学科	14.24	85.76			
p 経営学科	19.2	80.8			
q スポーツ科学科	25.57	74.43			
r 健康科学科	20.66	79.34			
s 看護学科	10.57	89.43			
t 社会学科	25.26	74.74			
u 教職課程センター	27.84	72.16			
v 国際交流センター	9.68	90.32			

注： 2 「知っている」 1 「知らない」

4.3.2 【Q1b】 この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。 [シラバス通り]

この設問は Q1a で 2 「はい (おおよそ) 知っています」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は 4.30 (昨年度は 4.32) で標準偏差は 0.77 (昨年度は 0.75) と、昨年度からほとんど変わっていない。学科／部局別および学年別の数値を図表 3 に示す。学科で平均値が最も高かったのは中国文学科の 4.54 (昨年度前期は日本語学科と国際関係学科がいずれも 4.49) であった。部局では国際交流センターが 4.73 (昨年度前期は 4.76) と高い値であった。表には掲載していないが全学共通科目群 (のべ 3698 名) の値は、平均 4.32、標準偏差 0.77 であった。また学年による違いはほとんどない。

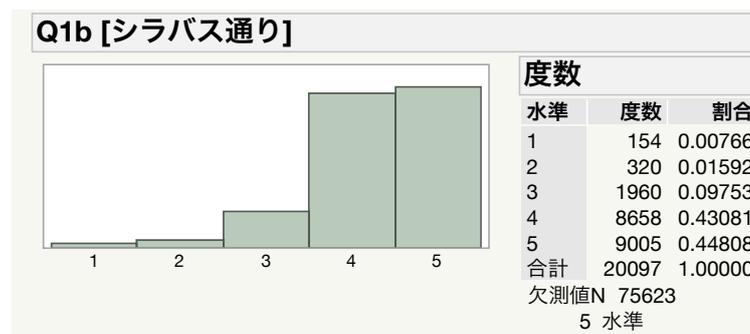
表3 Q1b「シラバス通り」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	523	4.36	0.70
b 中国文学科	216	4.54	0.69
c 英米文学科	857	4.33	0.74
d 教育学科	1391	4.24	0.80
e 書道学科	179	4.46	0.74
f 歴史文化学科	427	4.34	0.72
g 社会経済学科	1395	4.34	0.70
h 現代経済学科	829	4.29	0.80
i 中国語学科	795	4.22	0.80
j 英語学科	1935	4.28	0.79
k 日本語学科	320	4.48	0.68
l 法律学科	2260	4.24	0.78
m 政治学科	1054	4.16	0.79
n 国際関係学科	985	4.42	0.74
o 国際文化学科	540	4.39	0.75
p 経営学科	2256	4.26	0.80
q スポーツ科学科	992	4.40	0.76
r 健康科学科	645	4.35	0.72
s 看護学科	339	4.36	0.75
t 社会学科	1667	4.25	0.74
u 教職課程センター	408	4.23	0.81
v 国際交流センター	84	4.73	0.55

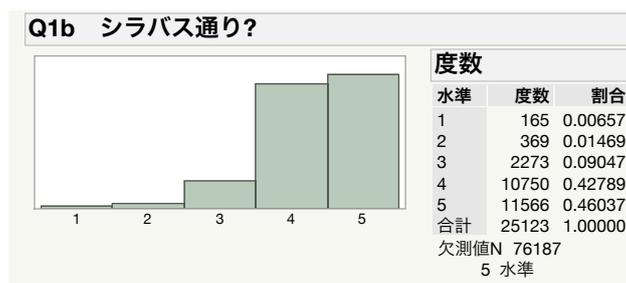
学年	数	平均	標準偏差
1	9280	4.32	0.76
2	6199	4.28	0.77
3	3772	4.25	0.80
4	846	4.37	0.69

より詳細なデータとして5～1の段階別の分布状況を示す。まず全学の分布は図表4の通りである。5が、強くそう思う、4が「どちらかと言えばそう思う」なので、4と5の合計で、87.88%（昨年度前期は88.82%）の学生が「シラバスは記述どおりに行われた」と認識したことになる。概ね満足できる結果であると言ってよいだろう。

図表4 Q1b「シラバス通り」に対する全学の回答分布



参考：昨年度前期



学科／部局別回答分布を図表5に示す。学科／部局ごとの、1「まったくそう思わない」～5「強くそう思う」のそれぞれを回答した学生のパーセンテージを示している。5と回答した割合で降順にソートした。

平均値上では明確ではなかった違いが、5を選んだパーセンテージには見られるようだ。5「強くそう思う」の割合が最も大きかったのは中国文学科で62.96%であった（昨年度前期は国際関係学科の57.7%）。5と4「そう思う」を合わせた割合が最も大きかったのは日本語学科で93.44%であった（昨年度前期は同じく日本語学科の94.21%）。部局では国際交流センターが高く、5が77.38%（昨年度前期は79.21%）、5と4を合わせると95.24%（昨年度前期は99.01%）であった。

図表5 Q1b「シラバス通り」に対する学科／部局別回答分

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.57	0.57	7.65	44.74	46.46
b 中国文学科	0	2.31	4.63	30.09	62.96
c 英米文学科	0.58	1.63	7.93	43.52	46.32
d 教育学科	1.08	1.87	11.14	44.14	41.77
e 書道学科	0	2.23	8.38	30.73	58.66
f 歴史文化学科	0.23	1.17	9.84	41.45	47.31
g 社会経済学科	0.43	0.86	8.24	45.3	45.16
h 現代経済学科	0.72	2.41	10.25	40.41	46.2
i 中国語学科	1.01	1.51	12.83	43.65	41.01
j 英語学科	0.93	1.5	11.01	42.07	44.5
k 日本語学科	0.63	0.31	5.63	36.88	56.56
l 法律学科	0.84	1.86	10.93	45.04	41.33
m 政治学科	1.14	1.52	13.09	48.58	35.67
n 国際関係学科	0.61	1.83	6.4	37.77	53.4
o 国際文化学科	1.3	0.93	5.74	42.04	50
p 経営学科	1.06	2.17	9.22	45.04	42.51
q スポーツ科学科	0.4	1.11	11.09	33.27	54.13
r 健康科学科	0.31	0.93	10.08	41.09	47.6
s 看護学科	1.18	0.29	8.26	42.18	48.08
t 社会学科	0.54	1.86	9.18	49.37	39.05
u 教職課程センター	0.74	2.45	12.25	42.4	42.16
v 国際交流センター	0	0	4.76	17.86	77.38

学年別回答を図表6に示す。学年による違いはほとんどないと考えてよいと思われる。

図表6 Q1b「シラバス通り」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	0.67	1.49	9.62	42.07	46.15
2	0.74	1.65	10.29	43.09	44.23
3	1.11	1.94	9.89	45.07	41.99
4	0.47	0.83	6.62	45.27	46.81

4.3.3 【Q2】 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

この設問の回答は、5「とても難しい」～1「とても易しい」であり、真ん中が3「ちょうどよい」であるので、数値が高いほど良いわけではないことに再度留意したい。全学の平均は3.60（昨年度前期は3.57）、標準偏差は0.81（昨年度前期は0.79）であった。すなわち昨年度に引き続き、「ちょうどよい」と「やや難しい」の間に平均があるということであり、全体の傾向としては適切と言えるだろう。

学科／部局別および学年別の平均値を図表7に示す。学科でもっとも数値が高かった（＝難しく感じられていた）のは健康科学科の3.82（昨年度前期は環境創造学科の4.07）であった。平均値が最も3に近かったのはスポーツ科学科の3.24（昨年度前期はやはりスポーツ科学科の3.22）であった。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ4371名）の値は、平均3.52、標準偏差0.77であった。学年別には、昨年度前期は学年が下であるほどやや難しいと感じる傾向があったが、今回のデータからはそのような傾向は読み取れない。

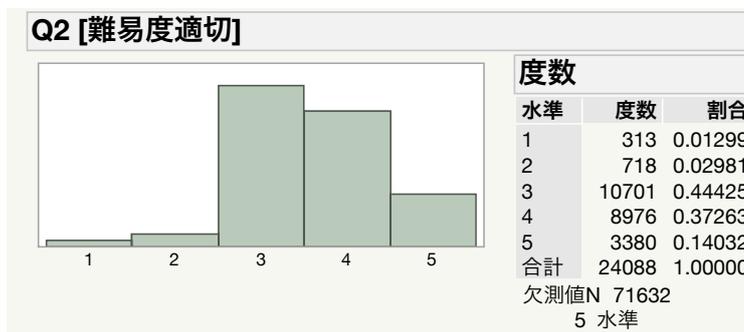
図表7 Q2「難易度適切」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	628	3.33	0.74
b 中国文学科	261	3.38	0.72
c 英米文学科	1058	3.44	0.87
d 教育学科	1712	3.59	0.82
e 書道学科	226	3.50	0.81
f 歴史文化学科	532	3.64	0.73
g 社会経済学科	1542	3.75	0.81
h 現代経済学科	973	3.69	0.82
i 中国語学科	989	3.66	0.85
j 英語学科	2382	3.61	0.80
k 日本語学科	380	3.41	0.75
l 法律学科	2730	3.69	0.81
m 政治学科	1261	3.68	0.83
n 国際関係学科	1068	3.56	0.77
o 国際文化学科	605	3.51	0.78
p 経営学科	2632	3.66	0.82
q スポーツ科学科	1227	3.24	0.87
r 健康科学科	788	3.82	0.81
s 看護学科	368	3.73	0.80
t 社会学科	2107	3.58	0.74
u 教職課程センター	526	3.46	0.73
v 国際交流センター	93	3.38	0.72

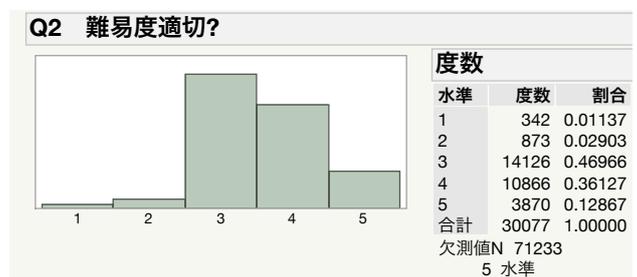
学年	数	平均	標準偏差
1	11425	3.58	0.83
2	7359	3.62	0.79
3	4358	3.63	0.80
4	946	3.50	0.78

1～5の全学の分布は図表8の通りである。3「適切だった」が約44%（昨年度前期は約47%）で、4「やや難しかった」が約37%（昨年度前期は約36%）、5「とても難しかった」が約14%（昨年度前期は約13%）である。1「とても易しい」と2「すこし易しかった」は合わせて約4%（昨年度前期も約4%）である。つまり「ちょうど良い」と思っている学生と、「難しい」と思っている学生が約半々であり、「易しい」と思っている学生はごく少数しかいない。昨年度前期とほぼ同一と言って良い結果となった。

図表8 Q2「難易度適切」に対する全学の回答分布



参考：昨年度前期



学科／部局別の分布を図表9aと図表9bに示す。3「適切だった」の割合が最も大きい学科は中国文学科で61.69%（昨年度前期はスポーツ科学科で58.27%）であった。部局では国際交流センターで66.67%（昨年度前期は66.36%）であった。スポーツ科学科は1（とても易しい）と回答した割合が4.81%（昨年度前期は5.90%）と最も大きかった。5「とても難しかった」の割合が最も大きかったのは健康科学科の22.46%で突出して高い

数値となっている。

図表 9 a Q2「難易度適切」に対する学科／部局別回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	1.91	3.98	60.19	27.39	6.53
b 中国文学科	1.92	1.15	61.69	27.97	7.28
c 英米文学科	2.93	5.20	47.64	32.99	11.25
d 教育学科	1.46	2.63	45.91	35.86	14.14
e 書道学科	1.77	2.21	53.10	30.53	12.39
f 歴史文化学科	0.00	1.32	46.80	38.16	13.72
g 社会経済学科	1.10	1.95	35.93	43.32	17.70
h 現代経済学科	1.13	3.19	37.72	41.32	16.65
i 中国語学科	1.82	3.24	38.32	40.34	16.28
j 英語学科	0.84	3.65	42.70	39.25	13.56
k 日本語学科	1.05	4.47	55.00	31.05	8.42
l 法律学科	0.77	2.60	40.48	39.38	16.78
m 政治学科	1.35	2.54	39.81	39.65	16.65
n 国際関係学科	0.75	3.18	46.82	37.64	11.61
o 国際文化学科	1.32	3.14	49.26	35.87	10.41
p 経営学科	1.14	2.93	40.73	39.59	15.62
q スポーツ科学科	4.81	4.97	61.12	19.80	9.29
r 健康科学科	0.38	1.90	35.79	39.47	22.46
s 看護学科	1.09	1.09	39.95	39.95	17.93
t 社会学科	0.47	2.71	45.70	40.34	10.77
u 教職課程センター	1.14	1.52	56.27	32.13	8.94
v 国際交流センター	0.00	3.23	66.67	19.35	10.75

学年別には、図表 10 の通りである。昨年度は学年が進行するにつれて「適切である」と認識する割合が高くなる傾向が見えたが、今回のデータからはそのような傾向は読み取れず、学年による違いは明らかではない。

図表 10 Q2「難易度適切」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.65	3.48	44.57	36.29	14.00
2	0.99	2.64	43.05	39.64	13.68
3	0.94	2.27	44.42	37.26	15.10
4	1.06	2.85	53.38	30.55	12.16

4.3.4 【Q3a】あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。【メール連絡】

全学では、2「したことがある」と回答したのは18.74%と、昨年度前期の18.24%とほぼ同一であった。学科別および学年別の内訳を図表 11 に示す。質問やメール連絡をしたことがあるほうが一概に望ましいということではないのは言うまでもないが、教員と学生の距離のひとつの目安にはなるのかもしれない。

図表 11 Q3a 「メール連絡」の学科／部局別（左）と学年別（右）回答

学科／部局	1	2
a 日本文学科	75.24	24.76
b 中国文学科	76.92	23.08
c 英米文学科	75.71	24.29
d 教育学科	81.60	18.40
e 書道学科	75.77	24.23
f 歴史文化学科	82.86	17.14
g 社会経済学科	86.94	13.06
h 現代経済学科	83.51	16.49
i 中国語学科	82.69	17.31
j 英語学科	76.73	23.27
k 日本語学科	73.42	26.58
l 法律学科	87.88	12.12
m 政治学科	82.01	17.99
n 国際関係学科	74.62	25.38
o 国際文化学科	75.79	24.21
p 経営学科	85.96	14.04
q スポーツ科学科	78.07	21.93
r 健康科学科	78.47	21.53
s 看護学科	73.44	26.56
t 社会学科	81.64	18.36
u 教職課程センター	82.44	17.56
v 国際交流センター	65.59	34.41

学年	1	2
1	82.06	17.94
2	81.00	19.00
3	81.38	18.62
4	72.99	27.01

学科のなかで、質問やメールで連絡したことがある割合がもっとも高いのは日本語学科の 26.58%（昨年度前期は国際関係学科の 26.16%）であった。学科によって結構な違いがあることがわかる。部局では国際交流センターが 34.41%と高い（昨年度前期は 45.87%）。

学年別には 4 年生が 27.01%と 1～3 年生よりも明らかに高かった。卒業が近づいてきて様々な連絡や質問をする頻度が多くなったのではないかと解釈できる。

4.3.5 【Q3b】 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。【対応迅速】

この設問には Q3a で「メールで連絡をしたことがある」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は 3.92（昨年度前期は 3.99）で標準偏差は 1.03（昨年度前期は 1.04）であった。昨年度とほぼ同じ数値である。おおむね 4 「そう思う」に近い平均値なので、まずまず迅速であると認識されていたと言える。

学科／部局別および学年別の数値を図表 12 に示す。最も数値が高い学科は日本語学科の 4.39（昨年度前期とは中国文学科の 4.37）であった。部局では国際交流センターが 4.79 と高かった。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 1370 名）の値は、平均 3.88、標準偏差 1.05 であった。学年による違いはごくわずかであるが、4 年が最も高かった。これは昨年度前期も同様に観察された傾向である。これは 4 年生の授業担当者に対応が迅速である教員個人が多かったのか、同一の教員でも 4 年生に対しては迅速に対応する傾向があったのか、あるいは同じ対応であっても 4 年生の学生は迅速だと感じる傾向があったのかはわからない。

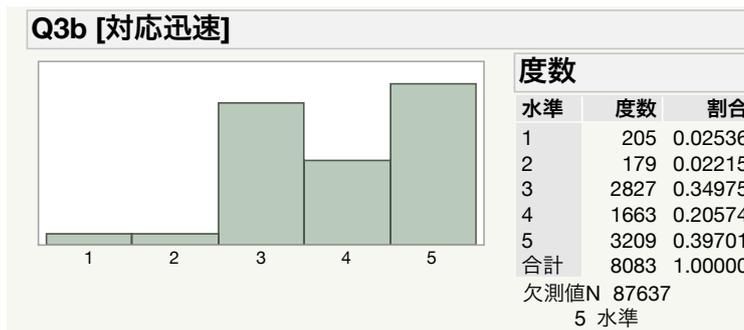
図表 12 Q3b「対応迅速」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	225	4.19	0.94
b 中国文学科	86	4.23	0.94
c 英米文学科	378	4.02	1.05
d 教育学科	538	3.84	1.11
e 書道学科	78	4.18	0.99
f 歴史文化学科	156	4.01	1.02
g 社会経済学科	496	3.75	0.94
h 現代経済学科	290	3.87	1.04
i 中国語学科	340	3.89	1.02
j 英語学科	936	4.03	1.03
k 日本語学科	149	4.39	0.92
l 法律学科	709	3.76	1.01
m 政治学科	434	3.78	0.97
n 国際関係学科	481	4.00	1.00
o 国際文化学科	249	3.98	1.03
p 経営学科	858	3.72	1.03
q スポーツ科学科	473	4.01	0.99
r 健康科学科	268	3.98	0.97
s 看護学科	158	4.08	1.06
t 社会学科	592	4.01	1.07
u 教職課程センター	147	3.82	1.10
v 国際交流センター	42	4.79	0.52

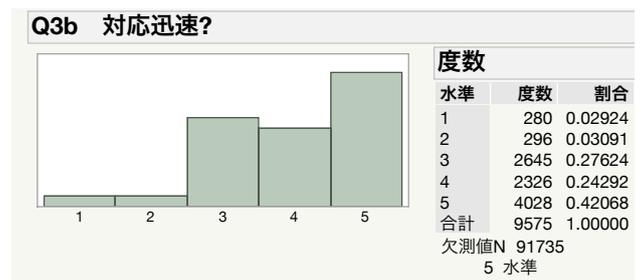
学年	数	平均	標準偏差
1	3754	3.91	1.01
2	2496	3.92	1.04
3	1403	3.94	1.06
4	430	4.00	1.03

より詳細な状況を示すデータとして5～1の段階別の分布状況を示す。まず全学の分布は図表 13 の通りである。上に述べたように平均値は 3.92 とほとんど 4 に近かったが、最頻値は 5「とてもそう思う」で、約 40%（昨年度前期は 42%）の学生が質問やメールに対する対応は迅速であったと強く認識した、ということであり、満足すべき結果と言えるだろう。

図表 13 Q3b「対応迅速」に対する全学の回答分布



参考：昨年度前期



学科／部局別回答分布を図表 14 に示す。5 の数値が最も高かった学科は日本語学科の 64.43%（昨年度前期は中国文学科の 61.11%）であった。学科によってかなり数値に差があることがわかる。部局では国際交流センターの数値が 83.33%と昨年度前期の 72.31%より更に高くなった。

図表 14 Q3b「対応迅速」に対する学科／部局別回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.89	0.89	28.00	18.67	51.56
b 中国文学科	0.00	3.49	24.42	17.44	54.65
c 英米文学科	2.65	3.17	28.84	19.84	45.50
d 教育学科	4.28	3.53	34.94	18.40	38.85
e 書道学科	1.28	2.56	25.64	17.95	52.56
f 歴史文化学科	2.56	0.00	35.26	17.95	44.23
g 社会経済学科	1.41	1.81	46.17	21.57	29.03
h 現代経済学科	3.45	1.03	36.90	22.07	36.55
i 中国語学科	2.94	1.18	36.76	22.06	37.06
j 英語学科	2.35	2.03	30.88	19.34	45.41
k 日本語学科	0.67	2.68	18.12	14.09	64.43
l 法律学科	3.10	1.83	41.89	22.00	31.17
m 政治学科	2.30	1.84	40.55	26.04	29.26
n 国際関係学科	1.46	1.87	35.34	17.67	43.66
o 国際文化学科	2.81	2.01	30.52	23.29	41.37
p 経営学科	3.61	2.33	42.19	22.38	29.49
q スポーツ科学科	1.69	1.06	35.52	18.39	43.34
r 健康科学科	1.12	2.24	34.33	22.39	39.93
s 看護学科	3.80	1.27	25.32	22.78	46.84
t 社会学科	2.20	5.24	27.53	19.09	45.95
u 教職課程センター	5.44	2.04	32.65	25.17	34.69
v 国際交流センター	0.00	0.00	4.76	11.90	83.33

学年別の分布を図表 15 に示す。やはり 4 年生の、5 と回答した割合が 42.56% と最も高いのがわかる。

図表 15 Q3b「対応迅速」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	2.26	2.08	35.64	21.98	38.04
2	2.36	2.48	36.42	17.79	40.95
3	3.56	2.00	32.15	21.24	41.05
4	2.56	2.56	30.00	22.33	42.56

4.3.6 【Q4a】この授業では提出物を出しましたか。[提出経験]

全体では、1「出していない」が、28.08%（昨年度前期は 15.1%）、2「出した」が 71.91%（昨年度前期は 84.9%）である。ほとんどオンライン授業だった 2021 年度に比べ、原則対面授業となった今回は、提出物を課される場合が昨年度よりもやや減ったのかもしれない。

学科別および学年別の内訳を図表 16 に示す。2「出した」という回答が最も多い学科は看護学科の 89.10%（昨年度前期は看護学科の 94.08%）であった。50%台の学科もあり、提出物を課す度合いは学科によってかなり違うようである。部局は国際交流センターの 86.81%が、昨年度前期（98.17%）に引き続いて多かった。

図表 16 Q4a「提出経験」の学科／部局別（左）および学年別（右）回答

学科／部局	1	2
a 日本文学科	32.54	67.46
b 中国文学科	27.13	72.87
c 英米文学科	26.88	73.12
d 教育学科	20.91	79.09
e 書道学科	13.72	86.28
f 歴史文化学科	42.56	57.44
g 社会経済学科	31.44	68.56
h 現代経済学科	28.10	71.90
i 中国語学科	45.59	54.41
j 英語学科	23.60	76.40
k 日本語学科	17.89	82.11
l 法律学科	38.20	61.80
m 政治学科	28.81	71.19
n 国際関係学科	21.27	78.73
o 国際文化学科	22.35	77.65
p 経営学科	24.04	75.96
q スポーツ科学科	33.52	66.48
r 健康科学科	26.53	73.47
s 看護学科	10.90	89.10
t 社会学科	27.12	72.88
u 教職課程センター	20.49	79.51
v 国際交流センター	13.19	86.81

学年	1	2
1	28.89	71.11
2	26.96	73.04
3	27.90	72.10
4	27.86	72.14

1：提出したことがない 2:提出したことがある

4.3.7 【Q4b】提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

この設問は Q4a で「提出したことがある」と回答した学生のみ回答してのものである。

全学の平均は 3.95（昨年度前期は 3.97）標準偏差は 0.98（昨年度前期も 0.98）なので概ね「丁寧である」と認識されていたといえる。学科／部局別および学年別の平均値を図表 17 に示す。

学科で最も高いのが中国文学科の 4.40 であった（昨年度前期はやはり中国文学科の 4.46）。部局で数値が高いのは国際交流センターの 4.64（昨年度前期は 4.70）であった。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 3320 名）の値は、平均 3.91、標準偏差 0.97 であった。

学年による違いはほとんどないが、4 年生の値が最も高い。わずかな差ではあるが Q3B「対応迅速」と同じ結果であり、かつ昨年度と同様の結果なので、ノイズではないかも知れない。

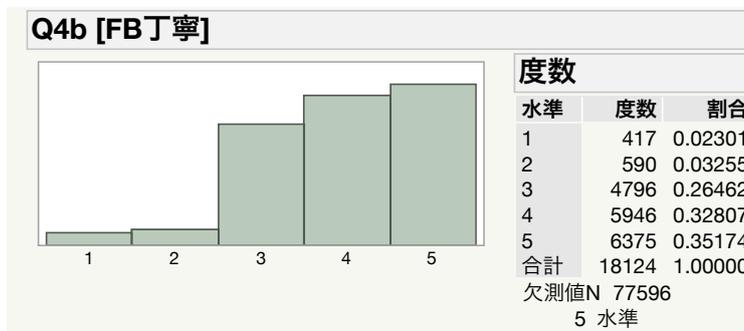
より詳細な様子を知るために水準別の分布を見てゆく。まず全学の分布を図表 18 に示す。上述のように平均値としては 3.95 だが、度数が最も高いのが 5「強くそう思う」であることが見て取れる。これは望ましいことである。全体の分布は昨年度前期とほぼ同一であった。しかし合計で 5.6%（昨年度前期は 5.7%）の学生が 1「まったくそう思わない」あるいは 2「どちらかと言えばそう思わない」と回答していることを無視してはなるまい。難しいかもしれないが、理想的には 1 と 2 はゼロであるべきである。

図表 17 Q4b「FB 丁寧」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

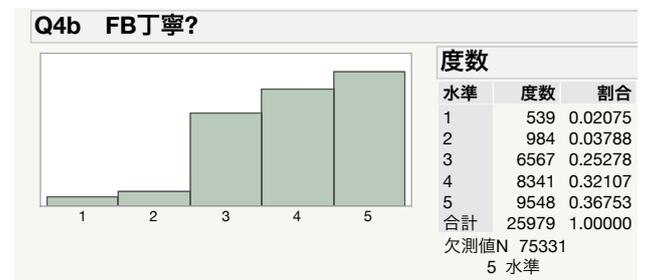
学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	440	4.10	0.89
b 中国文学科	195	4.40	0.84
c 英米文学科	802	4.01	0.97
d 教育学科	1378	3.89	1.00
e 書道学科	195	4.29	0.79
f 歴史文化学科	317	4.03	0.94
g 社会経済学科	1126	3.91	0.97
h 現代経済学科	726	3.79	1.03
i 中国語学科	598	3.89	1.03
j 英語学科	1894	4.01	1.00
k 日本語学科	323	4.33	0.81
l 法律学科	1798	3.86	1.00
m 政治学科	954	3.86	0.95
n 国際関係学科	885	4.12	0.92
o 国際文化学科	492	4.07	0.99
p 経営学科	2092	3.81	0.96
q スポーツ科学科	878	3.96	0.95
r 健康科学科	597	4.08	0.91
s 看護学科	336	3.93	0.95
t 社会学科	1585	3.97	0.94
u 教職課程センター	430	3.86	1.08
v 国際交流センター	83	4.64	0.73

学年	数	平均	標準偏差
1	8462	3.96	0.96
2	5636	3.97	0.97
3	3295	3.87	1.02
4	731	4.03	1.00

図表 18 Q4b「FB 丁寧」に対する全学の回答分布



参考：昨年度前期



学科／部局ごとの分布を図表 19 に示す。5「強くそう思う」の割合は、昨年度に引き続き、学科によってかなり異なっているのが見て取れる。学科で5と回答したのが最も多かったのは中国文学科で 58.97%（昨年度前期はやはり中国文学科の 64.71%）であった。国際交流センターは5と回答したのが 73.49%と、昨年度前期の 74.07%とほぼ同じ水準で高かった。

図表 19 Q4b「FB 丁寧」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.91	2.50	22.27	33.86	40.45
b 中国文学科	1.03	1.03	13.85	25.13	58.97
c 英米文学科	2.00	2.99	25.31	31.67	38.03
d 教育学科	2.98	3.05	29.03	31.64	33.31
e 書道学科	0.00	1.03	17.95	32.31	48.72
f 歴史文化学科	1.26	3.15	25.55	31.55	38.49
g 社会経済学科	2.13	3.29	29.22	32.42	32.95
h 現代経済学科	3.03	5.37	31.40	29.61	30.58
i 中国語学科	3.34	3.68	27.42	31.27	34.28
j 英語学科	2.64	3.80	22.12	32.52	38.91
k 日本語学科	0.31	1.55	15.48	30.65	52.01
l 法律学科	3.28	3.73	27.70	34.76	30.53
m 政治学科	2.31	3.04	30.08	35.43	29.14
n 国際関係学科	1.58	2.49	19.77	35.14	41.02
o 国際文化学科	2.85	2.85	19.51	33.94	40.85
p 経営学科	2.58	3.49	31.26	35.23	27.44
q スポーツ科学科	1.71	1.71	32.23	27.68	36.67
r 健康科学科	1.01	2.35	24.62	31.99	40.03
s 看護学科	2.08	3.27	25.89	36.90	31.85
t 社会学科	1.39	3.60	26.69	33.25	35.08
u 教職課程センター	4.42	4.88	25.35	30.93	34.42
v 国際交流センター	1.20	1.20	3.61	20.48	73.49

学年別の状況を図表 20 に示す。5 と回答した割合は 4 年生で最も高かった。

図表 20 Q4b「FB 丁寧」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	2.10	2.79	26.68	33.60	34.83
2	2.02	3.11	26.76	31.58	36.53
3	3.19	4.86	25.92	33.57	32.47
4	2.74	2.60	24.08	29.69	40.90

4.3.8 【Q5】 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[自分意欲]

この設問に対する全学の平均は 4.12（昨年度前期は 4.18）で、標準偏差は 0.83（昨年度前期は 0.81）と、ほぼ昨年度と同様であった。4「どちらかと言えばそう思う」と 5「強くそう思う」の間であり、学生は平均的には意欲を持って授業に取り組んでいたと言えるだろう。学科／部局別および学年別の平均値を図表 21 に示す。

学科で最も値が高かったのは、書道学科の 4.40（昨年度前期はスポーツ科学科の 4.45）であった。部局で高かったのは国際交流センターの 4.53（昨年度前期は 4.49）であった。表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 4367 名）の値は、平均 4.09、標準偏差 0.83 であった。

学年別には昨年度前期には 1 年 > 2 年 > 3 年 > 4 年と学年を追うごとに、残念ながら数値が下がる傾向が見えた。今回は 1 年と 2 年はあまり変わらず、それよりも 3 年と 4 年がやや低い、という傾向が見てとれる。

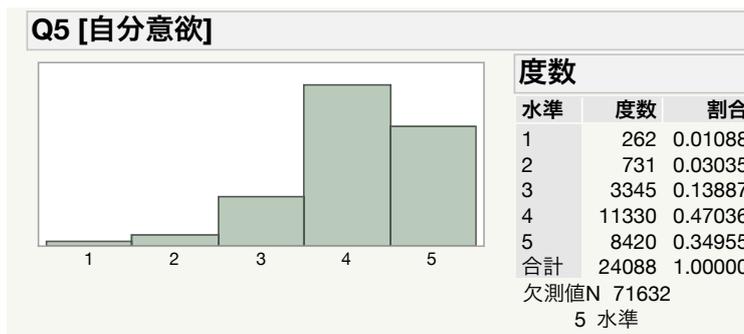
図表 21 Q5「自分意欲」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	627	4.23	0.78
b 中国文学科	261	4.26	0.80
c 英米文学科	1056	4.16	0.81
d 教育学科	1711	4.15	0.83
e 書道学科	227	4.40	0.73
f 歴史文化学科	533	4.15	0.78
g 社会経済学科	1539	4.03	0.82
h 現代経済学科	972	4.06	0.86
i 中国語学科	989	4.24	0.80
j 英語学科	2383	4.18	0.84
k 日本語学科	380	4.20	0.85
l 法律学科	2732	3.97	0.84
m 政治学科	1257	3.91	0.84
n 国際関係学科	1070	4.17	0.79
o 国際文化学科	602	4.27	0.81
p 経営学科	2632	4.03	0.86
q スポーツ科学科	1228	4.39	0.76
r 健康科学科	789	4.18	0.81
s 看護学科	368	4.20	0.72
t 社会学科	2111	4.07	0.83
u 教職課程センター	528	4.12	0.90
v 国際交流センター	93	4.53	0.67

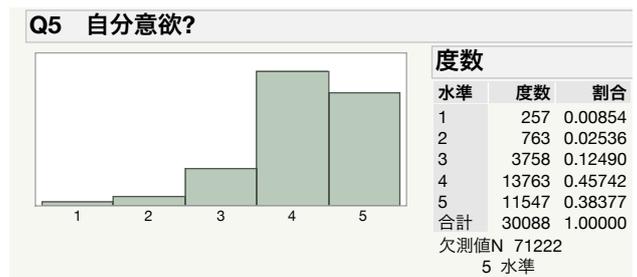
学年	数	平均	標準偏差
1	11428	4.12	0.84
2	7359	4.15	0.81
3	4355	4.08	0.85
4	946	4.08	0.87

水準別の分布を見てゆく。全学の分布は図表 22 のとおりである。最頻値は 4 であり、分布も昨年度前期とかなり似ている。

図表 22 Q5「自分意欲」に対する全学の回答分布



参考：昨年度前期



学科別には図表 23 のように分布していた。5「強くそう思う」の割合には学科によって顕著な違いがある。最も大きかった学科はスポーツ科学科で 53.26%（昨年度前期は 56.59%）であった。国際交流センターは昨年度前期の 58.18%よりも更に高く、61.29%であった。

図表 23 Q5「自分意欲」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.64	2.71	9.57	47.21	39.87
b 中国文学科	1.15	1.53	10.73	43.68	42.91
c 英米文学科	1.23	1.89	12.97	47.92	35.98
d 教育学科	0.94	2.69	14.09	44.77	37.52
e 書道学科	0.44	1.76	6.61	40.09	51.10
f 歴史文化学科	0.75	3.00	10.69	51.22	34.33
g 社会経済学科	1.04	3.51	15.59	51.07	28.78
h 現代経済学科	0.93	4.32	15.64	46.09	33.02
i 中国語学科	0.91	2.33	10.62	43.88	42.26
j 英語学科	1.30	2.77	11.83	44.73	39.36
k 日本語学科	1.58	2.37	11.32	43.68	41.05
l 法律学科	1.32	4.17	16.65	52.01	25.84
m 政治学科	0.95	4.93	19.73	50.76	23.63
n 国際関係学科	0.93	2.34	11.50	49.25	35.98
o 国際文化学科	1.66	1.50	8.31	45.02	43.52
p 経営学科	1.52	3.50	15.81	49.20	29.98
q スポーツ科学科	0.49	1.38	9.93	34.93	53.26
r 健康科学科	0.63	2.03	15.34	42.71	39.29
s 看護学科	0.00	1.63	12.77	49.73	35.87
t 社会学科	1.04	3.22	15.40	48.70	31.64
u 教職課程センター	1.70	3.79	13.64	42.80	38.07
v 国際交流センター	0.00	1.08	6.45	31.18	61.29

学年別の分布を図表 24 に示す。昨年度は 5 の割合は 1 年生が 44.18% と最も高く、それが 2 年生、3 年生と学年が上がるにつれて下がるが 4 年生になるとすこし持ち直す、という傾向が見られた。今回は学年による差はほとんど見られなかった。

図表 24 Q5「自分意欲」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.14	3.04	13.98	46.86	34.98
2	0.91	2.64	13.03	47.49	35.93
3	1.22	3.56	14.81	47.14	33.27
4	1.27	3.7	15.12	45.14	34.78

4.3.9 【Q6】 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

この設問に対する回答の全学の平均は 4.43（昨年度前期は 4.39）で標準偏差は 0.78（昨年度前期も 0.78）と昨年度並みであった。4.44 とは「どちらかと言えばそう思う」と「強くそう思う」のほぼ中間ということなので、昨年度に引き続きまずまず満足すべき数値であろう。学科／部局別および学年別の平均値を図表 25 に示す。

数値にそれほど違いはないが、最も高かった学科は、中国文学科の 4.68（昨年度前期はやはり中国文学科の 4.61）であった。国際交流センターの数値はやはり高く 4.75（昨年度前期は 4.72）であった。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 4373 名）の値は、平均 4.43、標準偏差 0.75 であった。

学年では 3 年生がやや低い、大きな違いではない。

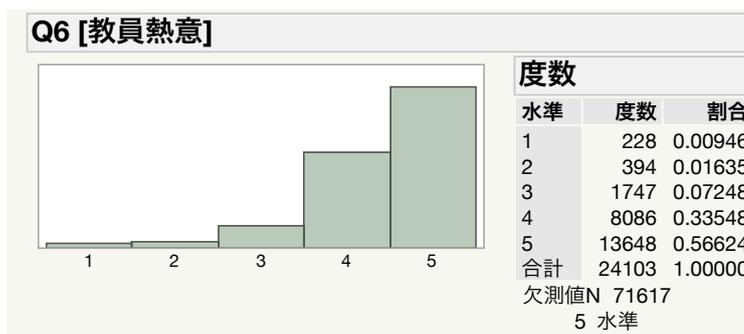
図表 25 Q6「教員熱意」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	628	4.55	0.67
b 中国文学科	262	4.68	0.60
c 英米文学科	1055	4.54	0.69
d 教育学科	1713	4.43	0.82
e 書道学科	227	4.67	0.57
f 歴史文化学科	533	4.56	0.66
g 社会経済学科	1543	4.42	0.73
h 現代経済学科	973	4.31	0.82
i 中国語学科	991	4.42	0.80
j 英語学科	2386	4.48	0.78
k 日本語学科	381	4.52	0.69
l 法律学科	2731	4.32	0.82
m 政治学科	1258	4.30	0.81
n 国際関係学科	1070	4.60	0.67
o 国際文化学科	605	4.56	0.74
p 経営学科	2634	4.29	0.84
q スポーツ科学科	1227	4.57	0.71
r 健康科学科	789	4.48	0.74
s 看護学科	366	4.44	0.78
t 社会学科	2109	4.42	0.75
u 教職課程センター	529	4.48	0.79
v 国際交流センター	93	4.75	0.58

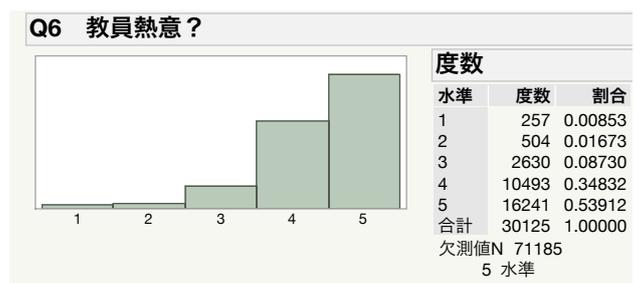
学年	数	平均	標準偏差
1	11436	4.43	0.77
2	7362	4.46	0.76
3	4358	4.39	0.81
4	947	4.48	0.75

水準別の回答分布を検討する。全学の回答分布を図表 26 に示す。最頻値は 5「強くそう思う」であり、56.62%（昨年度前期は 53.90%）を占める。5 と 4 の合計で約 90%（昨年度前期は約 89%）になり、「教員は熱意をもって授業を行っている」という認識が圧倒的に多いと言って良い。分布の形も昨年度とほとんど同じである。

図表 26 Q6「教員熱意」に対する全学の回答分布



参考：昨年度前期



学科／部局別の分布を図表 27 に示す。平均値にはそれほど差がなくとも、5「強くそう思う」の回答割合には学科によって顕著な違いが見られる。5 の割合が最も大きい学科は中国文学科で 73.66%（昨年度前期も同じく中国文学科で 68.93%）であった。国際交流センターの数値は 80.65%で、昨年度前期の 77.27%よりも更に高かった。

図表 27 設問 6「教員熱意」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.64	0.64	4.14	32.64	61.94
b 中国文学科	0.00	1.15	3.44	21.76	73.66
c 英米文学科	0.28	1.23	6.07	29.29	63.13
d 教育学科	1.58	1.75	6.95	31.58	58.14
e 書道学科	0.00	0.88	2.64	25.55	70.93
f 歴史文化学科	0.56	0.56	4.69	30.21	63.98
g 社会経済学科	0.58	1.23	7.45	37.01	53.73
h 現代経済学科	0.82	3.19	8.53	38.75	48.72
i 中国語学科	1.31	1.61	7.37	33.30	56.41
j 英語学科	0.92	1.76	6.75	29.51	61.06
k 日本語学科	0.52	1.57	3.41	34.12	60.37
l 法律学科	1.32	1.98	8.86	38.92	48.92
m 政治学科	1.19	1.67	10.41	39.67	47.06
n 国際関係学科	0.28	1.12	5.14	24.86	68.60
o 国際文化学科	1.49	0.50	4.46	27.77	65.79
p 経営学科	1.40	2.20	9.95	38.99	47.46
q スポーツ科学科	0.65	0.81	6.36	25.51	66.67
r 健康科学科	0.51	1.27	8.11	29.91	60.20
s 看護学科	1.37	1.09	6.83	33.33	57.38
t 社会学科	0.66	1.99	6.35	36.98	54.01
u 教職課程センター	1.13	1.70	6.43	29.11	61.63
v 国際交流センター	0.00	2.15	1.08	16.13	80.65

学年別の状況を図表 28 に示す。5「強くそう思う」の割合は4年生が最も大きい。

図表 28 Q6「教員熱意」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	0.89	1.58	7.63	33.75	56.14
2	0.92	1.40	6.71	32.31	58.65
3	1.17	2.18	7.34	35.41	53.90
4	0.74	1.58	6.34	32.10	59.24

4.3.10 学生の意欲と教員に熱意を感じる度合いの関係

Q5「自分意欲」とQ6「教員熱意」の全学のクロス集計をした結果を、図表 29a と 29b に示す。いずれも行を「教員熱意」、列を「自分意欲」とした。29a は度数（回答数）を、29b は行ごとのパーセンテージを示している。セルの値の大きさに応じて背景色が濃くなるよう設定した。図表 29a からはセルごとの人数がどの程度いたかがひと目で分かる。図表 29b からは、教員熱意の回答ごとに、自分意欲の回答がどのように分布していたかがわかりやすい。図表 29a でも 29b でも、濃度の濃いセルが右肩下がりに分布している。これは教員熱意の数値が高いほど、自分意欲の数値が高くなる傾向があることを示している。教員熱意が5のとき自分意欲の最頻値セルは自分意欲 = 5、教員熱意が4のときの最頻値セルは自分意欲 = 4、教員熱意が3のときの最頻値セルは自分意欲 = 3、ときれいに連動している。2つの変数を連続尺度とみなしてピアソン相関係数を求めると、 $r = .5237$ ($p < .001$)であった（昨年度前期の値は $r = .5565$ ）。因果関係は不明だが、相関関係は強い。

図表 29a 自分意欲の回答と教員熱意の回答のクロス集計 [度数]

度数	自分意欲 = 1	自分意欲 = 2	自分意欲 = 3	自分意欲 = 4	自分意欲 = 5	合計
教員熱意 = 1	87	32	31	41	37	228
教員熱意 = 2	30	99	111	114	39	393
教員熱意 = 3	57	168	952	450	116	1743
教員熱意 = 4	52	287	1507	5494	733	8073
教員熱意 = 5	36	145	741	5220	7490	13632
合計	262	731	3342	11319	8415	24069

図表 29b 自分意欲の回答と教員熱意の回答のクロス集計 [行のパーセンテージ]

行%	自分意欲 = 1	自分意欲 = 2	自分意欲 = 3	自分意欲 = 4	自分意欲 = 5	合計
教員熱意 = 1	38.16	14.04	13.6	17.98	16.23	100.00
教員熱意 = 2	7.63	25.19	28.24	29.01	9.92	100.00
教員熱意 = 3	3.27	9.64	54.62	25.82	6.66	100.00
教員熱意 = 4	0.64	3.56	18.67	68.05	9.08	100.00
教員熱意 = 5	0.26	1.06	5.44	38.29	54.94	100.00

4.3.11 【Q7】 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長感覚]

この設問に対する全学の平均値は 4.25（昨年度前期は 4.28）で標準偏差は 0.83（昨年度前期は 0.80）であった。昨年度とほとんど同一の数値であり、全体の値としては悪くないと思われる。平均値を学科／部局別および学年別に整理して図表 30 として示す。

図表 30 Q7「成長感覚」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差	学年	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	624	4.32	0.79	1	11413	4.24	0.83
b 中国文学科	262	4.58	0.63	2	7352	4.28	0.80
c 英米文学科	1057	4.22	0.84	3	4361	4.20	0.86
d 教育学科	1709	4.27	0.83	4	943	4.30	0.84
e 書道学科	227	4.54	0.69				
f 歴史文化学科	532	4.34	0.73				
g 社会経済学科	1538	4.19	0.79				
h 現代経済学科	971	4.18	0.83				
i 中国語学科	990	4.29	0.86				
j 英語学科	2384	4.28	0.86				
k 日本語学科	381	4.34	0.81				
l 法律学科	2727	4.13	0.86				
m 政治学科	1250	4.10	0.83				
n 国際関係学科	1069	4.43	0.74				
o 国際文化学科	603	4.41	0.82				
p 経営学科	2632	4.15	0.88				
q スポーツ科学科	1227	4.32	0.84				
r 健康科学科	789	4.29	0.76				
s 看護学科	367	4.30	0.75				
t 社会学科	2109	4.24	0.79				
u 教職課程センター	528	4.32	0.83				
v 国際交流センター	93	4.65	0.54				

学科で最も高い平均値は中国文学科の 4.58 であった（昨年度前期はやはり中国文学科の 4.52）。部局では国際交流センター(4.65) の値が高い（昨年度前期は 4.57）。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 4365 名）の値は、平均 4.25、標準偏差 0.79 であった。学年別では昨年度は 1 年生が高く、2 年生、3 年生がやや低くなり、それがまた 4 年生で上昇する、と言う傾向が見られたが、今回に関しては 4 年生の値が最も高いことと、3 年生がやや低いことが、昨年度との共通点である。

水準別の全学の分布を図表 31 に示す。最頻値は 4「どちらかと言えばそう思う」であり、極めて僅かな差で、5「強くそう思う」が続いている。最頻値が 5 でなかったのは残念だが、4 と 5 の合計で 86.7%を占めており、大きな問題ではないだろう。

図表 31 Q7「成長感覚」に対する全学の回答分布



水準別の分布を学科／部局別にまとめたものが図表 32 である。

図表 32 Q7「成長感覚」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.96	1.60	9.46	40.06	47.92
b 中国文学科	0.38	0.00	4.96	30.92	63.74
c 英米文学科	1.51	2.08	11.26	43.33	41.82
d 教育学科	1.46	2.28	9.01	41.90	45.35
e 書道学科	0.88	0.44	4.85	31.28	62.56
f 歴史文化学科	0.75	1.88	5.26	46.62	45.49
g 社会経済学科	1.24	1.89	10.60	49.22	37.06
h 現代経済学科	1.03	2.78	12.36	44.39	39.44
i 中国語学科	2.02	2.02	8.38	39.60	47.98
j 英語学科	1.43	2.89	9.44	39.14	47.11
k 日本語学科	1.05	3.41	5.25	41.47	48.82
l 法律学科	1.94	2.97	10.45	49.10	35.53
m 政治学科	1.28	2.88	13.92	48.88	33.04
n 国際関係学科	0.75	1.40	6.55	36.86	54.44
o 国際文化学科	1.99	1.00	6.47	34.83	55.72
p 経営学科	2.39	2.58	10.07	47.15	37.80
q スポーツ科学科	1.30	1.63	11.74	34.15	51.18
r 健康科学科	0.76	1.27	10.39	43.22	44.36
s 看護学科	0.82	1.63	7.90	45.78	43.87
t 社会学科	1.23	1.94	9.25	47.04	40.54
u 教職課程センター	1.52	2.27	7.77	39.20	49.24
v 国際交流センター	0.00	0.00	3.23	29.03	67.74

平均値からは読み取れなかった学科による違いも、水準ごとのパーセンテージを比べてみると読み取ること

ができるようだ。5「強くそう思う」の割合が最も大きかったのは中国文学科で63.74%（昨年度前期も中国文学科の60.34%）であった。部局では国際交流センターの67.74%で、昨年度前期の65.45%よりもさらに数値が高い。

学年別の違いをまとめたのが図表33である。5「強くそう思う」は4年が最も多い。

図表33 Q7「成長感覚」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.38	2.33	10.20	42.92	43.17
2	1.31	1.81	8.85	43.82	44.21
3	1.88	2.66	9.93	44.53	41.00
4	1.80	2.12	7.85	40.40	47.83

4.3.12 【Q8】すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

この設問に対する回答の全学の平均値は8.07（昨年度前期は8.16）、標準偏差は1.81（昨年度前期は1.72）である。昨年度前期より平均値がほんの僅かだが下降し、標準偏差が僅かだが増加してはいるが、8.07は「80.7%満足である」あるいは「100点満点の80.7点」と読み替えることができ、非常に高いわけではないが、ひとまずは「合格点」と言える結果ではないだろうか。

図表34に学科／部局別および学年別の数値をまとめた。

図表34 Q8「総合満足」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差	学年	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	622	8.47	1.50	1	11415	8.06	1.78
b 中国文学科	263	8.73	1.47	2	7359	8.11	1.79
c 英米文学科	1057	8.11	1.73	3	4360	7.97	1.93
d 教育学科	1711	7.91	1.97	4	944	8.33	1.77
e 書道学科	227	8.67	1.67				
f 歴史文化学科	532	8.32	1.60				
g 社会経済学科	1538	8.00	1.68				
h 現代経済学科	973	8.02	1.86				
i 中国語学科	991	8.04	1.84				
j 英語学科	2384	8.11	1.85				
k 日本語学科	381	8.51	1.70				
l 法律学科	2729	7.79	1.94				
m 政治学科	1253	7.70	1.79				
n 国際関係学科	1066	8.39	1.63				
o 国際文化学科	604	8.53	1.75				
p 経営学科	2632	7.81	1.89				
q スポーツ科学科	1228	8.60	1.60				
r 健康科学科	790	8.13	1.63				
s 看護学科	368	8.10	1.69				
t 社会学科	2110	8.05	1.70				
u 教職課程センター	526	7.94	2.04				
v 国際交流センター	93	9.22	1.25				

学科で最も平均値が高いのは中国文学科の8.73（昨年度前期はスポーツ科学科の8.59）であった。中国文学科

は値のばらつき（標準偏差）も 1.47 と学科のなかでもっとも小さく、学生がおしなべて高い満足度を持っている傾向が伺える。部局では国際交流センターの 9.22（昨年度前期は 9.09）が高かった。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 4369 名）の値は、平均 8.09、標準偏差 1.74 であった。

学年では 4 年生が 8.33 と最も高かった（昨年度前期は 8.27）。4 年生も満足度が最も高いというパターンは毎年のことのようにあるが、同時に 4 年生は回答率も最も低いので、解釈が難しいところではある。

より詳しく分布を見てゆく。まず全学の水準別の分布は図表 35 の通りである。最頻値は 8 で、全体の 24.7% である。9 が 21.8%、10 が 24.2% なので、10～8 で、全体の 70.6%（昨年度前期は 71.7%）を占める。昨年度前期よりやや数値が低かったと言える。また、1～4 という低い水準の回答も存在することも無視できない。

図表 35 Q8「総合満足」の全学の回答分布



図表 36 Q8「総合満足」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
a 日本文学科	0.32	0.16	0.48	0.48	3.38	3.54	13.99	22.03	25.56	30.06
b 中国文学科	0.38	0.00	0.00	1.90	2.28	3.04	7.98	18.25	28.52	37.64
c 英米文学科	0.57	0.47	1.32	2.08	3.03	6.91	14.85	24.12	22.33	24.31
d 教育学科	1.69	0.88	1.46	2.45	4.68	6.55	14.90	24.08	19.35	23.96
e 書道学科	0.44	0.44	0.44	1.32	3.52	5.29	5.73	19.38	19.82	43.61
f 歴史文化学科	0.56	0.75	0.75	0.75	2.63	4.14	13.35	25.75	26.32	25.00
g 社会経済学科	0.72	0.07	0.98	2.02	4.36	7.28	16.71	25.55	22.04	20.29
h 現代経済学科	0.82	0.82	1.95	2.26	3.70	5.55	16.14	23.23	21.17	24.36
i 中国語学科	1.92	0.40	0.71	1.72	4.14	6.16	12.71	26.54	23.92	21.80
j 英語学科	1.38	0.76	1.22	1.43	3.78	5.33	14.64	23.95	21.14	26.38
k 日本語学科	0.79	0.26	1.57	1.05	2.10	4.20	9.97	20.73	23.88	35.43
l 法律学科	1.91	0.62	1.94	1.83	4.95	7.55	15.46	25.69	21.11	18.94
m 政治学科	0.88	0.64	1.52	1.84	7.34	8.30	16.60	28.73	18.60	15.56
n 国際関係学科	0.75	0.47	0.56	0.47	3.94	4.03	10.98	25.80	23.64	29.36
o 国際文化学科	1.32	0.33	1.16	0.99	1.66	4.97	9.44	16.39	28.97	34.77
p 経営学科	1.75	0.68	1.44	1.75	5.09	7.14	16.60	26.48	19.91	19.15
q スポーツ科学科	0.33	0.16	0.81	0.98	3.75	3.09	10.75	20.36	20.44	39.33
r 健康科学科	0.76	0.38	0.89	0.63	4.30	5.06	15.82	27.47	22.91	21.77
s 看護学科	1.09	0.27	0.54	1.63	4.35	4.89	13.86	30.43	20.65	22.28
t 社会学科	0.85	0.24	1.04	1.71	3.98	6.78	15.69	25.64	22.70	21.37
u 教職課程センター	2.28	0.57	1.71	2.47	3.80	7.03	14.26	22.05	20.15	25.67
v 国際交流センター	0.00	0.00	1.08	0.00	1.08	2.15	3.23	12.90	21.51	58.06

学科／部局別の分布を図表 36 に示す。10（100%満足）の割合を見ると、学科では 15.56%～43.61%と大きな違いが見られる。10 の割合が最も高かった学科は書道学科の 43.61%であった。30%を上回ったのが昨年度前期は 4 学科だったが、今回は 6 学科に増えた。部局では国際交流センターは 10 の割合が 58.06%（昨年度前期は 45.45%）と圧倒的に高かった。

学年別の分布を図表 37 に示す。10 と回答した割合は 4 年生が最も多く、ついで 2 年生であった。ただし 4 年生の回答率が 11.06%と低かったことから結果の一般化には注意が必要である。

図表 37 Q8「総合満足」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	0.99	0.50	1.13	1.53	4.63	6.40	14.67	25.12	21.14	23.89
2	1.25	0.29	1.20	1.69	3.89	5.39	14.89	24.38	22.68	24.35
3	1.61	0.87	1.56	1.88	3.99	6.70	14.15	24.38	21.28	23.58
4	1.06	0.64	1.27	0.85	3.07	5.08	10.70	23.41	23.94	29.98

4.3.13 全体的満足度に貢献する要因

授業の大きな目標のひとつは「全体的満足度」を向上させることであると考えられる（もちろん唯一の目標であるという意味ではない）。そこで昨年度に引き続き、Q8「全体満足」を目標変数と考えたときに、他のどの変数がどの程度関連しているかを調べた。同様、Q2 に関しては以下のような変換を行い、この結果を「Q2 難易度[変換]」という新たな変数として使用した（変換式： $y = 5 - 2 * \sqrt{(x-3)^2}$ ）。

Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

- 5（とても難しかった） → 1
- 4（やや難しかった） → 3
- 3（適切だった） → 5
- 2（やや易しかった） → 3
- 1（とても易しかった） → 1

まずすべての変数ペア間の相関係数を調べたところ図表 38 のようになった。セルの背景の濃さは相関係数の値の高さを表している。相関係数の一般的解釈に従うならば、.20～.40 は「弱い相関がある」、.40～.70 は「かなり（比較的強い）相関がある」ということなので、「総合満足」との間には、「難易度（変換）」のみ「弱い」相関があり、他のすべての変数には「かなり（比較的強い）」相関があることになる。（サンプルの多さもあり、すべての係数が $p < .0001$ で有意である。）Q8「総合満足」との相関が最も強いのは「成長実感」（ $r = .706$ ）であり、次に「教員熱意」（ $r = .644$ ）、「自分意欲」（ $r = .581$ ）、「シラバス通り」（ $r = .536$ ）、「FB 丁寧」（ $r = .522$ ）「対応迅速」（ $r = .435$ ）「難易度（変換）」（ $r = .293$ ）と続いている。この項目で統計を取り始めたのは 2021 年度前期から初めて今回で 3 回目だが、変数間の相関係数の高さの相対的順位に関して、上位の 3 つ（「成長実感」>「教員熱意」>「自分意欲」）は一貫して変わっていない。

次に「総合満足」を目標変数、他のすべてを予測変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った¹ところ、投入したすべての説明変数が保持され、最終的に図表 39 のモデルを得た。

¹ 各変数の分布は正規分布からかけ離れているため、厳密には重回帰分析の前提を満たしていない。

図表 38 変数間の相関

	シラバス通り	難易度(変換)	対応迅速	FB丁寧	自分意欲	教員熱意	成長実感	総合満足
Q1b [シラバス通り]	1.000	0.115	0.408	0.428	0.409	0.498	0.485	0.536
Q2 [難易度(変換)]	0.115	1.000	0.052	0.112	0.114	0.137	0.198	0.293
Q3b [対応迅速]	0.408	0.052	1.000	0.506	0.345	0.408	0.379	0.435
Q4b [FB丁寧]	0.428	0.112	0.506	1.000	0.426	0.489	0.458	0.522
Q5 [自分意欲]	0.409	0.114	0.345	0.426	1.000	0.524	0.585	0.581
Q6 [教員熱意]	0.498	0.137	0.408	0.489	0.524	1.000	0.626	0.644
Q7 [成長実感]	0.485	0.198	0.379	0.458	0.585	0.626	1.000	0.706
Q8 [総合満足]	0.536	0.293	0.435	0.522	0.581	0.644	0.706	1.000

図表 39 総合満足を目指変数としたステップワイズ回帰分析の最終モデル

あてはめの要約					パラメータ推定値				
R2乗	0.622857				項	推定値	標準誤差	t値	p値(Prob> t)
自由度調整R2乗	0.622458				切片	-1.208869	0.09416	-12.84	<.0001*
誤差の標準偏差(RMSE)	1.128164				Q1b [シラバス通り]	0.2558757	0.021439	11.93	<.0001*
Yの平均	8.198643				Q2 [難易度(変換)]	0.1819933	0.009411	19.34	<.0001*
オブザベーション(または重みの合計)	6630				Q3b [対応迅速]	0.159063	0.016544	9.61	<.0001*
分散分析					Q4b [FB丁寧]	0.2031799	0.018651	10.89	<.0001*
要因	自由度	平方和	平均平方	F値	Q5 [自分意欲]	0.32767	0.022723	14.42	<.0001*
モデル	7	13919.216	1988.46	1562.329	Q6 [教員熱意]	0.4004075	0.02535	15.80	<.0001*
誤差	6622	8428.171	1.27	p値(Prob>F)	Q7 [成長実感]	0.7160314	0.025104	28.52	<.0001*
全体(修正済み)	6629	22347.388		<.0001*					

「分散分析」表から、これは「総合満足」の説明として有効なモデルであることがわかる。「あてはめの要約」のなかの自由度調整 R2 乗の値を見ると、このモデルによって「総合満足」の 62.2%（昨年度前期は 60.8%、後期は 65.4%）を説明していることがわかる。「パラメータ推定値」を見ると、投入したすべての変数が有意であり、「総合満足」の変化量に対して最も大きな貢献をしているのが「成長感覚」であり、次に「教員熱意」である。他の変数もすべて独自の貢献をしながら、総合満足につながっている、と解釈できる。

これらの係数の値は今回のデータに限って得られたものである。しかし総合満足に与える影響は「成長感覚」が最も大きく、かつ他のすべての変数もそれぞれ影響がある、というパターンは昨年度前期および後期に得られた結果とまったく同じものであり単なる偶然であるとは考えがたい。「学生がどの程度成長の感覚を持つか」が最終的に最も重要で、「教えることに対する教員の熱意をどの程度感じるか」「学生自身がどの程度意欲的に取り組むか」「提出物に対するフィードバックがどの程度丁寧と感じられるか」「どの程度シラバス通りに授業が実施されるか」「難易度が適切だとどの程度感じられるか」「メールなどに対する対応がどの程度迅速だと感じられるか」などのすべての要素が、どれも学生の総合的な満足につながっているというのは、直観的にも納得のいく結果ではないだろうか。

5. まとめと結論

全学レベルでのおもな結果をまとめるならば、以下のようである。

1. シラバス内容を知っているのは約 78%であった。この数値は昨年度とあまり変わらない。
2. シラバス内容を知っている学生は、授業はシラバス通りに実施されたと概ね認識した。（最頻値=5、平均値 = 4.30）
3. 授業の難易度については「ちょうど良い」という認識が最も多く、次に「やや難しかった」という認識が多

かった。昨年度に引き続き、全体としては概ね適切な難易度設定がなされていると考えられる。(最頻値=3、
平均値=3.60)

4. 質問やメールをしたことのある学生は約 19%であった。
5. 質問やメールに対する対応は概ね「迅速である」と認識されていた。(最頻値=5 平均値=3.92)
6. 提出物を出した(授業で提出物が課された)学生は全学で約 72%であり、昨年度前期より約 13 ポイント下降している。これはオンライン主体だった昨年度から原則対面の本年度になって提出物を求められる頻度が減ったと解釈できる。
7. 提出物に対するフィードバックは概ね「丁寧である」と認識されていた。(最頻値=5 平均値=3.95)
8. 学生は、自身は「熱意・意欲」をもって授業に取り組んだ、と概ね認識していた。(最頻値=4 平均値=4.12)
9. 担当教員は熱意を持っている、と学生は概ね認識していた。(最頻値=5 平均値=4.43)
10. 過去 2 回の実施で得られた結果と同様、学生自身の意欲の自己認識と、学生が感じる教員の熱意には、強い正の関係が確認された。因果関係は不明ではあるが、教員の側がコントロールできるのは「教えることに対する教員の熱意(の表現)」だけであるため、教員としては授業に熱意を持っているのは当然として、そのことが学生に伝わるよう一層心を砕く必要があろう。
11. 授業を通じて何らかの成長を感じたという認識は多くの学生が持った。ただし最頻値が今回は 5 でなく 4 であった。(最頻値=4 平均値=4.25、昨年度前期よりわずかに下降)
12. すべてを総合して授業に(概ね)満足だと認識した学生(8~10を選んだ学生)は約 71%(昨年前期よりも約 1 ポイント下降)であった。別の表現をするならば全学的に学生の平均満足度は約 81%(前期よりも約 1 ポイント上昇)であった。(最頻値=10 平均値=8.07)
13. 「総合満足」に最も影響があるのは「成長感覚」であり、他の要因もすべてそれぞれ影響があることが、今回も確認された。

昨年度の調査では、前期・後期ともに多くの項目(総合満足、成長感覚、自分意欲)において、1 年次の数値が最も高く、2 年次と 3 年次にやや低くなり、4 年次にまた上昇する、という傾向が確認された。これが果たして同一集団でも入学時から卒業時まで経年的にそのような傾向がある(いわゆる中だるみ現象)のか、昨年度の各学年集団に特有の傾向なのかは 2022 年度の調査を待つ必要があると昨年度の報告書に記したのだが、今回の調査では 1 年生の数値が高くそれが 2 年、3 年ではやや下降するという傾向は必ずしも見られなかった。この点についてはさらに今後の調査を待ちたい。

最後に、全学の傾向は以上の通りであるが、学科による違いが大きな項目も見られる。改善の余地がある部分については学科レベルでのまた教員個人レベルでの取り組みが求められよう。

以上

3.2 2022 年度後期・学生による授業認識アンケート

1. 目的

履修学生の授業に対する認識を調査することで授業の内容や方法の改善に役立てるために実施した。

2. 実施の対象

- (1) シラバスに記載されている開講科目（大学院の科目を除く）。但し、受講者が5名未満の科目、オムニバス科目、専門演習科目（ゼミ）については対象外とした。
- (2) 実施対象科目を全学FD委員会にて選定し、各学部学科にて精査したうえ決定とした。

3. アンケート項目

2022 年度後期の授業に関する学生の認識アンケートの項目は以下の通りであった（従来と同一）。

Q1a あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか。[シラバス既知]

- 2 (はい、(おおよそ) 知っています)
- 1 (いいえ、知りません)

Q1b この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。[シラバス通り]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)
- 1 (まったくそう思わない)

Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

- 5 (とても難しかった)
- 4 (やや難しかった)
- 3 (適切だった)
- 2 (やや易しかった)
- 1 (とても易しかった)

Q3a あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。[メール連絡]

- 2 (はい、あります)
- 1 (いいえ、したことはありません)

Q3b 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速]

- 5 (強くそう思う)
- 4 (どちらかと言えばそう思う)
- 3 (どちらとも言えない)
- 2 (どちらかと言えばそう思わない)

1 (まったくそう思わない)

Q4a この授業では提出物を出しましたか。[提出経験]

2 (はい、出しました)

1 (いいえ、出していません)

Q4b 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

5 (強くそう思う)

4 (どちらかと言えばそう思う)

3 (どちらとも言えない)

2 (どちらかと言えばそう思わない)

1 (まったくそう思わない)

Q5 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[自分意欲]

5 (強くそう思う)

4 (どちらかと言えばそう思う)

3 (どちらとも言えない)

2 (どちらかと言えばそう思わない)

1 (まったくそう思わない)

Q6 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

5 (強くそう思う)

4 (どちらかと言えばそう思う)

3 (どちらとも言えない)

2 (どちらかと言えばそう思わない)

1 (まったくそう思わない)

Q7 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長実感]

5 (強くそう思う)

4 (どちらかと言えばそう思う)

3 (どちらとも言えない)

2 (どちらかと言えばそう思わない)

1 (まったくそう思わない)

Q8 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

10 (100%) 9 (90%)... 2 (20%) 1 (10%)

Q9a 授業について良かった点があれば具体的に書いて下さい (授業担当教員が直接読みます)。

Q9b 授業について改善すべき点があれば具体的に書いて下さい (授業担当教員が直接読みます)。

4. 結果

4.1 対象科目数

対象科目数は 2,453 科目、対象のべ学生数（各対象科目内の履修者数の合計）は 99,657 名であった。これを本報告の集計・分析対象とする。

4.2 のべ回答者数と回答率

回答者数は設問によって異なる。最も包括的な設問である Q8 に回答したのべ学生数は、15,151 名である。よって回答率は $(15,151/99,657 = 0.1520)$ 15.20% である。この数値は Web 方式のアンケートとしても低いと言わざるを得ない。ちなみに、2021 年度前期は 29.70%、後期は 16.99%、2022 年度前期は 25.15% であった。前期よりも後期に回答率が格段に低くなる傾向がある。学科／部局別回答率および学年別回答率を図表 1 に示す。

図表 1 学科／部局別（左）および学年別（右）回答率

学科／部局	回答あり	未回答	合計	回答率
a 日本文学科	850	3461	4311	19.72%
b 中国文学科	360	1935	2295	15.69%
c 英米文学科	550	4041	4591	11.98%
d 教育学科	886	6482	7368	12.02%
e 書道学科	268	1955	2223	12.06%
f 歴史文化学科	423	2453	2876	14.71%
g 社会経済学科	1114	5467	6581	16.93%
h 現代経済学科	540	4631	5171	10.44%
i 中国語学科	818	2863	3681	22.22%
j 英語学科	1080	6770	7850	13.76%
k 日本語学科	301	1485	1786	16.85%
l 法律学科	1532	7026	8558	17.90%
m 政治学科	667	4007	4674	14.27%
n 国際関係学科	570	2361	2931	19.45%
o 国際文化学科	453	1835	2288	19.80%
p 経営学科	1231	9496	10727	11.48%
q スポーツ科学科	931	5567	6498	14.33%
r 健康科学科	478	3705	4183	11.43%
s 看護学科	620	2830	3450	17.97%
t 社会学科	1080	4289	5369	20.12%
u 教職課程センター	348	1605	1953	17.82%
v 国際交流センター	51	242	293	17.41%
合計	15151	84506	99657	15.20%

学年	回答あり	未回答	合計	回答率
1	6840	27294	34134	20.04%
2	5175	28273	33448	15.47%
3	2604	22291	24895	10.46%
4	524	6502	7026	7.46%
合計	15143	84360	99503	15.22%

最も回答率が高かった学科は中国語学科で 22.22% であった。学年別に見ると 1 年 > 2 年 > 3 年 > 4 年と回答率が漸減したのが分かる。これは例年とまったく同様の傾向である。

4.3 結果

Q1a～Q8 までの質問項目ごとに結果を提示してゆく。従来どおり、分析の単位は個別授業に関して回答した個々の学生の回答である。すなわち個別授業ごとに学生の回答をまとめることはしていない。例えば「A 学科の平均値」とは「A 学科で開講していた複数科目に関して回答したすべての学生の回答を平均した値」を指す。授業によっては回答学生数が極めて少ないため個別授業ごとの平均値を出してからそれをさらに平均するという

手順は避けている。

なお Q9a と Q9b（自由記述）については本報告では扱わない。

4.3.1 【Q1a】 あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか。 [シラバス既知]

全学では2「知っている」と回答したのは74.96%(前期は78.18%)であった。やはり25%ほどがシラバスを承知していないようである。学科／部局別および学年別の内訳を図表2に示す。「知っている」と回答した比率が最も高かった学科は看護学科で89.73%であった。これは前期とも昨年度とも同様の結果である。学年別には1年<2年<3年<4年とわずかずつ漸増しており、4年が最も高い。これも例年通りの傾向である。

図表2 Q1a 「シラバス既知」 の学科／部局別（左）および学年別（右）回答

学科／部局	1	2	学年	1	2
a 日本文学科	20.19	79.81	1	27.76	72.24
b 中国文学科	27.50	72.50	2	23.63	76.37
c 英米文学科	22.73	77.27	3	21.56	78.44
d 教育学科	28.41	71.59	4	21.18	78.82
e 書道学科	38.06	61.94			
f 歴史文化学科	32.15	67.85			
g 社会経済学科	19.10	80.90			
h 現代経済学科	24.26	75.74			
i 中国語学科	31.50	68.50			
j 英語学科	25.99	74.01			
k 日本語学科	19.21	80.79			
l 法律学科	29.07	70.93			
m 政治学科	28.40	71.60			
n 国際関係学科	15.06	84.94			
o 国際文化学科	16.56	83.44			
p 経営学科	23.28	76.72			
q スポーツ科学科	29.65	70.35			
r 健康科学科	17.99	82.01			
s 看護学科	10.27	89.73			
t 社会学科	31.17	68.83			
u 教職課程センター	34.96	65.04			
v 国際交流センター	5.88	94.12			

注：2「知っている」 1「知らない」

4.3.2 【Q1b】 この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。 [シラバス通り]

この設問は Q1a で2「はい（おおよそ）知っています」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は4.33（前期は4.30、昨年度後期は4.32）で標準偏差は0.77(前期も0.77、昨年度後期は0.75)と、前期とも昨年度ともほとんど変わっていない。学科／部局別および学年別の数値を図表3に示す。学科で平均値が最も高かったのは日本語学科の4.48であった。学年による違いはほとんどない。表には掲載していないが全学共通科目群（のべ2,079名）の値は、平均4.35、標準偏差0.74であった。

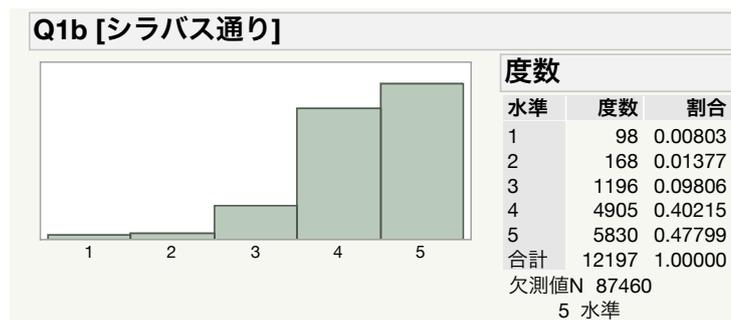
表3 Q1b「シラバス通り」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	700	4.41	0.71
b 中国文学科	269	4.28	0.95
c 英米文学科	455	4.40	0.77
d 教育学科	693	4.24	0.79
e 書道学科	180	4.44	0.83
f 歴史文化学科	313	4.21	0.76
g 社会経済学科	956	4.28	0.77
h 現代経済学科	430	4.28	0.76
i 中国語学科	628	4.32	0.80
j 英語学科	879	4.26	0.87
k 日本語学科	254	4.48	0.70
l 法律学科	1178	4.29	0.74
m 政治学科	530	4.22	0.77
n 国際関係学科	504	4.45	0.73
o 国際文化学科	394	4.39	0.78
p 経営学科	1011	4.36	0.67
q スポーツ科学科	746	4.36	0.81
r 健康科学科	411	4.34	0.81
s 看護学科	583	4.45	0.70
t 社会学科	790	4.29	0.75
u 教職課程センター	244	4.30	0.81
v 国際交流センター	49	4.84	0.43

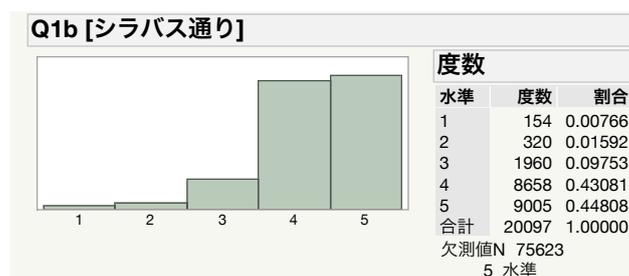
学年	数	平均	標準偏差
1	5429	4.29	0.79
2	4162	4.35	0.76
3	2160	4.37	0.74
4	438	4.32	0.79

より詳細なデータとして5～1の段階別の分布状況を示す。まず全学の分布は図表4の通りである。5が、強くそう思う、4が「どちらかと言えばそう思う」なので、4と5の合計で88.01%（前期は87.88%）の学生が「シラバスは記述どおりに行われた」と認識したことになる。概ね満足できる結果であると言ってよいだろう。

図表4 Q1b「シラバス通り」に対する全学の回答分布



参考：前期



学科／部局別回答分布を図表5に示す。学科／部局ごとの、1「まったくそう思わない」～5「強くそう思う」のそれぞれを回答した学生のパーセンテージを示している。

平均値では明確ではなかった違いが、5を選んだパーセンテージには見られるようだ。5「強くそう思う」の割合が最も大きかったのは書道学科で60.00%であった。5と4「そう思う」を合わせた割合が最も大きかったのは日本語学科で93.70%であった。

図表5 Q1b「シラバス通り」に対する学科／部局別回答分

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.57	0.86	7.00	40.43	51.14
b 中国文学科	3.72	1.49	8.18	36.43	50.19
c 英米文学科	0.88	1.10	9.23	34.51	54.29
d 教育学科	0.87	2.02	11.11	44.59	41.41
e 書道学科	1.11	2.22	8.33	28.33	60.00
f 歴史文化学科	0.64	1.60	11.82	48.24	37.70
g 社会経済学科	0.63	1.57	10.88	43.31	43.62
h 現代経済学科	0.23	2.33	10.47	42.79	44.19
i 中国語学科	0.80	1.91	10.19	38.22	48.89
j 英語学科	2.16	1.25	11.60	38.11	46.87
k 日本語学科	0.79	0.79	4.72	36.61	57.09
l 法律学科	0.25	1.53	11.04	43.80	43.38
m 政治学科	0.75	1.13	13.58	44.91	39.62
n 国際関係学科	0.99	1.19	4.96	37.30	55.56
o 国際文化学科	1.02	1.52	8.12	36.55	52.79
p 経営学科	0.10	0.49	9.20	44.11	46.09
q スポーツ科学科	0.94	0.94	12.47	32.57	53.08
r 健康科学科	1.46	0.97	9.49	37.96	50.12
s 看護学科	0.17	1.03	8.23	34.65	55.92
t 社会学科	0.63	1.90	8.48	45.44	43.54
u 教職課程センター	0.41	2.87	11.07	37.70	47.95
v 国際交流センター	0.00	0.00	2.04	12.24	85.71

学年別回答を図表6に示す。学年による違いはほとんどないと考えてよいと思われる。

図表6 Q1b「シラバス通り」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	0.72	1.49	11.84	39.58	46.36
2	0.94	1.25	8.39	40.46	48.97
3	0.65	1.39	7.64	41.02	49.31
4	1.37	1.14	8.90	41.78	46.80

4.3.3 【Q2】 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

この設問の回答は、5「とても難しい」～1「とても易しい」であり、真ん中が3「ちょうどよい」であるので、数値が高いほど良いわけでも低いほど悪いわけでもないことに留意する必要がある。全学の平均は3.56（昨年度後期は3.58）、標準偏差は0.78（昨年度後期は0.75）であった。すなわち昨年度に引き続き、「ちょうどよい」と「やや難しい」の間に平均があるということであり、全体の傾向としては適切と言えるだろう。

学科／部局別および学年別の平均値を図表7に示す。学科でもっとも数値が高かった（＝難しく感じられていた）のは看護学科の3.85であった。平均値が最も3に近かったのはスポーツ科学科の3.27であった。学年別には、1～2年生のほうが3～4年生よりもわずかながらやや難しいと感じた傾向が読み取れる。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ2,635名）の値は、平均3.47、標準偏差0.79であった。

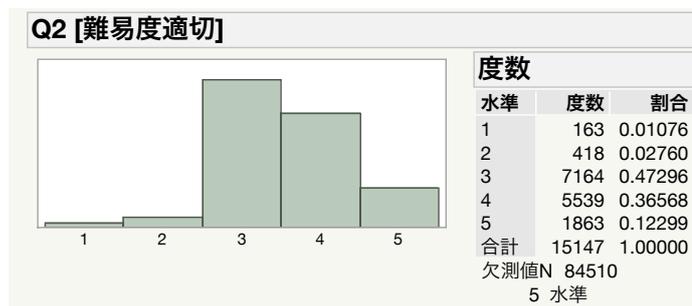
図表7 Q2「難易度適切」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	848	3.41	0.70
b 中国文学科	359	3.50	0.75
c 英米文学科	550	3.44	0.87
d 教育学科	886	3.50	0.77
e 書道学科	267	3.49	0.71
f 歴史文化学科	423	3.51	0.70
g 社会経済学科	1114	3.57	0.77
h 現代経済学科	540	3.63	0.77
i 中国語学科	819	3.58	0.80
j 英語学科	1080	3.56	0.76
k 日本語学科	302	3.46	0.75
l 法律学科	1533	3.65	0.76
m 政治学科	668	3.58	0.80
n 国際関係学科	570	3.55	0.74
o 国際文化学科	451	3.55	0.74
p 経営学科	1232	3.70	0.77
q スポーツ科学科	929	3.27	0.83
r 健康科学科	478	3.83	0.84
s 看護学科	621	3.85	0.84
t 社会学科	1078	3.60	0.76
u 教職課程センター	348	3.35	0.67
v 国際交流センター	51	3.22	0.64

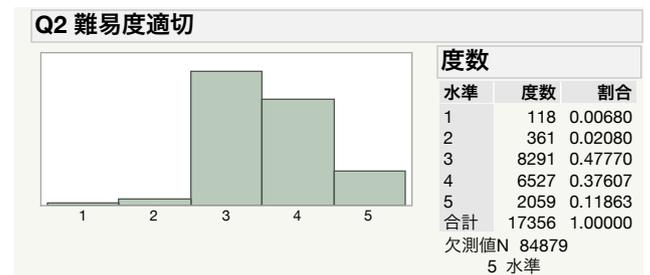
学年	数	平均	標準偏差
1	6841	3.56	0.82
2	5171	3.61	0.76
3	2604	3.49	0.72
4	523	3.48	0.74

1～5の全学の分布は図表8の通りである。3「適切だった」が約47%（昨年度後期は約48%）で、4「やや難しかった」が約37%（昨年度後期は約38%）、5「とても難しかった」が約12%（昨年度後期も約12%）である。1「とても易しい」と2「すこし易しかった」は合わせて約4%（昨年度後期は約3%）である。つまり「ちょうど良い」と思っている学生と、「難しい」と思っている学生が約半々であり、「易しい」と思っている学生はごく少数しかいない。昨年度後期とほぼ同一と言って良い結果となった。

図表8 Q2「難易度適切」に対する全学の回答分布



参考：昨年度後期



学科／部局別の分布を図表9aと図表9bに示す。3「適切だった」の割合が最も大きい学科は日本文学科で57.90%であった。部局では国際交流センターで72.55%であった。スポーツ科学科は1（とても易しい）と回答した割合が4.31%と最も大きかった。5「とても難しかった」の割合が最も大きかったのは看護学科の26.41%、次いで健康科学科の24.06%で、この2学科はその他の学科から突出して高い値となっている。

図表 9 a Q2「難易度適切」に対する学科／部局別回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.71	2.95	57.90	31.25	7.19
b 中国文学科	0.84	3.34	50.42	35.93	9.47
c 英米文学科	2.55	6.55	46.36	33.64	10.91
d 教育学科	1.35	3.05	49.21	36.68	9.71
e 書道学科	1.12	1.50	52.43	37.45	7.49
f 歴史文化学科	0.24	1.89	53.90	34.28	9.69
g 社会経済学科	0.99	3.23	44.88	39.77	11.13
h 現代経済学科	0.93	1.67	43.89	40.19	13.33
i 中国語学科	1.59	2.20	45.05	38.58	12.58
j 英語学科	1.39	3.15	43.24	42.96	9.26
k 日本語学科	0.99	2.65	55.63	30.46	10.26
l 法律学科	0.72	2.02	41.88	41.88	13.50
m 政治学科	1.20	3.44	44.31	38.47	12.57
n 国際関係学科	0.53	2.46	49.30	36.84	10.88
o 国際文化学科	0.67	0.67	53.66	33.04	11.97
p 経営学科	0.00	2.35	42.45	38.07	17.13
q スポーツ科学科	4.31	4.63	57.70	26.48	6.89
r 健康科学科	0.84	1.88	35.15	38.08	24.06
s 看護学科	0.48	1.13	37.84	34.14	26.41
t 社会学科	0.28	2.50	47.96	35.62	13.64
u 教職課程センター	0.57	3.45	61.78	28.45	5.75
v 国際交流センター	0.00	5.88	72.55	15.69	5.88

学年別の状況は図表 10 の通りである。学年による違いは顕著ではないが、強いて言うならば 3「適切である」の割合は、1～2 年生よりも 3～4 年生のほうが多い。また 1「とても易しかった」の割合は 1 年生で最も高い（1.46%に過ぎないが）。逆に 5「とても難しかった」の割合も 1 年生で最も高い（13.77%）。この傾向の意味を解釈するのは難しいが、授業の難易度のターゲットを最も絞りにくいのが 1 年生であると言えるかもしれない。なお 1「とても易しかった」が 1 年生に最も多かったのは前期にも観察された現象である。

図表 10 Q2「難易度適切」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.46	3.32	46.35	35.10	13.77
2	0.73	2.15	45.21	39.37	12.53
3	0.84	2.50	52.38	35.83	8.45
4	0.57	2.87	54.68	31.74	10.13

4.3.4 【Q3a】あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。【メール連絡】

全学では、2「したことがある」と回答したのは 20.92%と、前期の 18.74%よりもやや多かった。学科別および学年別の内訳を図表 11 に示す。質問やメール連絡をしたことがある学生の割合は、教員と学生の距離のひとつの目安にはなるのかもしれない。

学科のなかで、質問やメールで連絡したことがある割合がもっとも高いのは前期に引き続き日本語学科で 31.76%であった。学科による違いは結構あるといえるだろう。

学年別には 1 年生 < 2 年生 < 3 年生 < 4 年生と順序よく高まっている。特に 4 年生が高い。卒業が近づいてき

て様々な連絡や質問をする頻度が多くなったのではないかと解釈できる。

図表 11 Q3a 「メール連絡」の学科／部局別（左）と学年別（右）回答

学科／部局	1	2	学年	1	2
a 日本文学科	70.86	29.14	1	81.15	18.85
b 中国文学科	77.31	22.69	2	78.57	21.43
c 英米文学科	74.50	25.50	3	77.37	22.63
d 教育学科	83.39	16.61	4	65.44	34.56
e 書道学科	72.56	27.44			
f 歴史文化学科	81.75	18.25			
g 社会経済学科	84.34	15.66			
h 現代経済学科	81.94	18.06			
i 中国語学科	75.89	24.11			
j 英語学科	74.16	25.84			
k 日本語学科	68.24	31.76			
l 法律学科	85.23	14.77			
m 政治学科	77.89	22.11			
n 国際関係学科	77.44	22.56			
o 国際文化学科	76.22	23.78			
p 経営学科	86.09	13.91			
q スポーツ科学科	77.37	22.63			
r 健康科学科	80.55	19.45			
s 看護学科	74.64	25.36			
t 社会学科	78.90	21.10			
u 教職課程センター	77.68	22.32			
v 国際交流センター	78.00	22.00			

4.3.5 【Q3b】 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか。[対応迅速]

この設問には Q3a で「メールで連絡をしたことがある」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は 4.00（前期は 3.92）で標準偏差は 1.03（前期も 1.03）であった。すなわち「そう思う」が平均値ということなので、教員の対応は迅速であると認識されていたと言える。

学科／部局別および学年別の数値を図表 12 に示す。最も数値が高い学科は前期に引き続き日本語学科の 4.50 であった。学年による違いはごくわずかであるが、3 年が最も高かった。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 739 名）の値は、平均 3.88、標準偏差 1.04 であった。

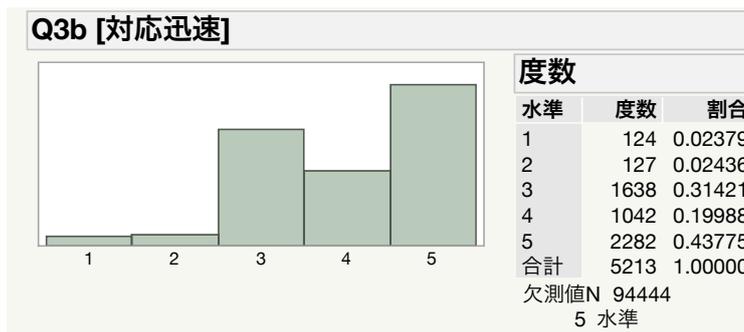
図表 12 Q3b「対応迅速」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	平均	標準偏差
a 日本文学科	4.29	0.91
b 中国文学科	4.15	1.07
c 英米文学科	3.90	1.16
d 教育学科	3.89	1.07
e 書道学科	4.20	1.10
f 歴史文化学科	3.96	1.00
g 社会経済学科	3.78	1.01
h 現代経済学科	4.02	1.07
i 中国語学科	4.02	1.04
j 英語学科	4.02	1.10
k 日本語学科	4.50	0.84
l 法律学科	3.90	0.98
m 政治学科	3.93	0.93
n 国際関係学科	4.19	1.00
o 国際文化学科	3.96	1.08
p 経営学科	3.75	0.95
q スポーツ科学科	3.96	1.04
r 健康科学科	3.96	1.07
s 看護学科	4.16	1.02
t 社会学科	4.10	0.98
u 教職課程センター	3.99	1.07
v 国際交流センター	4.62	0.97

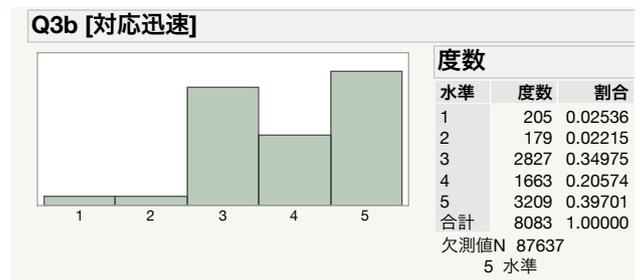
学年	平均	標準偏差
1	3.90	1.03
2	4.06	1.03
3	4.13	1.01
4	4.11	0.99

より詳細な状況を示すデータとして5～1の段階別の分布状況を示す。まず全学の分布は図表 13 の通りである。上に述べたように平均値は 4.00 であったが、最頻値は5「とてもそう思う」で、約 44%（前期は約 40%）の学生が質問やメールに対する対応は迅速であったと強く認識した、ということであり、満足すべき結果と言えるだろう。

図表 13 Q3b「対応迅速」に対する全学の回答分布



参考：前期



学科／部局別回答分布を図表 14 に示す。5 の数値が最も高かった学科は日本語学科の 68.70%であった。学科によってかなり数値に差があることがわかる。

図表 14 Q3b「対応迅速」に対する学科／部局別回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	1.27	0.63	21.27	21.27	55.56
b 中国文学科	3.25	2.44	23.58	17.89	52.85
c 英米文学科	5.24	3.33	30.95	17.62	42.86
d 教育学科	3.46	1.92	36.15	18.85	39.62
e 書道学科	4.49	2.25	17.98	19.10	56.18
f 歴史文化学科	0.85	4.24	33.90	20.34	40.68
g 社会経済学科	3.23	1.89	39.35	24.53	31.00
h 現代経済学科	2.67	4.67	26.00	21.33	45.33
i 中国語学科	2.20	3.46	28.93	21.07	44.34
j 英語学科	3.16	3.39	30.02	15.12	48.31
k 日本語学科	0.76	1.53	13.74	15.27	68.70
l 法律学科	1.79	1.79	37.44	22.56	36.41
m 政治学科	1.23	1.23	35.39	27.16	34.98
n 国際関係学科	0.93	3.26	26.51	14.42	54.88
o 国際文化学科	3.87	2.76	28.73	23.20	41.44
p 経営学科	1.52	2.27	44.70	22.73	28.79
q スポーツ科学科	2.86	1.30	35.16	18.49	42.19
r 健康科学科	2.65	1.99	37.09	13.25	45.03
s 看護学科	1.53	3.45	25.29	16.86	52.87
t 社会学科	1.53	2.45	27.30	22.09	46.63
u 教職課程センター	2.56	4.27	29.06	19.66	44.44
v 国際交流センター	4.76	0.00	4.76	9.52	80.95

学年別の分布を図表 15 に示す。5 と回答した割合は 3 年生、そして 4 年生が高い。1 年生の数値がやや低いのが気になるところである。

図表 15 Q3b「対応迅速」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	2.55	2.16	36.98	19.05	39.27
2	2.44	2.61	28.13	20.31	46.51
3	2.05	2.74	24.77	21.12	49.32
4	1.57	2.75	26.27	22.35	47.06

4.3.6 【Q4a】この授業では提出物を出しましたか。[提出経験]

全体では、1「出していない」が、27.39%、2「出した」が72.61%である。前期もそうであったが、原則対面授業であった今年度は、オンライン授業が多かった昨年度よりも提出物を課される率がやや減った。このくらいが平常なのかもしれない。

学科別および学年別の内訳を図表 16 に示す。2「出した」という回答が 80%を超えている学科が 3 つある。提出物を課す度合いは学科によってかなり違うようである。

図表 16 Q4a「提出経験」の学科／部局別（左）および学年別（右）回答

学科／部局	1	2
a 日本文学科	21.29	78.71
b 中国文学科	29.69	70.31
c 英米文学科	31.18	68.82
d 教育学科	29.93	70.07
e 書道学科	11.57	88.43
f 歴史文化学科	42.75	57.25
g 社会経済学科	26.40	73.60
h 現代経済学科	28.20	71.80
i 中国語学科	40.59	59.41
j 英語学科	22.40	77.60
k 日本語学科	11.07	88.93
l 法律学科	39.37	60.63
m 政治学科	32.17	67.83
n 国際関係学科	18.49	81.51
o 国際文化学科	23.50	76.50
p 経営学科	20.91	79.09
q スポーツ科学科	29.42	70.58
r 健康科学科	29.62	70.38
s 看護学科	16.48	83.52
t 社会学科	28.89	71.11
u 教職課程センター	12.68	87.32
v 国際交流センター	5.88	94.12

学年	1	2
1	28.70	71.30
2	26.40	73.60
3	25.43	74.57
4	29.81	70.19

1：提出したことがない 2:提出したことがある

4.3.7 【Q4b】 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。[FB 丁寧]

この設問は Q4a に「提出したことがある」と回答した学生のみ回答したものである。

全学の平均は 4.05 で標準偏差が 0.96 である。前期は 3.95、昨年度後期は 4.01、昨年度前期は 3.97 が平均であったので、アンケートにこの設問を含め出してから数値が最も高かったことになる。昨年度後期の授業認識アンケートの自由記述を分析した結果の示唆として「フィードバックのサステナビリティ原則」すなわち課題を提出させたならば次の授業で必ず何らかのフィードバックをすることを提案したが、それに沿った形で全学の授業においてフィードバックの丁寧さが向上したとすれば喜ばしいことである。

学科／部局別および学年別の平均値を図表 17 に示す。学科で最も高いのが書道学科の 4.39、次いで日本語学科の 4.38 であった。学年による違いはほとんどないようである。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 1,932 名）の値は、平均 3.91、標準偏差 0.95 であった。

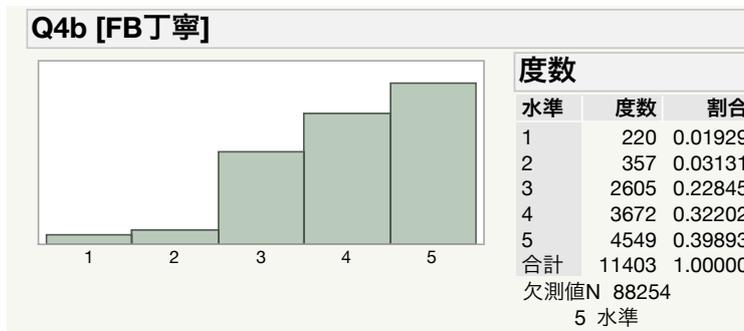
より詳細な様子を知るために水準別の分布を見てゆく。まず全学の分布を図表 18 に示す。上述のように平均値としては 4.05 だが、度数が最も高いのが 5 「強くそう思う」であり、約 40%を占める。これは非常に望ましいことである。また前期と比べると、1 「まったくそう思わない」という回答が、2.3%から 1.9%に減っている。

図表 17 Q4b「FB 丁寧」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

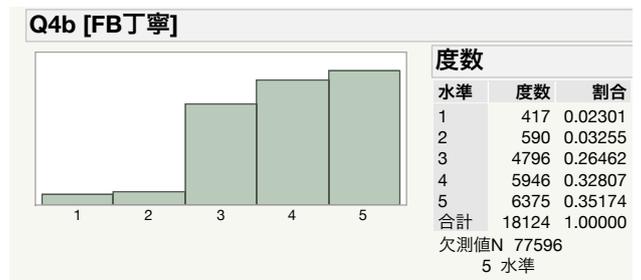
学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	685	4.17	0.89
b 中国文学科	259	4.06	1.09
c 英米文学科	392	4.18	0.97
d 教育学科	659	3.83	0.97
e 書道学科	238	4.39	0.88
f 歴史文化学科	251	4.02	0.95
g 社会経済学科	848	4.05	0.96
h 現代経済学科	399	3.73	1.03
i 中国語学科	524	4.02	0.98
j 英語学科	866	4.06	1.05
k 日本語学科	269	4.38	0.91
l 法律学科	970	4.05	0.89
m 政治学科	484	4.01	0.88
n 国際関係学科	478	4.31	0.87
o 国際文化学科	354	4.14	0.94
p 経営学科	1020	3.85	0.96
q スポーツ科学科	690	3.93	0.95
r 健康科学科	349	3.91	1.01
s 看護学科	541	4.14	0.92
t 社会学科	776	4.13	0.91
u 教職課程センター	302	4.21	0.97
v 国際交流センター	49	4.71	0.87

学年	数	平均	標準偏差
1	5092	4.02	0.95
2	3923	4.08	0.97
3	1990	4.06	0.95
4	392	4.02	0.98

図表 18 Q4b「FB 丁寧」に対する全学の回答分布



参考：前期



学科／部局ごとの分布を図表 19 に示す。5「強くそう思う」の割合は学科によってかなり異なっているのが見て取れる。学科で5と回答したのが最も多かったのは書道学科で 60.92%であった。次いで多かったのは日本語学科の 59.11%であった。

図表 19 Q4b「FB 丁寧」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	1.17	2.48	18.39	34.45	43.50
b 中国文学科	3.47	5.02	20.08	25.10	46.33
c 英米文学科	2.04	2.55	19.39	27.30	48.72
d 教育学科	2.12	4.70	29.59	34.75	28.83
e 書道学科	0.84	2.10	15.55	20.59	60.92
f 歴史文化学科	1.59	3.19	25.10	31.87	38.25
g 社会経済学科	2.48	2.59	20.75	35.73	38.44
h 現代経済学科	3.76	5.26	31.08	33.58	26.32
i 中国語学科	1.91	3.82	23.85	31.49	38.93
j 英語学科	3.93	3.00	19.52	30.60	42.96
k 日本語学科	1.49	3.72	8.92	26.77	59.11
l 法律学科	0.93	2.47	24.85	34.64	37.11
m 政治学科	1.45	1.65	25.00	38.43	33.47
n 国際関係学科	1.46	1.46	14.23	30.75	52.09
o 国際文化学科	1.69	3.39	18.08	32.77	44.07
p 経営学科	1.96	4.22	30.29	34.31	29.22
q スポーツ科学科	1.59	1.88	32.90	28.70	34.93
r 健康科学科	2.29	4.30	29.23	28.94	35.24
s 看護学科	0.92	2.96	21.81	29.57	44.73
t 社会学科	1.42	3.09	17.65	36.73	41.11
u 教職課程センター	1.66	3.97	16.56	27.81	50.00
v 国際交流センター	4.08	0.00	2.04	8.16	85.71

学年別の状況を図表 20 に示す。2 と回答した割合は今回は 2 年生で最も高かったが、学年別の差はほぼないと言ってよいだろう。

図表 20 Q4b「FB 丁寧」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.89	2.63	25.00	32.21	38.28
2	1.99	3.59	20.95	31.18	42.29
3	1.86	3.52	20.85	34.32	39.45
4	2.30	3.06	24.23	31.63	38.78

4.3.8 【Q5】 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。[自分意欲]

この設問に対する全学の平均は 4.14 で、標準偏差は 0.80 と、ほぼ前期および昨年度と同様であった。4 「どちらかと言えばそう思う」と 5 「強くそう思う」の間であり、学生は平均的には意欲を持って授業に取り組んでいたと言えるだろう。学科／部局別および学年別の平均値を図表 21 に示す。

学科で最も値が高かったのは、書道学科の 4.50 であった。学年別には 3 年と 4 年がやや低いという傾向が見てとれる。

表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 2,631 名）の値は、平均 4.13、標準偏差 0.79 であった。

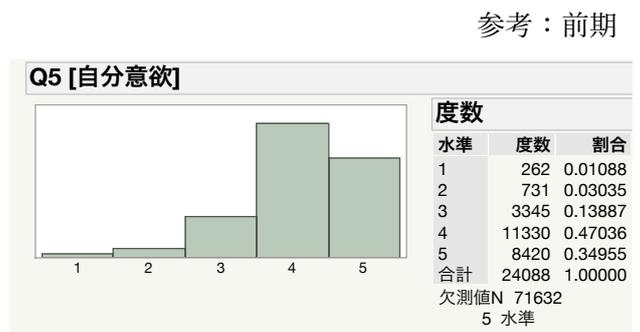
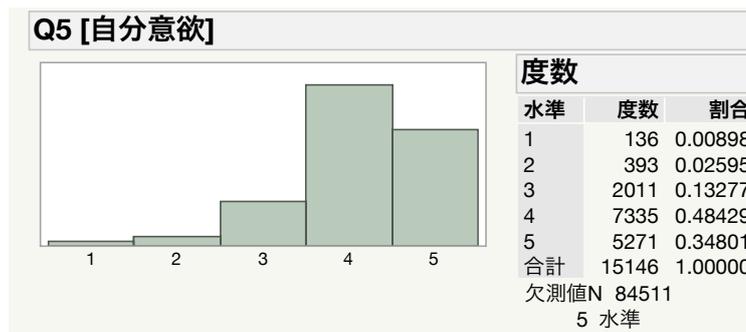
図表 21 Q5「自分意欲」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	851	4.17	0.80
b 中国文学科	359	4.18	0.82
c 英米文学科	550	4.19	0.77
d 教育学科	886	4.10	0.85
e 書道学科	267	4.50	0.74
f 歴史文化学科	420	4.16	0.79
g 社会経済学科	1114	4.05	0.77
h 現代経済学科	539	3.95	0.84
i 中国語学科	819	4.22	0.79
j 英語学科	1079	4.14	0.89
k 日本語学科	302	4.29	0.77
l 法律学科	1532	4.01	0.79
m 政治学科	667	3.98	0.86
n 国際関係学科	569	4.21	0.73
o 国際文化学科	453	4.26	0.76
p 経営学科	1232	4.09	0.78
q スポーツ科学科	928	4.38	0.70
r 健康科学科	478	4.13	0.80
s 看護学科	621	4.27	0.76
t 社会学科	1081	4.05	0.82
u 教職課程センター	348	4.08	0.78
v 国際交流センター	51	4.59	0.73

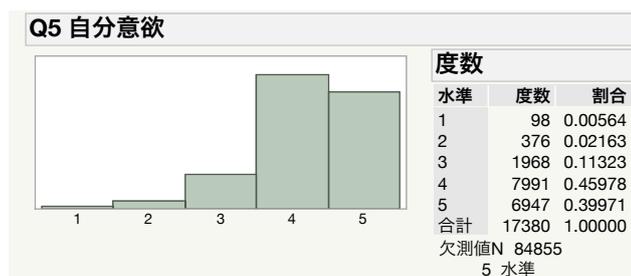
学年	数	平均	標準偏差
1	6840	4.13	0.82
2	5168	4.17	0.78
3	2607	4.11	0.80
4	523	4.01	0.82

水準別の分布を見てゆく。全学の分布は図表 22 のとおりである。最頻値は 4 であり約 48%を占める。4 と 5 を合わせると約 83%である。

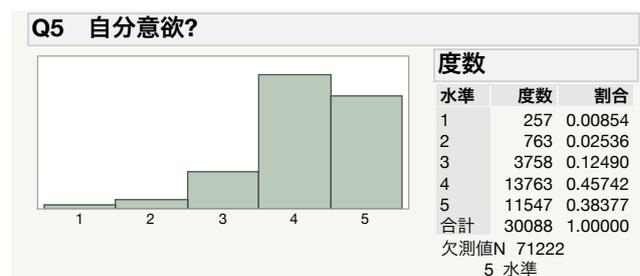
図表 22 Q5「自分意欲」に対する全学の回答分布



参考: 2021 年度後期



参考: 2021 年度前期



学科別には図表 23 のように分布していた。5「強くそう思う」の割合には学科によって顕著な違いがある。最も大きかった学科が書道学科の 60.92%、次いで日本語学科の 59.11%であった。Q4b で最も値が高かった 2 学科と同一である。

図表 23 Q5「自分意欲」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	1.17	2.48	18.39	34.45	43.50
b 中国文学科	3.47	5.02	20.08	25.10	46.33
c 英米文学科	2.04	2.55	19.39	27.30	48.72
d 教育学科	2.12	4.70	29.59	34.75	28.83
e 書道学科	0.84	2.10	15.55	20.59	60.92
f 歴史文化学科	1.59	3.19	25.10	31.87	38.25
g 社会経済学科	2.48	2.59	20.75	35.73	38.44
h 現代経済学科	3.76	5.26	31.08	33.58	26.32
i 中国語学科	1.91	3.82	23.85	31.49	38.93
j 英語学科	3.93	3.00	19.52	30.60	42.96
k 日本語学科	1.49	3.72	8.92	26.77	59.11
l 法律学科	0.93	2.47	24.85	34.64	37.11
m 政治学科	1.45	1.65	25.00	38.43	33.47
n 国際関係学科	1.46	1.46	14.23	30.75	52.09
o 国際文化学科	1.69	3.39	18.08	32.77	44.07
p 経営学科	1.96	4.22	30.29	34.31	29.22
q スポーツ科学科	1.59	1.88	32.90	28.70	34.93
r 健康科学科	2.29	4.30	29.23	28.94	35.24
s 看護学科	0.92	2.96	21.81	29.57	44.73
t 社会学科	1.42	3.09	17.65	36.73	41.11
u 教職課程センター	1.66	3.97	16.56	27.81	50.00
v 国際交流センター	4.08	0.00	2.04	8.16	85.71

学年別の分布を図表 24 に示す。ほとんど差はないとも言えるが、5 が最も多かったのは 2 年生である。これも Q4b の値が高かった学年と同一である。

図表 24 Q5「自分意欲」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.89	2.63	25.00	32.21	38.28
2	1.99	3.59	20.95	31.18	42.29
3	1.86	3.52	20.85	34.32	39.45
4	2.30	3.06	24.23	31.63	38.78

4.3.9 【Q6】 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

この設問に対する回答の全学の平均は 4.47（標準偏差 0.75）であった。前期は 4.43、昨年度後期は 4.41 昨年度前期は 4.39 であったので、4.39→4.41→4.43→4.47 と向上してきたことになる。このデータは無作為抽出ではなく希望者による回答なので確かなことは言えないものの、喜ばしいことであるのは間違いないだろう。4.47 とは「どちらかと言えばそう思う」と「強くそう思う」のちょうどほぼ中間なので、その意味でも満足すべき数値であろう。

学科／部局別および学年別の平均値を図表 25 に示す。数値にそれほど違いはないが、最も高かった学科は書道学科の 4.66 であった。学年別では大きな違いではないものの、1 年生が最も低かったのが気になるところで

ある。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 2,635 名）の値は、平均 4.47、標準偏差 0.72 であった。

図表 25 Q6「教員熱意」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

学科／部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	851	4.58	0.66
b 中国文学科	360	4.51	0.85
c 英米文学科	551	4.58	0.73
d 教育学科	885	4.45	0.77
e 書道学科	268	4.66	0.74
f 歴史文化学科	422	4.47	0.82
g 社会経済学科	1114	4.42	0.76
h 現代経済学科	540	4.31	0.76
i 中国語学科	820	4.47	0.73
j 英語学科	1081	4.45	0.83
k 日本語学科	302	4.61	0.68
l 法律学科	1533	4.43	0.70
m 政治学科	667	4.37	0.78
n 国際関係学科	570	4.64	0.66
o 国際文化学科	454	4.46	0.79
p 経営学科	1231	4.37	0.75
q スポーツ科学科	931	4.61	0.68
r 健康科学科	478	4.51	0.72
s 看護学科	622	4.51	0.74
t 社会学科	1080	4.45	0.73
u 教職課程センター	349	4.56	0.69
v 国際交流センター	51	4.84	0.54

学年	数	平均	標準偏差
1	6845	4.43	0.78
2	5176	4.52	0.73
3	2607	4.51	0.69
4	524	4.49	0.72

水準別の回答分布を検討する。全学の回答分布を図表 26 に示す。これまでも最頻値は 5 「強くそう思う」であり今回もそうであるが、今回は、59.26%を占める。前期は 56.62%、昨年度後期は 54.76%、昨年度前期は 53.90%であったので、53.90→54.76→56.62→59.26 と徐々に値が上昇してきている。5 と 4 の合計では 91%を超え、「教員は熱意をもって授業を行っている」という認識が圧倒的に多いと言って良い。絶対回答数が少ないとはいえ、喜ばしいことである。

図表 26 Q6「教員熱意」に対する全学の回答分布



学科／部局別の分布を図表 27 に示す。平均値にはそれほど差がなくとも、5 「強くそう思う」の回答割合には学科によって顕著な違いが見られる。5 の割合が最も大きかった学科は書道学科で 75.37%、次いで国際関係

学科で 71.40%であった。

図表 27 設問 6「教員熱意」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.24	1.06	4.94	27.97	65.80
b 中国文学科	2.78	0.83	4.17	26.94	65.28
c 英米文学科	0.91	1.63	4.36	24.68	68.42
d 教育学科	1.02	1.58	6.33	33.45	57.63
e 書道学科	1.87	1.49	0.75	20.52	75.37
f 歴史文化学科	1.90	1.42	5.21	30.81	60.66
g 社会経済学科	0.99	1.26	7.36	35.91	54.49
h 現代経済学科	0.37	1.48	11.11	40.56	46.48
i 中国語学科	0.85	0.85	6.83	33.41	58.05
j 英語学科	1.94	1.57	6.01	30.34	60.13
k 日本語学科	0.33	1.66	4.30	24.17	69.54
l 法律学科	0.46	0.78	6.85	39.60	52.32
m 政治学科	1.05	1.05	9.60	36.43	51.87
n 国際関係学科	0.70	0.35	4.91	22.63	71.40
o 国際文化学科	1.10	1.32	8.15	29.07	60.35
p 経営学科	0.49	0.89	10.48	37.12	51.02
q スポーツ科学科	0.64	0.86	4.62	25.03	68.85
r 健康科学科	0.63	0.63	7.74	29.50	61.51
s 看護学科	0.80	1.13	6.75	28.62	62.70
t 社会学科	0.74	1.30	5.65	37.04	55.28
u 教職課程センター	0.86	0.57	4.30	30.09	64.18
v 国際交流センター	0.00	1.96	1.96	5.88	90.20

学年別の状況を図表 28 に示す。今回は、5「強く思う」の割合が最も大きかったのは2年生である。すなわち「教員には熱意がある」、「自分には熱意がある」、「課題に対するフィードバックが丁寧である」と最も強く感じたのが、いずれも2年生であったということである。

図表 28 Q6「教員熱意」に対する学年別回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.02	1.36	7.77	33.25	56.60
2	0.87	1.12	5.43	30.16	62.42
3	0.61	0.58	5.72	33.33	59.76
4	0.76	0.57	6.87	32.06	59.73

4.3.10 学生の意欲と教員に熱意を感じる度合いの関係

Q5「自分意欲」とQ6「教員熱意」の全学のクロス集計をした結果を、図表 29a と 29b に示す。いずれも行を「教員熱意」、列を「自分意欲」とした。29a は度数 (回答数) を、29b は行ごとのパーセンテージを示している。セルの値の大きさに応じて背景色が濃くなるよう設定した。図表 29a からはセルごとの人数がどの程度いたかがひと目で分かる。図表 29b からは、教員熱意の回答ごとに、自分意欲の回答がどのように分布していたかがわかりやすい。図表 29a でも 29b でも、濃度の濃いセルが右肩下がりに分布している。これは教員熱意の数値が高いほど、自分意欲の数値が高くなる傾向があることを示している。教員熱意が5 のとき自分意欲の最頻値セルは 自

分意欲 = 5、教員熱意が 4 のときの最頻値セルは自分意欲 = 4、教員熱意が 3 のときの最頻値セルは自分意欲=3、ときれいに連動している。教員意欲が 2 のときは自分意欲の最頻値セルは 2 でなく 4 あるのがパターンからはずれているが、教員意欲 1 のときの最頻値セルは自分意欲=1 である。

2 つの変数を連続尺度とみなしてピアソン相関係数を求めると、 $r = .5168$ ($p < .001$) であった。相関関係は強い。教員から感じる熱意が学生の意欲を引き出している可能性も大きい。

図表 29a 自分意欲の回答と教員熱意の回答のクロス集計 [度数]

度数	自分意欲 = 1	自分意欲 = 2	自分意欲 = 3	自分意欲 = 4	自分意欲 = 5	合計
教員熱意 = 1	47	16	28	25	18	134
教員熱意 = 2	10	43	49	52	14	168
教員熱意 = 3	28	81	586	246	57	998
教員熱意 = 4	33	163	863	3391	416	4866
教員熱意 = 5	18	90	485	3614	4766	8973
合計	136	393	2011	7328	5271	15139

図表 29b 自分意欲の回答と教員熱意の回答のクロス集計 [行のパーセンテージ]

行%	自分意欲 = 1	自分意欲 = 2	自分意欲 = 3	自分意欲 = 4	自分意欲 = 5	合計
1	35.07	11.94	20.90	18.66	13.43	100.00
2	5.95	25.60	29.17	30.95	8.33	100.00
3	2.81	8.12	58.72	24.65	5.71	100.00
4	0.68	3.35	17.74	69.69	8.55	100.00
5	0.20	1.00	5.41	40.28	53.11	100.00

4.3.11 【Q7】 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。[成長実感]

この設問に対する全学の平均値は 4.30（前期は 4.25、昨年度後期は 4.31、昨年度前期は 4.28）で標準偏差は 0.79（前期は 0.83）であった。従来からほとんど変わらない数値であり、全体の値としては悪くないと思われる。平均値を学科／部局別および学年別に整理して図表 30 として示す。

図表 30 Q7「成長実感」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

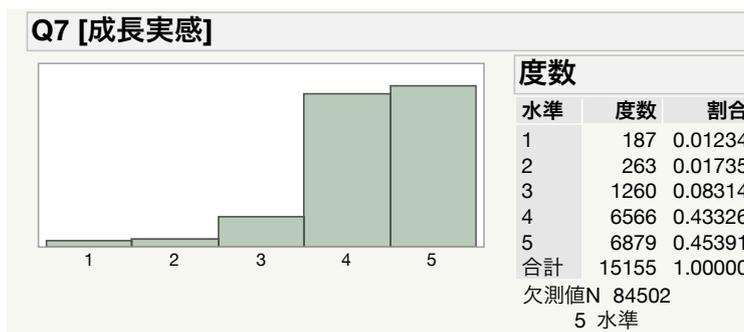
学科/部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	851	4.42	0.73
b 中国文学科	359	4.38	0.83
c 英米文学科	549	4.31	0.83
d 教育学科	886	4.29	0.78
e 書道学科	267	4.58	0.64
f 歴史文化学科	423	4.35	0.76
g 社会経済学科	1114	4.19	0.80
h 現代経済学科	540	4.13	0.81
i 中国語学科	820	4.37	0.76
j 英語学科	1081	4.25	0.91
k 日本語学科	302	4.42	0.68
l 法律学科	1530	4.21	0.74
m 政治学科	668	4.18	0.83
n 国際関係学科	570	4.41	0.77
o 国際文化学科	454	4.39	0.73
p 経営学科	1231	4.25	0.78
q スポーツ科学科	930	4.42	0.77
r 健康科学科	478	4.26	0.85
s 看護学科	622	4.41	0.74
t 社会学科	1080	4.24	0.79
u 教職課程センター	349	4.36	0.82
v 国際交流センター	51	4.61	1.00

学年	数	平均	標準偏差
1	6843	4.26	0.82
2	5175	4.33	0.78
3	2607	4.34	0.73
4	522	4.30	0.80

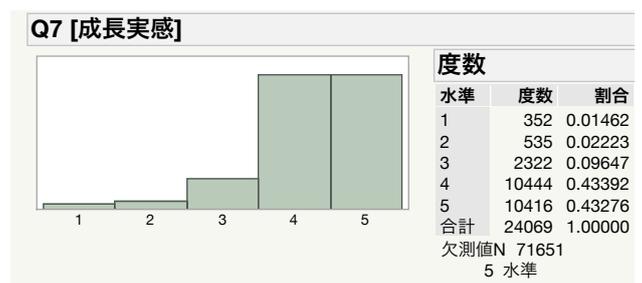
学科で最も高い平均値は書道学科の 4.58 であった。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 2,634 名）の値は、平均 4.29、標準偏差 0.75 であった。学年別では 1 年生がやや低かった。

水準別の全学の分布を図表 31 に示す。最頻値は 5「強くそう思う」であり、僅かな差で、4「強くそう思う」が続いている。4 と 5 の合計で 88.7%を占めており、喜ばしいことである。

図表 31 Q7「成長実感」に対する全学の回答分布



参考：前期



水準別の分布を学科／部局別にまとめたものが図表 32 である。

図表 32 Q7「成長実感」に対する学科／部局別の回答分布

学科/部局	1	2	3	4	5
a 日本文学科	0.94	1.29	5.29	40.07	52.41
b 中国文学科	1.95	1.95	5.01	38.44	52.65
c 英米文学科	1.64	2.00	7.83	40.44	48.09
d 教育学科	1.13	1.81	8.24	45.03	43.79
e 書道学科	0.37	0.37	4.87	29.59	64.79
f 歴史文化学科	1.89	0.95	3.55	47.75	45.86
g 社会経済学科	1.35	1.80	11.13	48.03	37.70
h 現代経済学科	1.30	2.22	12.59	49.81	34.07
i 中国語学科	1.46	0.73	5.98	43.05	48.78
j 英語学科	2.59	2.59	8.42	39.96	46.44
k 日本語学科	0.33	1.66	3.64	44.04	50.33
l 法律学科	0.72	1.44	10.33	51.50	36.01
m 政治学科	1.65	1.95	11.53	47.01	37.87
n 国際関係学科	1.05	1.40	7.02	36.84	53.68
o 国際文化学科	0.66	1.54	6.17	40.97	50.66
p 経営学科	0.73	2.36	9.59	46.22	41.10
q スポーツ科学科	1.18	0.86	7.96	34.52	55.48
r 健康科学科	1.67	2.09	10.04	40.59	45.61
s 看護学科	0.64	1.45	7.07	38.26	52.57
t 社会学科	0.93	2.78	8.61	47.22	40.46
u 教職課程センター	1.43	1.72	8.31	36.39	52.15
v 国際交流センター	5.88	0.00	1.96	11.76	80.39

平均値からは読み取れなかった学科による違いも、水準ごとのパーセンテージを比べてみると読み取ることができるようだ。5「強くそう思う」の割合は、書道学科が群を抜いて大きく64.79%である一方、30%台の学科もある。

学年別の違いをまとめたのが図表 33 である。5「強くそう思う」の割合最も大きいのは前期は4年生だったのだが、今回は2年生である。

図表 33 Q7「成長実感」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5
1	1.43	2.05	9.32	43.43	43.77
2	1.14	1.66	7.54	42.53	47.13
3	0.73	1.23	7.48	44.19	46.38
4	1.92	0.96	7.09	45.59	44.44

4.3.12 【Q8】 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

この設問に対する回答の全学の平均値は8.20（前期は8.07、昨年度後期は8.28、昨年度前期は8.16）、標準偏差は1.74（前期は1.81）である。8.20は「82.0%満足である」あるいは「100点満点の82点」と読み替えることができ、非常に高いわけではないが、全体の平均値としては「合格点」と言える結果ではないだろうか。また昨年度と今年度の共通パターンとして、前期よりも後期のほうが僅かに満足度が高くなる傾向が観察される。

図表 34 に学科／部局別および学年別の数値をまとめた。

図表 34 Q8「総合満足」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差

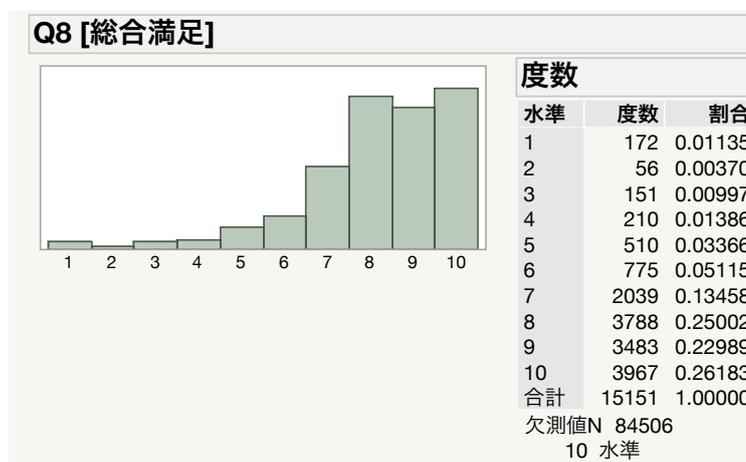
学科/部局	数	平均	標準偏差
a 日本文学科	850	8.41	1.54
b 中国文学科	360	8.32	2.08
c 英米文学科	550	8.26	1.83
d 教育学科	886	8.04	1.78
e 書道学科	268	8.86	1.49
f 歴史文化学科	423	8.17	1.77
g 社会経済学科	1114	8.11	1.68
h 現代経済学科	540	7.91	1.84
i 中国語学科	818	8.31	1.75
j 英語学科	1080	8.14	1.99
k 日本語学科	301	8.51	1.64
l 法律学科	1532	8.01	1.67
m 政治学科	667	7.97	1.78
n 国際関係学科	570	8.51	1.63
o 国際文化学科	453	8.33	1.81
p 経営学科	1231	8.07	1.63
q スポーツ科学科	931	8.70	1.46
r 健康科学科	478	7.96	1.92
s 看護学科	620	8.36	1.69
t 社会学科	1080	8.07	1.75
u 教職課程センター	348	8.24	1.61
v 国際交流センター	51	9.16	1.90

学年	数	平均	標準偏差
1	6840	8.10	1.81
2	5175	8.28	1.69
3	2604	8.33	1.65
4	524	8.29	1.75

学科で最も平均値が高いのは書道学科の 8.86 であった。書道学科は値のばらつき（標準偏差）も 1.49 とスポーツ科学科に次いで小さく、学生がおしなべて高い満足度を持っている傾向が伺える。なお表には掲載していないが全学共通科目群（のべ 2,637 名）の値は、平均 8.27、標準偏差 1.61 であった。学年では 1 年生の値が 8.10 と最も低かったのが気になるところである。

より詳しく分布を見てゆく。まず全学の水準別の分布は図表 35 の通りである。最頻値は 10 で、全体の 26.2% である。9 が 23.0%、8 が 25.0% なので、10～8 で、全体の 74.2% を占める（前期は 70.6%、昨年度後期は 75.5%、昨年度前期は 71.7%）を占める。昨年度に引き続き、前期よりも後期のほうが満足度がやや高くなる、という傾向が観察された。また度数は多くないものの、1～4 という低い水準の回答も存在する。

図表 35 Q8「総合満足」の全学の回答分布



図表 36 Q8「総合満足」に対する学科／部局別の回答分布

学科／部局	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
a 日本文学科	0.47	0.12	0.71	1.29	2.24	4.82	11.29	25.76	25.41	27.88
b 中国文学科	3.61	0.56	0.28	2.22	1.39	3.89	10.28	19.72	23.06	35.00
c 英米文学科	1.45	0.73	1.27	1.09	2.91	4.91	10.91	25.27	22.55	28.91
d 教育学科	1.13	0.34	1.47	1.13	4.29	6.55	15.46	25.28	21.22	23.14
e 書道学科	1.12	0.00	0.00	1.49	0.00	2.61	6.34	20.90	23.51	44.03
f 歴史文化学科	1.65	0.95	0.71	0.47	2.13	4.49	15.84	29.31	18.20	26.24
g 社会経済学科	1.17	0.18	1.08	0.72	3.95	4.76	16.97	25.94	24.15	21.10
h 現代経済学科	1.67	0.19	1.11	2.22	4.81	6.11	17.04	25.00	21.67	20.19
i 中国語学科	1.10	0.24	1.22	0.98	3.18	5.50	12.22	24.08	20.29	31.17
j 英語学科	2.41	0.46	1.67	1.20	4.81	3.70	10.56	23.52	23.89	27.78
k 日本語学科	0.66	0.33	0.66	1.33	2.66	2.99	13.62	17.61	26.58	33.55
l 法律学科	0.91	0.13	1.11	1.37	3.98	6.66	17.43	25.52	23.96	18.93
m 政治学科	1.20	0.75	1.35	1.35	3.15	6.75	17.39	25.19	23.24	19.64
n 国際関係学科	1.05	0.35	0.35	1.75	1.40	3.51	9.82	22.46	28.07	31.23
o 国際文化学科	0.88	0.66	1.10	1.77	4.86	3.97	7.06	24.94	24.06	30.68
p 経営学科	0.32	0.49	0.89	2.76	2.84	5.77	15.60	27.86	23.56	19.90
q スポーツ科学科	0.64	0.21	0.21	0.32	2.26	1.93	9.99	22.77	24.49	37.16
r 健康科学科	1.67	0.21	1.05	1.88	5.44	7.95	16.11	21.76	17.36	26.57
s 看護学科	0.65	0.32	0.81	1.29	2.90	6.29	11.61	24.19	19.35	32.58
t 社会学科	0.83	0.65	1.39	1.67	3.98	5.37	13.43	29.17	21.02	22.50
u 教職課程センター	0.86	0.29	0.57	1.15	3.45	5.46	10.63	28.74	27.01	21.84
v 国際交流センター	3.92	0.00	0.00	0.00	0.00	1.96	3.92	5.88	17.65	66.67

学科／部局別の分布を図表 36 に示す。10 (100%満足)の割合を見ると、学科ごとに顕著な違いが見られる。10の割合が最も高かった学科は書道学科の 44.03%であった。30%を上回ったのは 8 学科である。前期は 6 学科、昨年度後期は 5 学科、昨年度前期は 4 学科だったので、アンケートにこの設問を含めて以来最も多かった。

学年別の分布を図表 37 に示す。10 と回答した割合は 4 年生が最も多かった。ただし 4 年生の回答率が 7.46%と極めて低かったことから解釈には注意が必要である。

図表 37 Q8「総合満足」に対する学年別の回答分布

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	1.24	0.51	1.07	1.68	3.85	5.89	14.84	24.44	21.10	25.38
2	1.10	0.27	0.89	1.18	3.03	4.71	12.00	26.22	23.94	26.65
3	0.81	0.27	1.04	1.19	2.76	4.19	12.71	24.12	26.00	26.92
4	1.72	0.00	0.95	0.57	3.44	3.63	13.74	24.43	23.28	28.24

4.3.13 全体的満足度に貢献する要因

授業の大きな目標のひとつは「全体的満足度」を向上させることであると考えられる（もちろん唯一の目標であるという意味ではない）。そこで前回、前々回に引き続き、Q8「全体満足」を目標変数と考えたときに、他のどの変数がどの程度関連しているかを調べた。従来通り Q2 に関しては以下のような変換を行い、この結果を「Q2 難易度[変換]」という新たな変数として使用した（変換式： $y = 5 - 2 * \sqrt{(x - 3)^2}$ ）。

Q2 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。[難易度適切]

- 5 (とても難しかった) → 1
- 4 (やや難しかった) → 3
- 3 (適切だった) → 5
- 2 (やや易しかった) → 3
- 1 (とても易しかった) → 1

まずすべての変数ペア間の相関係数を調べたところ図表 38 のようになった。セルの背景の濃さは相関係数の値の高さを表している。相関係数の一般的解釈に従うならば、.20～.40 は「弱い相関がある」、.40～.70 は「かなり（比較的強い）相関がある」ということなので、「総合満足」との間には、「難易度（変換）」のみ「弱い」相関があり、他のすべての変数には「かなり（比較的強い）」相関があることになる。（サンプルの多さもあり、すべての係数が $p < .0001$ で有意である。）これは従来の結果と同一である。

Q8「総合満足」との相関が最も強いのは「成長実感」($r = .700$)であり、次に「教員熱意」($r = .651$)、「自分意欲」($r = .578$)、「シラバス通り」($r = .547$)、「FB 丁寧」($r = .532$)「対応迅速」($r = .451$)「難易度（変換）」($r = .251$)と続いている。この項目で統計を取り始めたのは 2021 年度前期から始めて今回で 4 回目だが、変数間の相関係数の高さの相対的順位に関して、上位の 3 つ（「成長実感」 > 「教員熱意」 > 「自分意欲」）は一貫して変わっていない。

次に「総合満足」を目標変数、他のすべてを予測変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った²ところ、前回同様、投入したすべての説明変数が保持され、最終的に図表 39 のモデルを得た。

図表 38 変数間の相関

	シラバス通り	難易度[変換]	対応迅速	FB丁寧	自分意欲	教員熱意	成長実感	総合満足
Q1b [シラバス通り]	1.000	0.102	0.408	0.434	0.412	0.516	0.501	0.547
Q2 難易度[変換]	0.102	1.000	0.088	0.106	0.109	0.108	0.169	0.251
Q3b [対応迅速]	0.408	0.088	1.000	0.534	0.322	0.431	0.403	0.451
Q4b [FB丁寧]	0.434	0.106	0.534	1.000	0.407	0.513	0.469	0.532
Q5 [自分意欲]	0.412	0.109	0.322	0.407	1.000	0.517	0.586	0.578
Q6 [教員熱意]	0.516	0.108	0.431	0.513	0.517	1.000	0.627	0.651
Q7 [成長実感]	0.501	0.169	0.403	0.469	0.586	0.627	1.000	0.700
Q8 [総合満足]	0.547	0.251	0.451	0.532	0.578	0.651	0.700	1.000

図表 39 総合満足为目标変数としたステップワイズ重回帰分析の最終モデル

あてはめの要約					パラメータ推定値				
R2乗	0.640886				項	推定値	標準誤差	t値	p値(Prob> t)
自由度調整R2乗	0.640293				切片	-1.252476	0.116407	-10.76	<.0001*
誤差の標準偏差(RMSE)	1.075377				Q1b [シラバス通り]	0.3583924	0.025786	13.90	<.0001*
Yの平均	8.399293				Q2 難易度[変換]	0.1406199	0.011284	12.46	<.0001*
オブザベーション(または重みの合計)	4245				Q3b [対応迅速]	0.1022225	0.020122	5.08	<.0001*
分散分析					Q4b [FB丁寧]	0.1852052	0.023169	7.99	<.0001*
要因	自由度	平方和	平均平方	F値	Q5 [自分意欲]	0.3044305	0.026683	11.41	<.0001*
モデル	7	8744.382	1249.20	1080.214	Q6 [教員熱意]	0.4293708	0.031662	13.56	<.0001*
誤差	4237	4899.816	1.16	p値(Prob>F)	Q7 [成長実感]	0.7303968	0.030764	23.74	<.0001*
全体(修正済み)	4244	13644.198		<.0001*					

² 各変数の分布は正規分布からかけ離れているため、厳密には重回帰分析の前提を満たしていない。

「分散分析」表から、これは「総合満足」の説明として有効なモデルであることがわかる。「あてはめの要約」のなかの自由度調整 R2 乗の値を見ると、このモデルによって「総合満足」の 64.0%（前期は 62.2%、昨年度後期は 65.4%、昨年度前期は 60.8%、）を説明していることがわかる。「パラメータ推定値」を見ると、投入したすべての変数が有意であり、「総合満足」の変化量に対して最も大きな貢献をしているのが「成長実感」である。他の変数もすべて独自の貢献をしながら総合満足につながっている、と解釈できる。

総合満足に与える影響は「成長実感」が最も大きく、かつ他のすべての変数もそれぞれ影響がある、というパターンは過去 3 回実施した結果とまったく同じものであり、安定的なパターンだと考えてよいだろう。「学生がどの程度成長の感覚を持つか」が最終的に最も重要で、「教えることに対する教員の熱意をどの程度感じるか」「学生自身がどの程度意欲的に取り組むか」「提出物に対するフィードバックがどの程度丁寧と感じられるか」「どの程度シラバス通りに授業が実施されるか」「難易度が適切だとどの程度感じられるか」「メールなどに対する対応がどの程度迅速だと感じられるか」などのすべての要素が、どれも学生の総合的な満足につながっているというのは、直観的にも納得のいく結果である。

5. まとめと結論

全学レベルでのおもな結果をまとめるならば、以下のようである。

14. シラバス内容を知っているのは約 75%であった。この数値は前期とも昨年度ともあまり変わらない。
15. シラバス内容を知っている学生は、授業はシラバス通りに実施されたと概ね認識した(最頻値=5、平均値=4.33)。
16. 授業の難易度については「適切だった」という認識が最も多く、次に「やや難しかった」という認識が多かった。前期、また昨年度に引き続き、全体としては概ね適切な難易度設定がなされていると考えられる(最頻値=3、平均値=3.56)。
17. 質問やメールをしたことのある学生は約 21%であった。5人に4人が質問もメールもしたことがないことになる。
18. 質問やメールに対する対応は概ね「迅速である」と認識されていた。最頻値=5「強くそう思う」が44%を占めていたのは満足できる結果であろう。
19. 提出物を出した(授業で提出物が課された)学生は全学で約73%であった。オンライン主体だった昨年度から原則対面の本年度になって提出物を求められる頻度が減ったと解釈できる。
20. 提出物に対するフィードバックは概ね「丁寧である」と認識されていた(最頻値=5 平均値=4.05)。平均値はこれまでで最も高く、全学的にフィードバックが従来よりも丁寧になってきていることが示唆されている。引き続きこの傾向が強まってゆくことが望まれる。
21. 学生は、自身は「熱意・意欲」をもって授業に取り組んだ、と概ね認識していた(最頻値=4 平均値=4.14)。それなりに満足すべき結果ではあるが、最頻値が5「強くそう思う」になるのが理想である。
22. 担当教員は熱意を持っている、と学生は概ね認識していた(最頻値=5 平均値=4.47)。平均値は過去4回の実施で徐々に上昇してきており今回が最も高い。
23. 過去3回の実施で得られた結果と同様、学生自身の意欲の自己認識と、学生が感じる教員の熱意には、強い正の関係が確認された。因果関係は不明ではあるものの、教員の側がコントロールできるのは「教えることに対する教員の熱意(の表現)」だけであるため、教員としては自分が授業に熱意を持っていることが学生に伝わっているかに心を砕く必要があるだろう。
24. 授業を通じて何らかの成長を感じたという認識は多くの学生が持った(最頻値=5 平均値=4.30)。
25. すべてを総合して授業に(概ね)満足だと認識した学生(8~10を選んだ学生)は約74%(前期よりも約3.6

ポイント上昇)。別の表現をするならば全学的に学生の平均満足度は約 82%(前期よりも約 1 ポイント上昇)であった(最頻値=10 平均値=8.20)。

26. 「総合満足」に最も影響があるのは「成長実感」であり、他の要因もすべてそれぞれ影響があることが、これまでの 3 回と同様に今回も確認された。

最後に、全学の傾向は以上の通りであるが、項目によっては依然として学科による違いが顕著である。改善の余地がある部分については学科レベルでのまた教員個人レベルでの取り組みが引き続き求められよう。

以上

4. 各学部・学科によるアンケート結果についての考察

文学部 日本文学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

Q2「自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。」の質問に対する回答が、前期 3.33、後期 3.41 であり、文学部で最も高い数値であった。学生が授業内容について比較的難しく感じていることが理解できた。今後、学科会議や委員会でこの情報を共有し、授業内容や教授方法についてあらためて話し合う必要があろう。

以上

文学部 中国文学科

■Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

本学科は他学科と比較しても、全体的に高数値であることが読み取れた。特に、4（どちらかといえばそう思う）・5（そう思う）の前向きな評価を、Q5の「自分意欲」については【前期 86.59%】【後期 71.43%】、Q6の「教員熱意」については【前期 95.42%】【後期 92.22%】を占めた。前期は、特に教員と学生がよい関係を築けていることが伺える。後期は「自分意欲」が15%も下がってしまったが、学年別の回答分布を見ても全体的に4→3（どちらとも言えない）に回答を変更した様子が伺えた。

■アンケート結果について上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

引き続きの課題としては、成績不振学生の対応である。主任を中心に、クラス担当やゼミ担当教員が、以下の取得単位数の基準にて、個別面談や履修指導を行う方針である。

2年生：取得単位数 22 単位以下・3 年次進級できない者

3年生：取得単位数 60 単位以下

4年生：取得単位数 80 単位未満

以上

文学部 英米文学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

①「【Q1a】あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか。」の質問に「知っている」と答えた学生の割合が英米文学科では約76パーセントであり、大学全体での平均よりも低い。シラバスチェックなどを通して、シラバスの内容が充実するよう試みてきているだけに、肝心の内容が学生に行きわたっていないという点には何らかの改善策が模索されるべきだと考えられる。

②「【Q7】この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。」の質問への回答平均値は4.22であり、大学全体の平均を下回っている。英米文学科が提供する授業を通して学生が獲得する知識の中心は英語力である。大学での学び4年間を通して、継続的に英語力を伸ばすための授業が学生たちに提供されるのが理想であるが、現在のところ、そのための授業が1、2年生には十分に設置されてはいるが、3、4年生に向けたものは充実しているとは言えない。これも、この質問への回答平均値が高くないことの一因だと考えられる。現在、カリキュラム改訂に取り組んでいるところであり、そのなかで改善が目指されている。

その他の質問に関しては、ほぼ学内の平均か、それよりも高い数値が結果として出ている。これはよい状況であるが、他方、突出して高い数値が出ている項目もないことに気づかされる。英米文学科の特色とは何か、これまでも学科内で繰り返し話し合われてきたことであるが、それとも関連づけて、われわれの学科が「ここだけは突出している」と自信を持てる項目を増やしていくことがこれからの課題である。

以上

文学部 教育学科

■Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

- ①アンケート提出率が前期 20.62%、後期 12.02%と全学科平均前期 25.15、後期 15.22 と比べても低い傾向にある。
- ②シラバス内容を知っているかという問いについては、前期 74.93、後期 71.59、全学科平均前期 78.75 と低い傾向にある。
- ③対応迅速度が前期 3.84 と 3.89 他学科と比べやや低い。全学科平均は前期 3.92、後期 4.4。
- ④提出物のフィードバックは、比較的提出物が多い学科であるものの、前期が 3.89、後期 3.83 と他学科に比べやや低い。全学科平均前期 3.95、後期 4.05。
- ⑤総合満足度が、前期 7.91、後期 8.04 と他学科と比べ低い。

以上

文学部 書道学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

- 1, 「Q1bこの授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。」に対して、「図表5 Q1b「シラバス通り」に対する学科／部局別回答分」によると、5「強くそう思う」の割合が最も大きかったのは書道学科で60.00%であった。⇒「シラバスの記述通りに授業が行われた」と分析します。
- 2, 「Q4b提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。」に対して、「図表19 Q4b「FB丁寧」に対する学科／部局別の回答分布」によると、5「強くそう思う」と回答したのが最も多かったのは書道学科で60.92%であった。⇒「提出物に対するFBは丁寧だった」と分析します。
- 3, 「Q5あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。」に対して、「図表23 Q5「自分意欲」に対する学科／部局別の回答分布」によると、5「強くそう思う」の割合が最も大きかった学科が書道学科の60.92%であった。⇒「学生が自分意欲／熱意を強く持っている」と分析します。
- 4, 「Q6教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。」に対して、「図表25 Q6「教員熱意」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差」によると、数値にそれほど違いはないが、最も高かった学科は書道学科の4.66であった。同じく、「図表27 Q6「教員熱意」に対する学科／部局別の回答分布」によると、平均値にはそれほど差がなくとも、5「強くそう思う」の回答割合には学科によって顕著な違いが見られる。5の割合が最も大きかったのは書道学科で75.37%であった。⇒「教員は熱意を持って授業を行った」と分析します。
- 5, 「Q7この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。」に対して、「図表30 Q7「成長実感」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差」によると、学科で最も高い平均値は書道学科の4.58であった。同じく、「図表32 Q7「成長実感」に対する学科／部局別の回答分布」によると、5「強くそう思う」の割合は、書道学科が群を抜いて大きく64.79%である一方、30%台の学科もある。⇒「学生が授業を通じて成長を実感している」と分析します。
- 6, 「Q8すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。（10段階）」に対して、「図表34 Q8「総合満足」の学科／部局別（左）および学年別（右）の平均値と標準偏差」によると、学科で最も平均値が高いのは書道学科の8.86であった。書道学科は値のばらつき（標準偏差）も1.49とスポーツ科学科に次いで小さく、学生がおしなべて高い満足度を持っている傾向が伺える。同じく、「図表36 Q8「総合満足」に対する学科／部局別の回答分布」によると、10（100%満足）の割合を見ると、学科ごとに顕著な違いが見られる。10の割合が最も高かった学科は書道学科の44.03%であった。⇒学生の提出物に対するフィードバックを丁寧に行うことも含めて、教員がシラバス通りに熱意を持って授業を行っています。そして自分意欲を強く持っている学生が授業を通じて成長を実感しています。このような授業展開によって、学生が総合的に高い満足度を持つことにつながっていると分析します。

以上

文学部 歴史文化学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

全体をまとめたデータでもあるので問題を発見しにくいですが、前期・後期ともに、平均値より低いものとしてはQ4a提出物の経験が少ない点がある。筆者の認識では、専門授業においては随時提出物を課している場合が多いのでやや不可解である。どうしてこのような結果になっているのか検証できればしたい。

以上

経済学部 社会経済学科・現代経済学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

前期のアンケート結果について、10点満点で評価した「Q8 総合満足」について、社会経済学科の平均は8.00、現代経済学科の平均は8.02であり、全体平均の8.07と比べるとよりやや低い。原因を考察するうえで、「Q2 難易度適切」「Q4b FB 丁寧」「Q5 自分意欲」の回答が重要かもしれない。

授業の難易度を尋ねた「Q2 難易度適切」の結果を見ると、社会経済学科 (3.75)・現代経済学科 (3.69)ともに平均 (3.60)と比べてやや高い(数値が高いほど「難しい」)。授業を難しいと感じた学生が授業に不満を覚えることはあるだろう。ただし授業の難易度が高くても、教員が良質な「サービス」を提供すれば学生の満足度は高くなり得る。その点で興味深いのは、提出物に対するフィードバックが丁寧だったかどうかを尋ねた「Q4b FB 丁寧」の結果である。社会経済学科 (3.91)、現代経済学科 (3.79)はどちらも平均 (3.95)を下回ったが、スコアは社会経済学科の方が高い(数値が高いほど「丁寧」)。学生に対するフィードバックの丁寧さが、授業に対する満足度を左右している可能性はある。

他方で、経済学部生の満足度が低いのは、そもそも学生のやる気が低いからだという議論も成り立つかもしれない。授業に対して意欲・熱意を持って取り組んだかどうかを尋ねた「Q5 自分意欲」の回答からは、経済学部生の意欲(社会経済学科 4.03、現代経済学科 4.06)が全体平均 (4.12)よりも低いことを見て取れる。もっとも意欲が低いから満足度が下がったのか、あるいはその逆なのかは分からない。また学科の数値と全体平均の差が統計的に意味のある大きさなのかも不明であり、分析上、この点には留意が必要である。

本年度は講義のほとんどが対面方式に戻ったが、昨年度と比べ、学生満足度の大きな違いは見られない。経済学部アンケート結果について、設問によって平均を上回ることもあれば下回ることもあるが、平均値と極端に違うような項目は無い。平均値だけでなく、回答の分布を見ても、経済学部の結果が大学全体の傾向と大きく違うことはないように思える。

後期のアンケート結果について、10点満点で評価した「Q8 総合満足」について、社会経済学科の平均は8.11、現代経済学科の平均は7.91であり、全体平均の8.20と比べるとよりやや低い。原因を考察するうえで、「Q2 難易度適切」「Q4b FB 丁寧」「Q5 自分意欲」の回答が重要かもしれない。

授業の難易度を尋ねた「Q2 難易度適切」の結果を見ると、社会経済学科 (3.57)・現代経済学科 (3.63)ともに平均 (3.56)と比べてやや高い(数値が高いほど「難しい」)。授業を難しいと感じた学生が授業に不満を覚えることはあるだろう。ただし授業の難易度が高くても、教員が良質な「サービス」を提供すれば学生の満足度は高くなり得る。その点で興味深いのは、提出物に対するフィードバックが丁寧だったかどうかを尋ねた「Q4b FB 丁寧」の結果である。社会経済学科 (4.05)は平均と同じだが、現代経済学科 (3.73)は平均を下回った(数値が高いほど「丁寧」)。学生に対するフィードバックの丁寧さが、授業に対する満足度を左右している可能性はある。

他方で、経済学部生の満足度が低いのは、そもそも学生のやる気が低いからだという議論も成り立つかもしれない。授業に対して意欲・熱意を持って取り組んだかどうかを尋ねた「Q5 自分意欲」の回答からは、経済学部生の意欲(社会経済学科 4.05、現代経済学科 3.95)が全体平均 (4.14)よりも低いことを見て取れる。もっとも意欲が低いから満足度が下がったのか、あるいはその逆なのかは分からない。また学科の数値と全体平均の差が統計的に意味のある大きさなのかも不明であり、分析上、この点には留意が必要である。

前期と後期の結果を比べても、学生満足度の大きな違いは見られない。また、経済学部アンケート結果につ

いて、設問によって平均を上回ることもあれば下回ることもあるが、平均値と極端に違うような項目は無い。平均値だけでなく、回答の分布を見ても、経済学部の結果が大学全体の傾向と大きく違うことはないように思える。これらは前期と同じである。

以上

外国語学部 中国語学科

■Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

2022 年度学生による授業認識アンケートの結果について、全学平均値や他学科と比較し、中国語学科が高数値の場合と低数値の場合に分け、以下のように分析する。

1. 高数値

Q5「あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか」について、前・後期とも全学平均の 4.12 と 4.14 を上回り、部局を除く全学科の上位 5 位に入っている。4「どちらかと言えばそう思う」+5「強くそう思う」と回答した学生は前期が 86.14%で、後期が 70.42%であった。全学平均値は上回ったが、後期の数値が 10%以上を落ちたので、学習モチベーションの維持に注意すべきであろう。それに対して、Q6「教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか」について、4 と 5 の合計は前期の 89.71%から後期の 91.46%に上昇している（選択肢 4 と 5 の文言は同上、以下も同様）。全学の上位ではないが、9 割の学生が教員の熱意を感じられ、合格線以上だと言えるだろう。Q7「この授業を通じて『知識が増えた』あるいは『ものごとの捉えかたが深くなった』あるいは『技能が向上した』などの成長があったと思いますか」について、前期・後期どちらも全学の平均を上まわり、前期 4・5 と回答した学生が 87.58%、後期の数値はさらに増え、91.83%の学生が成長を感じたと回答している。一年間の授業を完成してこそ、より成長実感があったと解釈できる。この達成感は学科として喜ばしい結果である。

Q2「自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか」について、中国語学科は前期 3.66、後期 3.58 であり、どちらも全学の平均値（前期 3.60、後期 3.56）を少し上回った。前・後期の最頻値分布も注目したい。前期の最頻値は「やや難しい」（40.34%）であったが、後期の最頻値が「適切である」（45.05%）になっている。「やや難しい」と回答した学生が 38.58%に下がった。新しい授業に入る段階で難しさを感じたが、勉強に慣れてからは自分に合うレベルだと認識したようである。Zone of proximal development 理論から見ると、難易度は「ちょうどよい」の数値が高いほど良いというわけではないので、学科の授業レベル設定がとても良かったと分かる。またレベルによるクラス分けも、役割も果たしたと言える。良い結果であった。

2. 低数値

Q1a「あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか」について、全学では 2「知っている」と回答したのは前期 78.18%、後期 74.96%であったが、中国語学科では前・後期それぞれ 69.76%、68.50%であり、どちらも平均をかなり下回っていた。前期は全学中最も低く、後期も全学科中 3 番目に低かった。シラバスの把握は元々授業を受ける前提であるので、このような低い既知率は大きな問題であると認識する。理由として、必修科目なのでシラバスを読まない、Manaba で公開されている＝学生が読んだとみなす等考えられるが、今後シラバスの周知について、もっと有効な措置を考えなければならない。Q4a「この授業では提出物を出しましたか」について、全学では 2「出した」が 71.91%に対して、中国語学科では「提出したことがある」と回答した学生は半分ぐらい（54.42%）しかない。前期は全学の最低数値であった。後期もほぼ同じく、全学平均の 72.61%を大きく下回り 59.41%で、全学で 2 番目に低かった。対面授業のため、提出物がかなり少なくなったと見られる。また語学の性質で音読や暗誦等、「提出」と言えない課題があるも理由の一つではと推測する。今回のデータだけでは解釈しにくいので、今後引き続きこの問題に注意を払っていきたい。

3. まとめ

中国語学科は授業の難易度がとても適切であり、7～8 割の学生が授業に対して意欲をもって取り組んだ。さ

らに9割の学生が教員の熱意を感じており、一年間の学習で9割以上の学生が成長感を得られている。また総合満足度も後期に上昇していて(8.04→8.31)、いずれも望ましい結果だと思われる。ただシラバスの周知率がかなり低いという問題も明らかになったので、迅速且つ確実な対応措置を講じていきたい。

■アンケート結果について上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

中国語学科 2022 年度授業アンケートの回答率は、前期は部局を除く全学科の4位であり、後期は全学最高であった。学科教員のアンケート実施に対する重視と協力する姿が伺える。それでも回答率は30%以下しかないの、教員だけの努力では限界があると認識した。今後はよりいっそう学生の協力を求めている。

以上

外国語学部 英語学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

英語学科はすべての項目において全学平均を大きく上回ることもしたまわることもない値を獲得している。その点でバランスがとれている学科といえる。

Q1b「シラバスどおり?」:シラバス通りの授業かとの問いに対して、学内でも平均よりもやや劣っている。英語学科では、能力別クラスを実施しており、担当者が用意したシラバス通りにクラス運営が行かない場合が存在する。そのためにシラバス通りに授業が行われていないという学生が一定数存在する可能性がある。

Q4b「FB 丁寧」:昨年度後期は課題に対してのフィードバックが丁寧かどうかについての質問に、学内で5番目に高い学科であり(4.11)、課題に対してのフィードバックが丁寧であると学生が感じていることが明らかになった。今年度は前期と後期ともに昨年よりも数値が下がっていることが気になる点である。

Q5「自分意欲」:昨年後期は授業に意欲的に取り組んだという回答の平均は4.29で、学内で4番目に高い学科であった。今年度はその数値が前期は4.18、後期は4.11と昨年よりも低い数値となっている。授業に取り組む意欲が下がっていることは総合満足度にも関わる重要な要因である。この原因について検討する必要がある。

Q7:「成長実感」:前期と後期の値は平均値の前後の値であった。学生の成長実感は大学内では平均的な学科といえる。昨年は高い値を示していたので、数値が下がった原因について検討する必要がある。

■アンケート結果について上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

学生の総合満足度(Q8)について、前期は平均を少し上回る数値、後期は平均を少し下回る数値であった。標準偏差も大きいことから、満足している学生とそうでない学生の差が大きいことがわかる。定員が多い学科ではあるが、できる限り満足度のばらつきがなくなるように満足していない学生の意見に耳を傾け、改善をしていく必要がある。また、総合満足度(Q8)に関係の深いQ5「自分意欲」とQ7「成長実感」が昨年の数値よりも下がっていることは懸念すべき点である。これらの項目は総合満足度に関係が深いことから、その原因について学科で検討すべきである。

以上

外国語学部 日本語学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

相対的に高い値となったのは、Q1a「シラバス既知」、Q1b「シラバス通り」、Q3b「対応迅速」、Q4a「提出経験」、Q4b「FB丁寧」、Q5「自分意欲」、Q6「教員熱意」、Q8「総合満足」であった。これらの点は、教員側の対応が適切で、それが学生にも伝わったように思われる。試験やレポートの採点後に学生に返却して解説を加えるといった科目もあるので、少人数学科の特性を生かしたきめ細かい指導が実を結んだと言える。

他の項目については、ランキングとしては高位であっても低位であっても、平均値からの誤差の範囲にとどまっているので、他学科と比べてどうであるかという考察を加えるまでもなく、全学的な考察に準ずる。したがって、普通のことの普通認識されたと推測し、学生と教員間の関係は良好であると言える。

以上

法学部 法律学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

(1)シラバス・授業内容について

シラバスの既知度(Q1a)に関しては、「知っている」が前期約76%(78.18%、以下カッコ内の数値は全学平均)、後期約71%(74.69%)と後期の方がやや下がっている。講義がシラバス通り行われているかについて(Q1b)については、前期4.24(4.30)、後期4.29(4.32)とほぼ同水準である。講義を進めていくにあたり、様々な事情で計画通りに行かないことは十分ありうることであるから、そのことを考慮に入れるとQ1bに関する値は、前期・後期ともに適切であるといえ、水準的に見ても全学平均並みである。Q1aに関しては、全学平均よりも低い値となっており、例えば、毎回の講義で全体計画のどのあたりを講義しているのかを示すなどの努力によって改善することが可能か検討する必要があるだろう。授業の難易度については(Q2)、前期3.69(3.60)、後期3.65(3.56)ともに同水準であり、また、値も適切であるといえる。

(2)質問および提出物とそれに対するフィードバックについて

教員への質問やメール連絡の有無(Q3a)については、「したことがある」が前期12.12%(18.24%)、後期14.77%(20.92%)と全学平均より大幅に低い。法律学科では履修者が100人を超えるような講義科目が多いが、こうした大講義科目では教員と学生間に距離があり、質問等に行きにくい環境があるのではないかと推測される(他の社会科学系学部学科でも全学平均より低い傾向が一部にみられる)。今後対応を検討していく必要がある。メールへの返事の迅速さ(Q3b)に関しては、前期3.76(3.92)、後期3.92(4.00)となっている。全学平均より若干低い値になっているが、ほぼ同水準であるといえる。

課題の提出の有無(Q4a)に関しては、「出していない」が前期38.2%(28.08%)、後期39.37%(27.39%)と全学平均よりもポイントが低い。講義でそもそも課題が課されていないことによるのか、課されているが出さなかった学生が多いことによるのか、データ上は判然としないが、各講義で対応を検討する必要がある。課題に対するFB(Q4b)については、前期3.86(3.96)、後期4.05(4.05)と概ね全学平均程度である。もう少し上を目指したい。

(3)学生/教員の授業に対する意欲・熱意及び学生の満足度

学生の授業に対する意欲(Q5)については、前期3.97(4.12)、後期4.01(4.14)、教員の授業に対する熱意(Q6)については、前期4.32(4.45)、後期4.43(4.47)と、いずれも全学平均よりもほぼ同水準であるが、若干低い。教員の熱意はある程度学生には伝わっているようであるが、それに対する学生側の意欲や熱意が若干低い。学生側の意欲を向上させる取り組みを検討する必要がある。なお、授業を通じて「知識が増えた」などの成長が感じられたかといった問い(Q7)に対して、前期4.13(4.25)、後期4.21(4.30)と全学平均並みではあるものの、法律学科の様々な取り組みから考えると、やや低い印象がある。自身の成長を感じられるような取り組みを講義科目においても取り入れることによって、この数字をUPさせていくことが、学生の意欲(Q5)向上にもつながるのではないかと考えられる。そのことが、学生の満足度(Q8、前期7.79(8.07)、後期8.01(8.20))の向上にもつながるものと思われる。

以上

法学部 政治学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

本学科学生の回答率は前期 23.93%、後期 14.27%と推移した（9.66%減）。これは、全学回答率が 25.15%から 15.20%に推移した（9.95%減）のと軌を一にしている。

Q1a（シラバス既知）は後期の肯定的回答が 71.6%で、前期比 4.73%減。後期に減少するのは、必修科目や前期に続く後期の同名科目のシラバスを、読まない学生が一定数いることを推測させる。Q1b シラバス通りの授業だったかの問いには、後期は 84.53%が肯定的に回答し、前期比 0.28%増だが、「強くそう思う」は 3.95%増なので実質的評価は高まった。Q2 授業の難易度は、後期の全学平均 3.56 に対し本学科は 3.58 で、標準的。前期 3.68（全学 3.60）に比べ下降した点は昨年同様で、学生の理解度の向上と、教員の授業上の工夫との、双方の要因があろう。Q3b メール連絡とその回答速度は、後期の全学平均 4.00 を本学科は 3.93 とやや下回るが、前期 3.78（全学 3.92）に比べ改善された。この点も昨年同様。Q5 学生自身の意欲については、後期は 71.90%（前期比 2.49%減）の学生が積極的に（評価 4 と 5 で）答えている。詳しく見ると、評価 4 が 12.33%減少した反面、評価 5 が 9.84%増加し、評価 3（どちらとも言えない）も 5.27%増加した。後期にかけて学修内容が高度化するにつれ、学生の意欲の二極分化が進んだとも解釈される。Q4b 提出物のフィードバック丁寧度は後期の全学平均 4.05 に対し本学科は 4.01（前期比 0.15 上昇）、Q6 教員の熱意については後期の全学平均 4.47 に対し本学科は 4.37（前期比 0.07 上昇）だが、ともに平均値からかけ離れてはいないのは昨年同様である。前年同期比では、前者は 0.04 上昇、後者も 0.04 上昇と、僅かながらも改善された。後期の Q7 自分自身の成長実感についての質問では、84.88%（前期比 2.96%増）の学生が肯定的に（評価 4 と 5 で）答えている。前年同期は 85.77%で前期比 0.82%増であったから、学年末にかけて成長を実感したとする回答の今年度の伸び率は顕著と言える。後期の Q8 総合満足度は 10 段階評価で 7.97（前期比 0.27 上昇）であり、評価 8 以上と答えた学生は 68.07%と、前期比で 5.18%も増加した。これは、前年同期（72.07%）には前期比 4.5%増であったのをさらに上回る数字である。

Q7 において成長を実感したとする後期の回答の対前期比伸び率が顕著であったこと、さらに、Q8 においても評価 8 以上と答えた学生の比率が前年に引き続き（しかも前年にも増して）前期に比べ顕著に増加した事実は、今年度は前年度と異なりほぼ全面的に本来の対面式授業に復帰した事情が後押ししたであろうことを考慮するにしても、政治学科の各教員が、後期において、前期に比べ相対的に高度化した学問内容を学生に着実に伝達し、かつ相対的に多数の学生に前期より高い満足感を与えるような、周到な授業展開を実現したことを示す。大教室講義が一定数あり、教員一人当たりの学生数も多いことをも考え合わせるなら、前年に引き続き、本学科は健闘していると言える。

■Q9a(良かった点)、Q9b(改善すべき点)の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

- ①後期のある授業では、細かいデータなどを紹介して問題点などを議論した。これにより、知らないことや細かいことを理解できた、といったプラスの評価が見られた。どのようなデータを取り上げるか、簡単ではないが、履修生には新鮮な驚きを与えることができたように感じている。

②「人数に比して教室が狭い」とアンケートで指摘された授業において、教員は常にマスクを着用していたにもかかわらず、同じアンケートで飛沫への不安とマイクの使用を訴える意見も寄せられた。新型コロナウイルスが5類に移行した後も一定の学生は感染に対して不安を覚えながら授業を受けるであろう。この授業が行われていた定員72名前後の教室でマイクを使用することは多くの教員にとってあまり効果的でないことなどを考えると、できる限り、受講者数が教室の収容人数の上限に近い数字にならないようにする必要があると思われる。

以上

国際関係学部 国際関係学科・国際文化学科

■Q1a～Q8 の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

アンケートへの回答率は、例年通り国際関係学科、国際文化学科ともに他学科に比して高位に位置している。しかし、それでも 19 パーセント台であるので、引き続き学生に対しアンケートへの回答を促し、回答率を上昇させていきたい。また、Q1b「シラバス既知」でも、両学科ともに「知っている」の数値が高かった。シラバスは、学生が 4 年間で何をどう学ぶのかを考え、計画的な履修を行なうために重要な情報であるので、引き続き新入生ガイダンスからシラバスの内容を網羅的に確認することを指導していきたい。

一方、他の項目での回答に関しては、数値がおおむね中位に位置しており、他学科との差異が見られなかった。他学科に比して低いわけではないが、これまで Q5「自分意欲」、Q6「教員意欲」、Q7「成長実感」、Q8「総合満足」の数値は高位を示していたため、本年度はそれが低下したことになる。しかしながら、講義内容や指導に特に変化があったわけではなく、また学生からの不満やクレームも生じていないので、その理由に関しては思い当たるところがない。これらの項目については、今後の推移を含めて考察し、改善に努めたい。

以上

経営学部 経営学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

Q1a「シラバス既知」Q1b「シラバス通り」については、前期後期とも全学の平均とほぼ同水準またはやや上回る水準にあり、学生—教員間でシラバスに基づく授業内容の合意のもと計画的な授業運営が行われている。

Q2「難易度適切」については、全学平均よりやや難しめに感じられたようだが学科の最頻値は前期後期とも3点であり、おおむね適切な難易度設定であった。

Q3a「メール連絡」には対面教室での質問も含まれるが、前期後期とも全学平均より低い値であった。Q3b「対応迅速」の値も全学平均より低いが、迅速でなかった（2または1）と回答した学生は僅少であり、期内でも前期と後期とでは後期に改善された。

Q4a「提出経験」は、全学平均より高いが、Q4b「FB 丁寧」がやや低い。丁寧でなかった（2または1）と回答した学生は少ないものの、大人数講義でのFBに一定の難しさがあると考えられる。

Q5「自分意欲」は、前期後期とも全学平均とほぼ同水準であるが、他学科と比べてトップボックスの比率（およそ30%）がやや低く見受けられる。

Q6「教員熱意」は、全学平均とほぼ同水準であるが、前期と比べ後期はやや高く評価された。

Q7「成長実感」は、全学平均とほぼ同水準であるが、前期と比べ後期はやや高く感じられた。

Q8「総合満足」は、前期は全学平均よりやや低く7点台であったが、後期は8点台に向上した。

全学FD委員会による2022年度後期の全体分析結果からも、「総合満足」には学生のQ7「成長実感」、Q6「教員熱意」、Q5「自分意欲」が正の影響を比較的強く与えることが示唆されている。

本学科にて「成長実感」をさらに高めるには、学生と教員のインタラクションを工夫することが重要と考える。2022年度は大人数講義でも原則として対面授業が再開されたにもかかわらず、質問等（Q3a）によるインタラクションが顕著に増えた様子うかがえなかった。年度内では、課題のQ4a「提出経験」が前期と比べて後期は高まり、Q4b「FB 丁寧」も前期と比べて後期にやや高まっているが、授業企画・運営にあたっての工夫の検討を教員に引き続き呼びかけていきたい。

経営学科の学生のQ5「自分熱意」について、あえていえば、トップボックスの回答比率が他学科と比べて低いことがやや気になる。ここには、経営学科の学修領域が広範にわたるなかで、学生各自の学修目的意識が十分に明確化・具体化されていない可能性が潜んでいるかもしれない。学生にはこれまでも、各種ガイダンスや基礎演習、コース選択、専門演習（ゼミナール）選考などの機会を通じて働きかけをしてきているが、学生それぞれによって異なるはずの学修目的意識や学修計画をできるだけ明確にするように学生に呼びかけることは、日常的継続的に求められることかもしれない。

なお、今年度も学生の回答率は低水準（前期21.6%、後期11.5%）であり、回答率を向上させる課題を改善できなかった。働きかけをさらに強めることを検討したい。

以上

スポーツ・健康科学部 スポーツ科学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

スポーツ科学科学生のアンケート回答率が、前期 20.06%（全学科中 16/20 位）、後期 14.33%（同 14/20 位）と非常に低い状況である。スポーツ科学科だけに限った事ではないが、学生の回答率が低く、このアンケートに回答している学生は、そもそも学業や課外体育など様々な活動に対しての意識が高いのではないかと考えられる。来年度以降も実施するのであれば、学科全体の課題として、今以上に教員から学生に呼び掛けをしていき、回答率をもっと高められるようなアナウンスの必要性を感じている。

Q2「授業の難易度」については、前・後期共に、平均値が最も3に近かった（授業難易度が適切）という結果となり、今後も学科全体として学生の理解度の高い授業展開を目指したい。学科の特性上、実技科目が多く、実技に対する難易度や理解度という観点から見ると、学生たちの実技に対する適応能力の面でも適切であったと推察される。回答分布で見ると、やや難しいと回答している学生が、前期の 19.80%から後期は 26.48%に上昇している。前期の基礎科目から後期の発展科目へと繋がっていく授業もありそのあたりの影響も考えられる。また、この設問では、授業の難易度について「とても易しい」と回答している学生が、前・後期共に他学科と比較して多いことから、希望する学生に対してはより高度な技術・知識を伝達する機会を準備するという点について検討が必要である。

Q4b [FB 丁寧] については、比較的低評価であった。本学科の学生アンケートは、比較的ネガティブな要素が少ない傾向にあると考えられるが、ここでは「丁寧」という表現がどの程度を指すのかについての学生間の認識の差が表れているように考えられる。スポーツ科学科の授業では、実技の対面授業をはじめとして個別に「丁寧」なフィードバックが得られる機会が多くあり、回答者が授業内の提出物についても同様の（手取り足取り指導するような）「丁寧」さを求めているとすると、数値としては低い傾向になると推定される。1(まったくそう思わない)前期 1.71%、後期 1.59%、2(どちらかと言えばそう思わない)前期 1.71%、後期 1.88%と感じる学生がいることも事実であり、全学的に見て低い割合であるとしても、このような回答に至る対応を改善していくことが必要だと思われる。

Q5の「自分意欲」で本学科は、前・後期共に高い平均値（全学科中 2/20 位）であったが、回答分布に目を向けてみると、5の割合が前期の 53.26%（同 1/20 位）から、後期は 34.93%（同 16/20）へと急落している。これは前述した難易度の点で前期より後期の方がやや難しく感じている学生が増えたことに関連するかもしれない。今後は、学科全体としてより一層、学生の理解度を高める授業を展開していくと共に、授業の難易度が易しく感じられる学生に対し何らかのフォローをすることによって、学生が授業に対してより高い意欲を保つ助けになると考えられる。また、前期は、感染症対策を徹底しながら原則対面授業を実施したこともあり、学生たちにとって待望の完全対面授業ということで熱意や意欲が高まっていたのかもしれない。

Q6の「教員の熱意」について学生から評価されているように、学科全体として熱意をもって教育活動を行っている。報告書にある「教員熱意の数値が高いほど、自分意欲の数値が高くなる傾向があることを示している。」「教員から感じる熱意が学生の意欲を引き出している可能性も大きい。」という分析を基に、学生の期待に応えるべく、より一層の熱意を持った学科運営を展開したい。

Q7「成長実感」については、前・後期共に高い平均値を示し、学生が成長実感に満足しているという結果となったが、他学科の平均も高いことから見ると、これはスポーツ科学科のみならず各学科の教員が、対面授業が再開した中で、学生により伝わりやすく理解しやすいように工夫した結果なのではないかと考えられる。回

答分布に目を向けてみると、5「強くそう思う」が前期 51.18%（全学科中 5/20 位）から後期 55.48%（同 2/20）と上昇している。実習や発展科目が増え、より一層成長を感じられたのではないかと推察される。

Q8「総合満足」について、平均値で見ると前期 8.6（全学科中 3/20 位）から後期 8.7（同 2/20）と上昇している。回答分布に目を向けてみると、10（100%満足）の割合が、前期 39.33%（全学科中 2/20 位）、後期 37.16%（同 2/20）と高く喜ばしいことである。

4.3.13 全体的満足度に貢献する要因に記載されているように、すべての要素が重要であるが、前・後期共に「成長感覚」「教員熱意」を高めていくことが、学生の「総合満足」の上昇に大きく貢献することが、示唆されたことは非常に興味深いものである。特に、「成長感覚」をキーワードに学科運営に取り組んでいきたい。

■アンケート結果について上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

全学的に学生の回答率が低く、来年度以降も実施するのであれば、全学科の課題として、今以上に教員から学生に呼び掛けをしていき、回答率をもっと高められるようなアナウンスの必要性があると思われます。

以上

スポーツ・健康科学部 健康科学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

健康科学科学生のアンケート回答率が、昨年度後期 14.04% (全学科 19 位/21 学科)、本年度前期 22.18% (全学科 17 位/20 学科)、本年度後期も 11.43% (全学科 20 位/21 学科) と、非常に低く、学科教員、学生への『評価の重要性』に対する意識涵養の必要性を感じている。次年度への重要課題としてしっかりと申し送りをしたい。

また、シラバスに関する質問項目、Q1「シラバスの既知」に関しては、「知っている」と回答した学生の割合は、昨年度後期については、78.62%と平均値を下回っていたが、本年度は、後期 82.01% (前期 79.34%) と、後期については平均値 (74.96%) を上回る結果となった。同学部内の看護学科が後期 89.73%と、既知割合が全学科中一番高い結果となっているが、その水準に達するように、シラバス活用について教員側の働き掛けについても、引き続き健康科学科の教学上の課題としたい。

ところで、健康科学科は、本学においては数少ない自然科学系を主とした学科であることは周知のとおりである。本年度から、3コース制(臨床検査、健康マネジメント、理科)を展開することになっても、実験・実習は学科の礎であり、学習量の多いことが自然科学系の学科の特徴とも言える。一方で、入学時点での自然科学系の知識・理解量に関して、そのレンジが広く、健康科学科では、入学から前期の終了時まで、化学、生物の補習授業・リメディアル教育は欠かせない。

以上のような学科の実情に鑑みてアンケート結果を考察すると、Q2「授業の難易度の適切性」については、「4・難しかった」「5・とても難しかった」の合計が、前期 61.93%・後期 62.14%であり、学生にとって、「授業は難しい」ものであることが示唆された。他の学科と比較をしても「授業がとても難しい」と感じている学生の割合(前期の平均点は 3.82 点と全学科中 1 位)は、看護学科とともに極めて高く、リメディアル教育だけに頼るのではなく、「分りやすい理科系授業を如何に実現するかをテーマとした FD」の実施など、次なる一步を踏み出す必要性を感じている。

ところで、気になるアンケート項目の結果は、昨年同様、Q4「課題の提出経験」である。健康科学科では、実験や実習が多く「課題提出は必至」とも言える。しかしながら、アンケート結果では、昨年度後期「88.15%」から、本年度前期「73.47%・11 位/20 学科」、本年度後期「70.38%・13 位/20 学科」と大きく減退している。コロナ禍におけるオンライン、オンデマンドの授業形態から原則対面の授業に切り替わったことが影響しているかも知れないが、何故このような低値になるのか原因を確認する所存である。

また、昨年度後期の平均点が、4.26 点(全学科中 5 位であり、その内訳「4. どちらかと言えばそう思う、5. 強くそう思う」の割合が、86.93%)であった Q5「自分意欲」についての平均得点が、本年度前期 4.18 点、後期 4.13 点(13 位/20 学科)と低下については、看過できない。「4. どちらかと言えばそう思う、5. 強くそう思う」の割合も、後期 64.18%と大きく低下している。

本年度、対面の授業に戻ったことで「学びに向かう意欲」は向上すると予想をしていたが、本アンケート結果は、その予測を否定するものでもある。健康科学科の学生にとって、対面による実験や実習をとおして、専門的な知識・技能の深化が進むことは間違いない。つまり、対面の授業は、健康科学科にとって生命線でもあるため、昨年より「学生自身の学びに向かう意欲」が低減した事実は、本当にショックでもある。3年間続いた新型コロナウイルスの影響により、実験に参画して知識を再構築する過程に対して、学生自身が億劫になっている可能性も否定できないが、この点についても原因究明は必至である。

更に、昨年度、その平均点（後期）が高位であった、学生の Q7 「成長感覚の高さ」（昨年度・平均点 4.35 点、全体の 5 位、項目 4、5 の合計割合・88.63%）についても、やはり平均点が、前期 4.29 点、後期 4.26 点、後期項目 4、5 の合計割合についても同様、86.20 点と低下を来した。

最後に、学生の総合満足度であるが、前期平均 8.13 点、後期平均 7.96 点と昨年の平均 8.41 点（後期）から、特に後期については大きく後退をする結果となった。評価点 7 以上も、昨年後期の 90.78%から、本年後期 81.80%と 10 ポイント近く減少している。本年度は、反省すべき点が殆どと言っても過言ではない。学科内で共通認識の醸成を図らなければならないと痛感している。

■Q9a(良かった点)、Q9b(改善すべき点)の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

まとめて「お纏めを戴いた部分」については、やはり重要な視点だと感じる。学生並びに授業アンケートを踏まえて、もう一度「お纏め戴いた部分」を咀嚼し、学科内で共有したい。

■アンケート結果について上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

授業認識（学生・教員）アンケートを確認させて戴き、本学科についても様々な問題点・課題が浮き彫りになった。本調査の詳細な分析に感謝したい。

以上

スポーツ・健康科学部 看護学科

■Q1a～Q8の中で貴学科において気になった数値などを取り上げて、全学平均値や他学科との比較などの観点から分析し、記述してください。

Q1a、Q5、Q7について分析した。

・授業を受講する上での、シラバスの理解『Q1a あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか?』については、講義科目 A は 1.75 (全学平均 1.75)、実習科目 A2.00 (全学平均 1.75) であり、ランダムに選んだ講義科目 a は 1.83 (全学平均 1.75) に対し実習科目 a は 2.00 (全学平均 1.75) であった。全学と比較し、授業・実習ともに平均以上であった。授業展開に関する理解および関心については、全学との大きな差は見られず、授業の進め方を理解して授業に臨む点については、良好であると考えられる。特に、実習は事前学習を必須としており、このためのシラバスの理解が必要となり、シラバスを確認したものと考えられる。また、実習は3年次科目であり、2年次の講義科目と比較すると、学生の学習者としての授業の臨む姿勢の成長がこの結果となったとも考えられる。

・『Q5 あなたはこの授業に対して意欲/熱意を持って取り組んだと思いますか。』については、2年次の前述の講義科目 A は 4.00 (全学平均 4.14)、3年次の実習科目 A5.00 (全学平均 4.14) であった。同様にランダムに選んだ前述の講義科目 a は 4.00 (全学平均 4.14) に対し、実習科目 a は 4.50 (全学平均 4.14) であった。また、『Q7 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。』については、講義科目 A4.00 (全学平均 4.30)、実習科目 A5.00 (全学平均 4.30) であった。同様にランダムに選んだ講義科目 a は 4.00 (全学平均 4.30) に対し、実習科目 a は 5.00 (全学平均 4.30) であった。

上記の結果より、学習意欲が知識の獲得や思考力・判断力の向上への実感と関連しているものと考えられる。また、学年進行により学生の学習者としての成長が学習意欲の向上に関連していることも考えられる。以上のことから、低学年から学生の学習意欲をどのように育成するかという課題があると考えられる。また、より主体的・積極的な学修を求められる実習科目の授業展開の方法について、低学年の講義科目においても、その工夫などを導入することも検討の余地がある。今後の学科内での検討課題としたい。

■Q9a(良かった点)、Q9b(改善すべき点)の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】

・実習科目において、『アセスメントの不足部分について、考えるきっかけをくださるとともに考え方のヒントをくださり新たな考え方を得ることができた。』『新生児期の講義でレジメを穴埋め方式にわかりやすくまとめていた。』という回答があった。

学生の思考を促す発問が、有効に作用していることを示している。特に、臨地実習場面は学生一人一人の受持つ事例が異なること、テキストには示されていない患者特有かつ非定型な症状があるため、担当する教員の教育力により、学生の知識や判断力の向上の実感に大きく差が生じるものとも考えられる。教員の不断の努力と更なる教育力の向上も必要となるが、教員にも個人差があり各領域がチームとして教育にあたることも必要となるものと考えられる。

・実習科目において、『今回は学内実習で直接患者と関わることはなかったが、演技力抜群の先生方のおかげで

臨地を意識しながら実習に臨めた。』『アセスメントから看護計画に至るまでとても丁寧に説明していただいた。自分が見落としていた点を明確にさせていただいたことで物事の見方が増えたり、アセスメントやケアの方向性について考えたりすることができた。』との意見があった。

COVID-19の影響により、臨地での実習を体験できない科目が多くあったが、臨地での臨場感を持たせられるように行った教員の工夫によって、学生は緊張感を持って学修に取り組めることが示されている。また座学では体験できない臨地での学習経験により、新たな側面からの知識や技術の修得の機会を得ていることがわかる。COVID-19が感染症法第2類から5類に2023年5月以降変更されるが、臨地実習の体験が十分に行えるのかは明確ではない。今後、臨地実習の受入れ状況も踏まえた上で、臨場感のある学内実習を検討したい。また、このような学内実習の展開は、今後の学内演習においても必要であると考えられる。

■アンケート結果について上記以外でお気づきのことがあれば、記述してください。

授業評価アンケートは、各教員が自己の授業について振り返る機会となるが、どのような授業がなされ、学生はどのように受け止めているのか意見交換をする場が殆どない。特に看護学科は、看護師養成を行うという職業教育でもあることから、各科目が密接に関連する。授業の質の改善のためには、教員の教育方法・対応力の更なる向上が必要であり、教員間の授業や学生の学修状況などについて、情報共有およびFD活動の機会など、学科全体での取組みを継続的に行う必要があると考える。

以上

社会学部 社会学科

【総括】

全体として web 回収率が 15.20%（前期 25.15%、2021 年度前期 29.70%、同後期 16.99%）と低いなかで、社会学科は回答率 20.12%（前期 35.32%）であった。全学科のなかで 20%を超えているのは、中国語学科（22.22%）と本学科の 2 学科だけであった。とはいえ、本学科も前期に比べると回答率が低下していることから、アンケートに対する学生の意識を高めると同時に、教員からも積極的に働きかける必要がある。

社会学科は、【Q2】「自分にとってこの授業の難易度」、【Q3a】「授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか」、【Q3b】「質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか」の 3 つにおいて、全学の平均を上回る結果であったが、それでも社会学科の前年度に比べると僅かに低下している。それ以外の項目では全学の平均程度であった。ただし【Q8】「総合満足」においては、下位より数えて第 6 位の学科であり、学生が入学前または在学中に抱いていた期待に応えられていない可能性がある。今後は、前年度の結果とも比較しながら個々の結果に対してより詳細な分析を行い、学生の意欲・満足を高める授業運営が出来るように授業の質を高めていきたい。

【Q1a】 あなたはこの授業のシラバス内容を知っていますか？

全学では「知っている」と回答したのは 74.96%（前期 78.18%）に対して、社会学科では 68.83%（前期 74.74%）であった。前年度と比べて 5.91 ポイント下がっていた。全学でみても低下傾向にある。今後は学生達がシラバスをしっかりと読み込んだうえで、科目選択をするように履修指導を行っていきたい。

【Q1b】 この授業はシラバスの記述通りに行われたと思いますか。

この設問には Q1a で「知っている」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は 4.33（前期は 4.30、昨年度後期は 4.32）である。社会学科での平均値は 4.29（前期 4.25）であった。回答別にみると、「強く思う」（43.54%）、「そう思う」（45.44%）と回答した人の割合は 88.98%（前期 88.42%）で、授業が概ねシラバス通り行われていたと言える。

【Q2】 自分にとってこの授業の難易度は適切だったと思いますか。

全学の平均は 3.56（2021 年度後期 3.58）であり、「ちょうどよい」と「やや難しい」の間に平均があることを示しており、社会学科では 3.60（前期 3.58）で平均通りであった。難易度別にみると「とても易しかった」、「易しい」が 2.78%で、「適切だった」と回答した人は 47.96%であった。その一方で「やや難しかった」と回答したのは 35.62%（前期 40.34%）、「とても難しかった」と回答したのは 13.64%（前期 10.77%）であった。特に、「とても難しかった」が前期と比べると 3%近く増加している。今後はこの 1 割強の学生に対して対応を検討していく必要がある。

【Q3a】 あなたはこの授業で教員に質問やメール連絡をしたことがありますか。

全学では「したことがある」と回答したのは 20.92%（前期は 18.74%）であった。学科によって回答結果に差がある。社会学科は、「したことがある」と回答したのは 21.10%（前期 18.36%）であり、前期よりは増加しているが、概ね平均通りである。

【Q3b】 質問やメール連絡に対する対応は迅速だったと思いますか

この設問には Q3a で「メールで連絡をしたことがある」と回答した学生のみが回答した。全学の平均は 4.00（前期 3.92）であった。社会学科は、4.10（前期 4.01）であり、全学の平均よりやや上回っていた。回答別にみると「強く思う」46.63%、「どちらかと言えばそう思う」22.09%で、合計 68.72%（前期合計 65.04%）で 3.68%増加しており、改善傾向にあると言える。「どちらとも言えない」が 27.30%（前期 27.53%）、「どちらかといえばそう思わない」2.45%（前期 5.24%）、「まったくそう思わない」1.53%（前期 2.20%）であった。前期に比べると改善されたと言える。特に前期は「どちらかといえばそう思わない」が 5.24%と全学科で最も高い結果であったが、後期は 2.45%に半減していることから多少の改善はみられるが、今後はさらに迅速な対応を意識する必要がある。

【Q4a】 この授業では提出物を出しましたか。

全学では、「出していない」27.39%、「出した」72.61%である。原則対面授業であったことから、オンライン授業が多かった昨年度よりも提出物を課される率がやや減った。社会学科では、「出した」が 71.11%（前期 72.88%・2021 年度前期 93.84%）であり、全学平均よりも低い。前期よりもわずかに減少している。特に前年度前期は看護学科に次いで提出物を課す割合が高かったが、対面授業に戻ったことで通常の状態に戻ったと考えられる。

【Q4b】 提出物に対するフィードバックは丁寧だったと思いますか。

課題提出のフィードバックの丁寧さについて、全学平均 4.05、前期は 3.95、2021 年度後期 4.01、同前期 3.97 であったので、徐々に数値が高くなっている。社会学科は 3.97 と全学平均より低い。「強くそう思う」41.11%（前期 35.08%）、「どちらかと言えばそう思う」36.73%（前期 33.25%）と合わせると、69.98%であり、前期から僅かな改善がみられる。「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思わない」「まったくそう思わない」の合計は 22.16%であり、前期の同合計 31.68%から減少していることは良い傾向ではある。しかし、2割が満足している回答でなかった点は今後も課題である。

【Q5】 あなたはこの授業に対して意欲／熱意を持って取り組んだと思いますか。

全学の平均は 4.14 で、ほぼ前期および昨年度と同様であった。社会学科は 4.05（前期 4.07）であった。社会学科は「強く思う」と「どちらかと言えばそう思う」の合計は 77.84%（前期 80.34%）であった。前期と比べると 2.5%の低下がみられることから、今後学生の様子を注視しながら、授業内容の工夫をする等の検討が必要である。

【Q6】 教員は熱意を持ってこの授業を行ったと思いますか。[教員熱意]

全学の平均は 4.47（前期は 4.43）であった。社会学科は、4.45（前期 4.42）であり全学の平均を若上回っていた。この熱意の割合を見ると、社会学科は「強くそう思う」（55.28%）、「どちらかと言えばそう思う」（37.04%）と合わせると、92.32%であり、教員は熱意を持って授業を行っていることが伺えた。

【Q7】 この授業を通じて「知識が増えた」あるいは「ものごとの捉えかたが深くなった」あるいは「技能が向上した」などの成長があったと思いますか。

全学の平均値は 4.30（前期は 4.25）で、社会学科では、平均値 4.24（前期 4.24）であった。社会学科の「成長感覚」について、回答別に見てみる「強く思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合計した割合は 87.68%（前期 87.58%）であり、前期に引き続いて後期も「成長感覚」を維持しているわかる。その一方で、「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思わない」「まったくそう思わない」の合計が 12.32%で、約 1 割

が「成長感覚」を実感していないことが浮き彫りとなった。この1割に対して学習意欲の改善などの手立てが必要である。

【Q8】 すべてを総合して、この授業に対してどの程度満足しましたか。10を「100%満足」、1を「10%満足」として10段階で最も近いと思われるものを選んで下さい。[総合満足]

全学の平均値は8.20（前期は8.07）、で前期より平均値が僅かだが上昇していた。社会学科の場合は、前期と同様に8.07と総合評価は維持していた。その内訳を見てみると「10」が22.50%、「9」が21.02%、「8」が29.17%と「8」以上が7割を占めていた。「6」以下が、13.88%であった。

以上

5. おわりに

以上が2022年度に実施した「学生による授業認識アンケート」の全容である。全学的な傾向については3. 結果で、個別の傾向や課題については4. 各学部・学科によるアンケート結果についての考察でかなりの程度明らかになっているように思われる。その上で今後の全学的な課題としてふたつを指摘したい。

ひとつは言うまでもなく回答率の向上である。前期の回答率は約25%、後期の回答率は約15%に過ぎなかった。学科ごとに違いはあるものの、このように低いレベルの回答率では結果の一般化可能性には厳しい限界がある。アンケート結果解釈の妥当性の向上のためには回答率の向上が重要な課題ではある。かといって旧来の紙媒体によるアンケートを授業時間内に実施する方式に戻るのには実施と結果集計の時間とエネルギーのコストを考えれば得策とは言えない。Web回答方式を維持するという前提で考えれば、一般化可能性の限界は甘受しつつこれまでどおり基本的に授業外での任意回答が多い状態を続けるのか、思い切って原則としては授業時間内において出席者全員に回答を提出させる方向に変えてゆくのか、ふたつにひとつの選択を迫られているのではないだろうか。もし後者を選択する場合、学内のWi-Fi環境のさらなる増強が必要となるかもしれない。

もうひとつは、全体的な総括からは見えてこない個別授業に関する自由記述から得られた示唆についての、教員間での共有がおそらく十分でないということである。それぞれの教員は各授業について受講者から「良かった点」「改善すべき点」についての意見が書かれていれば、それを読んでそれについてのコメントを書いているはずである。しかしそれはシステム的には「閉じた」ものであり、当該授業の担当教員と受講学生のみが読めるに過ぎない。しかし限られた数の設問に対する5段階リッカート尺度(5/4/3/2/1)の回答には現れない学生の「リアル」が自由記述には含まれていることも多いと考えられる。そこから得られる示唆は当該教員個人に留めず学科内等で共有に努めることがめざすべき方向ではないだろうか。

各学部・学科に対してアンケート結果についての考察を依頼する中に、「Q9a(良かった点)、Q9b(改善すべき点)の自由記述回答部分から感じられたことなどについて授業担当者の自由意志に基づく範囲において学科内で共有する機会があれば、そこから今後の授業改善に向けて得られた示唆について記述してください。【オプション】」というものがあるが、この部分について記述のある学科は現状では少ない。その中で今回、政治学科、健康科学科、看護学科からはこの設問に対する記述があり、学科内で情報共有・意見交換がなされたことが伺える。授業改善のための教員の意見交換を行う場を学科内で設定してゆく動きが全学的に広がることを期待したい。

以上

資料

1. 大東文化大学全学 FD 委員会規程

(目的)

第1条 この規程は、大東文化学園内部質保証推進委員会及び学部・大学院と連携をとりつつ、大東文化大学における教員の教育の内容及び技法の改善、その他研究活動、社会活動等における教員の資質の向上を組織的に支援することを目的とする。この目的達成のため、全学FD委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(任務)

第2条 委員会は、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事項を審議検討し、実施することを任務とする。

- (1) 本学の教員の教育活動、研究活動、社会活動等に対するFDの視点からの分析及び提言、並びにこれらの効果に関する諸調査の企画、実施及び分析
- (2) FDに関連する学内外の情報収集とその普及等の広報啓発活動
- (3) FDに関する講演会、研究会その他の企画及び開催
- (4) 「学生による授業評価」の策定及び実施、授業評価結果の分析、並びに授業評価結果報告書の作成及び公表
- (5) 授業評価結果の有効活用その他授業改善に関する取り組みの支援
- (6) その他、委員会が必要と認めた事項

(組織)

第3条 委員会は、次の委員をもつて構成する。

- (1) 学長又は学長が副学長の中から指名した者 1名
- (2) 各学部が選出する者 各1名
- (3) 各研究科が選出する者 各1名
- (4) 学長が指名する者 若干名

2 委員会の委員長は、前項第1号に定める者とする。

3 委員会に副委員長を1名ないし2名置く。副委員長は委員会の同意を得て委員長が指名する。

4 副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故があつた場合は、委員長の職務を代行する。

5 委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

6 委員が欠けたときの後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

7 委員会は必要に応じて委員以外の者に同委員会への出席及び発言を求めることができる。

(運営)

第4条 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

2 委員会は、委員の過半数の出席がなければ、議事を開き、議決することができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数でこれを決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(専門部会)

第5条 委員会は、第2条の任務を遂行するにあたり、必要に応じて専門部会を設けることができる。

2 専門部会には、委員以外の協力委員を置くことができる。

(事務局)

第6条 委員会に関する事務は、学務部学務課が担当する。

(規程の改廃)

第7条 この規程の改廃は、学長がこれを行う。

附 則

この規程は、平成18年5月15日から施行する。

附 則 (平成21年6月15日)

本規程は、平成21年6月15日から施行する。

附 則 (平成22年2月22日)

1 この改正規程は、平成22年4月1日から施行する。

2 この改正規程の施行に伴い、大東文化大学学生による授業評価実施委員会規程は、平成22年3月31日をもって廃止する。

附 則 (平成27年3月18日)

この規程は、平成27年4月1日より施行する。

附 則 (平成31年2月25日)

(施行期日)

1 この規程は、平成31年4月1日より施行する。

(規程の改正及び名称の変更)

2 平成18年5月15日制定及び施行の「大東文化大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規程」を改正し、名称を「大東文化大学全学FD委員会規程」に変更する。

附 則 (令和元年10月28日)

この規程は、令和元年10月28日から施行する。

2022 年度『学生による授業認識アンケート』実施要項

1. 目的

履修学生の授業に対する認識を調査することで、授業の内容や方法の改善に役立てるために実施する。

2. 対象科目

- (1) シラバスに記載されている開講科目（大学院の科目を除く）。但し、受講者が 5 名未満の科目、オムニバス科目、専門演習科目（ゼミ）については対象外とする。
- (2) 本アンケートは前期および後期に実施いたします。前期実施時は、前期科目（前期前半・前期後半含む）を対象とする。後期実施時は、通年および後期科目（後期前半・後期後半含む）を対象とする。
- (3) 実施対象科目を全学 FD 委員会にて選定し、各学部学科にて精査したうえ決定とする。
- (4) 教員より希望があった場合にはアンケート実施科目の追加または削除について、全学 FD 委員長と協議のもと個別対応とする。

3. 調査項目

- (1) Web 方式 C-Learning 上で、選択式項目を基本とし、加えて自由記述欄を設ける。
- (2) 任意で教員独自の設問（個々の教員が受講生から意見を聴取したいと思う内容）を設けてもよい。独自の設問を実施する際は、設問を提示または配信して学生に周知する。

4. 回答期間（当該教員は随時結果閲覧可能）

前期 2022年7月11日（月）～7月23日（土）対象科目：前期科目（前期前半・前期後半含む）

後期 2022年12月5日（月）～12月17日（土）対象科目：通年・後期科目（後期前半・後期後半含む）

5. 実施方法

Web 方式 C-Learning にて実施。可能な限り方法 A で実施し、不可能な場合は方法 B による。

方法 A：実施期間内のどこかの授業内の 10 分程度を使って実施する。

方法 B：アンケートの QR コード等を提示/配信した上で、実施期間内（上記4）の回答を促す。（この場合、実施期間途中で回答率をモニターし、必要に応じて回答をリマインドするとよい）

6. 結果の閲覧と集計

- (1) 担当教員は、回答期間終了後は、各自のデバイス（PC/スマートフォンなど）上で、自身の授業の集計結果および自由記述内容を確認する。
- (2) 全学 FD 委員会は、全学的な集計結果をまとめ、その分析方法を検討する。

7. 結果の取扱い

アンケートの結果を、担当教員に対する管理の強化や不利益な取扱いに利用することはしない。

8. 結果の公表と活用

- (1) 担当教員は当該授業についての数値結果および自由記述についての具体的なコメントを C-Learning 上に掲載する。このコメントは当該授業の履修者が閲覧可能とする。
- (2) 上記の全学的集計結果の数値部分については『報告書』に掲載し、その『報告書』は、学生を含め学内に公開される。
- (3) 自由記述欄の内容は『報告書』に記載せず、今後の授業の参考資料として活用する。
- (4) 外部への公表および活用については、全学 FD 委員会の責任において、本学ホームページへの掲載等を含め、必要に応じて行う。ただし、設問内容によっては、外部には公表しない。

以 上